滿鐵調査資料 第三編

察哈爾を中心とせる

# 漢蒙兩族鬪爭史

前編

南滿洲鐵道株式會社

總務部調査課

察哈爾を中心とせる

# 漢蒙兩族鬪爭史

前編

# 察哈爾を中心とせる漢蒙兩族鬪爭史 前編 目次

察哈爾を中心とせる 漢蒙兩族鬪爭史自序

察哈爾は今政治上支那本部の一區域として取扱はれてゐる。それも民國二年察哈爾都統署が置かれて以來のことで、過去幾千年の間は漢蒙兩民族の繋爭地帶であつたのだ。

漢人勢を得れば察哈爾は對蒙防備の第一線となり、南風少しく競はなくなると先づ第一に蒙人の侵略を蒙るのが察哈爾である、蒙古人が南面して王を稱せんとする場合の根據地が察哈爾であつたことも史實に依るまでゝもない見易い事實である。

北方に國を立てた王朝にとつては察哈爾の地を失ふことは其存立に對する一大威嚇であることは歷代王朝の對蒙政策に對して如何に努力を費したかを見てもわかる。しかし蒙古王朝が漢人種に對する防備を殆んど施さなかつたといふ事實も亦面白いことであらねばならぬ。蒙古は彼等の故鄕である、地は高峻にして氣候は寒冷である、物資も亦從て豐富ではない、漢族の勢が漸く薄弱となるに從て

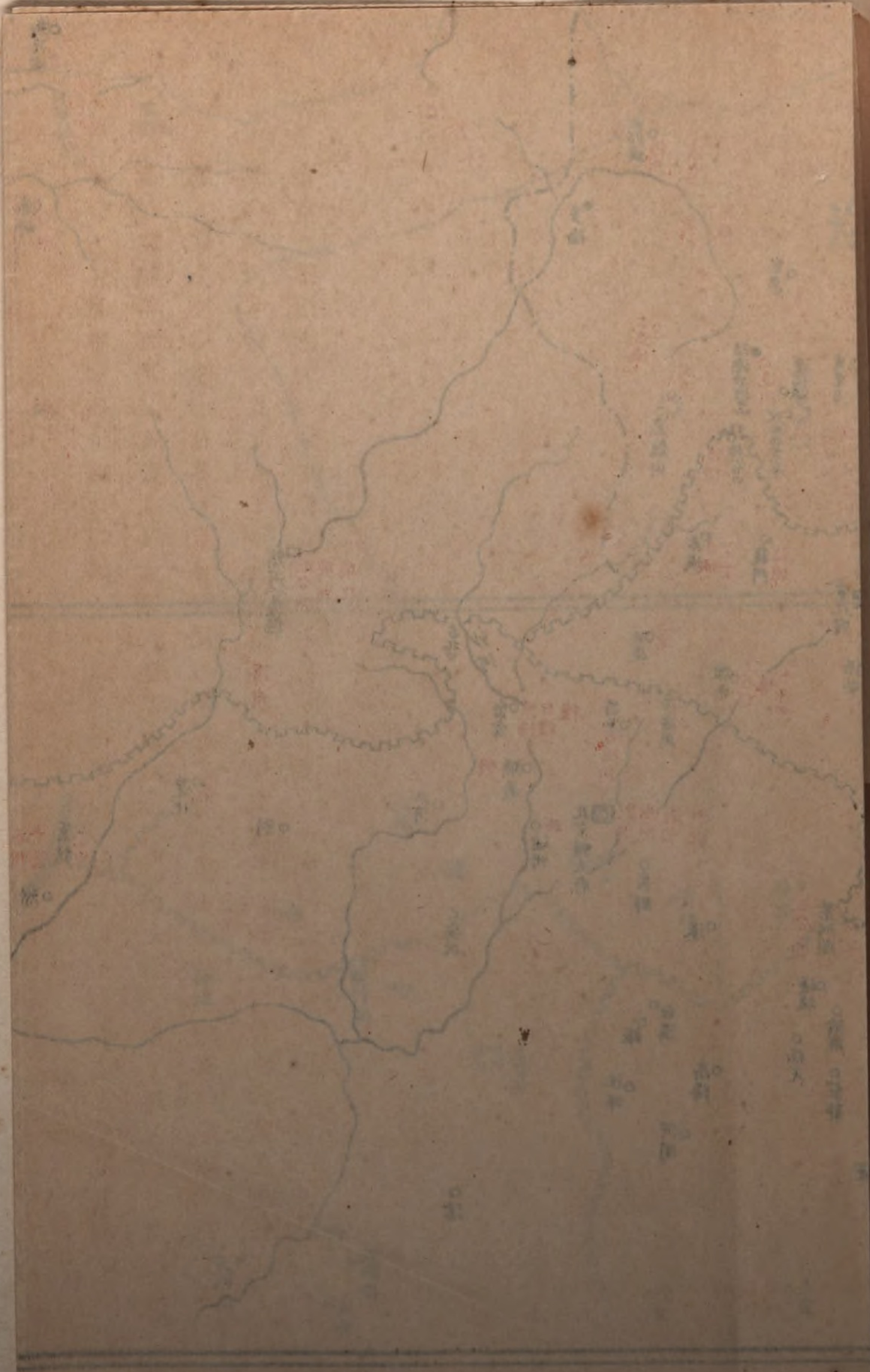
彼等を外夷として輕侮する漢族に對して猛然と反抗する、寒冷に堪ゑ、高原の放牧に慣れたる彼等には、暖國の民、漢族を追ひ拂ふことは實に容易の業であるのだ。反對に漢族にとつては察哈爾の如き異境の地にあつて永く防備、懷柔の事に從ふことは仲々に困難である、紫雲棚引く中華の國と漠々たる高原地察哈爾とは居心地に於て雲泥の差あることは申すまでもない、故に對蒙防備は常に消極的である刺嘛の懷柔若しくは長城の建設是である。　漢人の蒙古征服も、大漠の北に出たり西域地方までも及んだことがあるが極るところ大漠の南にあつて守勢を取るより外はなかつた。　其他に於ては大漠の南より蒙人を驅逐すれば以て外夷征服と思爲してゐた。　事實支那本部と大差ない面積を有する、蒙古を完全に統治することは專心是れのみに從事しない以上至難事であつたのである。　況んや、それに要するすべての軍費は悉く支那本部より徴收せねばならぬに於てをやだ。

蒙人は又支那本部に突出しなければ一酋長たるに甘んずるより外ない。　しかも兵は強く馬は肥ゑてゐる、天下に呼號する自信は十分である。　斯の如き場合に彼等は猛然として中華の國を蹂躪する。　一度國亡び漢族の逆襲に會ふことあらば

彼等は直ちに本國蒙古に遁逃する、敢て蒙漢交界に於て之を防禦することをしない、彼等は漢族の尾襲も大漠以南を以て終りとするのを知つてゐるからである、そして之に朝貢を約して大漠以北に於て安全地帶を見出し得るからである。由來高きより低きに到るは勢の順なるもの。外夷と輕侮しつゝ多大の苦心を拂はねばならなかつた漢人に比すれば蒙人の地位は實に安固たるものであつた。地勢が平凡なだけ、生活も亦割合に平凡であつた。漢人の如き文化がないだけ、すべてが單純化されてゐた、而して極端なる個性の發輝は自己の生活の爲に敢て共同動作を必要としない。

併し自己の生活を脅かすものゝある場合に、彼等は猛然と蹶起する。彼等が察哈爾一帶を席捲して、蒙古高原が中華の國になだれ落つる尖端に立つて、足下に、岳々たる山川を望んだとき、この國をも馬蹄にかけて見たいと、單に利慾の觀念からではなく、止むべからざる好奇心に襲はれることを認めぬ譯には行かぬ。この好奇心の下には萬里の城も小丘陵と異らぬ。敗殘の漢兵の如きは最早や彼等の眼中にはないのである。

再び云ふ察哈爾の地域は高峻である。南萬里の城を境として朔北を足下に控へ、北は阿堪哈、蘇尼特を距てゝ大漠に通じ、東は灤河流域を界として熱河及び克什克騰と接し、西は陰山を界として歸化の平原に通じ、西北は卽ち同高度を以て四子部落の高原と連續してゐる。南北五百餘支里、東西實に八千餘支里の廣袤を有してゐる。滿漢兩族の關ヶ原として不足であるべき筈がない。





察哈爾を中心とせる　漢蒙兩族鬪爭史

前編

# 第一章　上古史

察哈爾は元來、漢人の所謂「夷狄」の地である。夷狄は蒙古人を指すものであるから、漢人と接觸せぬ前の察哈爾を知る爲には蒙人の記錄による外はない。しかるに蒙人の記錄は近世史に於てさへ之を見ることが出來ない。上古史の邈として知る由なきは蒙古硏究者の甚だ遺憾とする所で、遺憾としながら如何ともする術がないのは此の故である。故に蒙古史はすべて他種族の記錄に待たなければならぬ。就中漢人の記錄は最も豐富なる材料を提供するものだらうと思ふ。

## 第一　太古時代

支那史に於ても黃帝以前は史實の徵すべきものが僅少である。しかも確實でな

い。この時代に於ける蒙古人の事などは全く知り得ないのである。唯黄帝が都を奠めた所は今の宣化府であつた事實から見て、蒙人と漢人は此の時代から察哈爾を交界として接觸する機會があつたことを想見し得る。黄帝の領土は北は宣化府保安州(釜山)に至り西は甘肅省肅州高臺縣(空桐)に至るとあるから今の萬里の長城以南は殆ど黄帝の勢力範圍であつたに違ひない。而して黄帝の都は涿鹿(宣化府)であつたから察哈爾蒙古は、最早やこの時代から漢人に取つて、度外視さるべきものではなかつた。始め黄帝がこの地方を略する場合に蚩尤といふ一酋長と戰はねばならなかつたことは黄帝以前蒙漢の觸接は察哈爾交界に於て行はれつつあつたことを證するものである。しかし蚩尤は、果して漢人であるか否かといふ事に就ては何等の實證がない。若し蚩尤なる者が後代に於ける匈奴の一名であるならば蒙漢の衝突が、支那の建國と同時に始つたといふ興味ある問題を提供するものである。推するに黄帝は神農氏を滅して國を建てたるもの、而神農氏は始めて農作の業を行つた者であるから黄帝時代の人民は大部分狩獵、放牧に依て生活してゐたものであるに違ひない。しかるに蒙人も亦狩獵を業とする者であ

るから兩者の生活に大なる差違を見出すことは出來ない。從て漢人、蒙人の區別は判然としない怨のあるのは止むを得ないのである。加之、蒙古地方は申すまでもなく、支那本部と雖も其人口は甚だ稀薄であつたことは見易き理である。故に此時代に於ては、自然の威壓及び鳥獸の迫害に抵抗する程度に於て、各聚落を形成し各小首領を戴いてはゐたが相統一することは不必要であり不自然である、從て不可能でもあるのだ。對蒙懷柔策も防備策も建てたことを見ないのはこの理由である、侵害の患が全くなかつたことも亦推知することが出來る。

五帝の末葉までは以上の狀態が依然として繼續してゐた。然し黃帝によりて一大統合を實現した漢人種は、依然たる小聚落に滿足してゐた蒙古人に比し、此事實だけで、人口の稍密なることゝ、人文に向つて多少の進步を示したことを證するものである。

夏の時代に至り、始祖、禹は黃河の大洪水を治めん爲に、四載(車、舟、橇、樏)に乘つて九州を巡つた際に、崑崙、析支、渠搜(甘肅西北地方)にまで其足跡が及んだと云ふから、綏遠から西翼察哈爾の方面まで彼の目に映つたに違ひない。夏の最初の都安邑は山

西省解州にして此地から黃河の水流を訪ねて北上すれば、大同府附近を通過しなければならぬことは、地理上、今も昔も變りはあるまい。唯崑崙、析支の地が何處であるか判然しない以上、渭水に沿ふて甘肅に出たことは否定されない。故に察哈爾方面にまで禹跡が及んだとは斷定しないが山西及び陝西の北部に於て蒙古人と接觸したであらうことは、黃帝の領土が宣化府から今の嘉峪關附近にまで及んでゐたことから、推知して差支ないだらうと思ふ。

然るに夏の末年に至り、公劉なるものゝ官を棄てゝ戎夷の間に走り豳の地に居ると云ふ、豳地は卽ち陝西省、涇水のほとりにあり。之により、北山西及び陝西の大部は戎夷の地であつたことを知ることが出來る。此事は察哈爾とあまり干係がない樣に思はれるが、往年の察哈爾一帶の地位が、之れに依つて自ら判然するではないか。

茲に見逃すことの出來ないのは、黃帝以下五帝の都が屢々異る地に建てられたことである。卽ち黃帝は涿鹿(宣化府)に顓頊は帝丘(大名府)帝嚳は亳(河南府)帝堯は平陽(山西省平陽府)帝舜は蒲坂(山西省蒲州)に各々都を建設したのである。遊牧を主

業とするこの時代の人民にとつては、敢て不思議ではないけれども、宣化府の如き北部地方から次第に南下したといふ事實は、幾分蒙古人の壓迫によるものであることを示すものではあるまいか。勿論黄河附近の地は牧草及び其他の植物に豐富なこと、及び氣候も温暖である、ことに就ては異論がない。併しながら、此事實のみに依つて奠都の南下が行はれたとは思へぬ。何故なれば、若し、黄河附近の地が彼等の遊牧に最も適當してゐるならば、黄帝の都は神農氏と三度阪泉の野に戰つて之を滅したとき、すでに奠都さるべきであつた。神農氏の依る所は今の山東である。顓頊の都帝丘は神農氏の範圍內であらねばならぬ。それが、戰勝つて、豐壤の大平原直隷を棄てゝ、寒冷の地朔北に再び隊伍を還したことは、宣化府の必ずしも彼等の遊牧に不適當でなかつたことを證するに足ると思ふ。又宣化から大名河南、蒲州の遠距離の大移動を行つた彼等が、其後平陽、解州と蒲州の近傍、あまり遠距離には動かなかつた事も、五帝が水草のみを追ふて、奠都を行つたのではないことを語るに足ると思ふ。前述の如く山西の北半部及び陝西の大部は戎夷の地であつたことが、卽ち、蒲州以西に都を奠めなかつた理由ではあるまいか。渭水のほ

とりが如何に豐壤形勝の地であるかは、歷史や地理を繙くまでもあるまい。しかも此地方に敢て都を建てることをしなかつたのは、爲なかつたのではない、出來なかつたのである。何ぞ宣化府のみは戎夷の壓迫が皆無であつたと云ひ得やう。

苗族を驅逐して、勢隆々たる漢人種も、それと同時に北方戎夷に生活を脅かさるる患を持たねばならなかつたことは止むを得ない。蓋し蒙古の地は蒙古人にして始めて、安全に、愉樂に生活し得るものであるのに反し、支那本部の地は蒙、漢兩人種何れにとつても愉快なる生活地帶である。之れ漢人に取つては何時の時代に於ても偉大なる弱點とならざるを得ぬのである。

又面白い事實は、最初に漢人種を統一した黃帝が、北方の兵を以て、之を成就したことである。縱令それが漢人であつたとしても、以後幾千年の歷史から、現在の政局に思ひ合はして頗る興味を覺ゐざるを得ない。

夏の帝相の時に至り后羿(君羿)なるもの兵馬總管となり、屢々邊境の叛を平げて功ありと見ゆるは、南方に逃遁したる苗族のそれを指すことが全然ない、とは云はぬ

が邊境と云へば大部分蒙地に對する境界に限らるることを想見することが出來る以上、山西、陝西及び直隷の北部に於て常に蒙古人の侵害を蒙るを禁ずるを得なかつたことを示すに足ると思ふ。何となれば黄河附近は元來苗族の地である而漢人に追はれた苗族は江南に走つた。江畔は河畔よりも、より以上物資の點に於ても、氣候、風土の關係から見るも、生活に對して安易なる條件を多分に具備してゐる。江畔に移住を餘儀なくされた苗族は最早、沙原河南の故地に戀々たるべき理由はない況んや彼等と雖も、水草を追ふて生活するものなるに於てをやだ。又后羿が皇帝を放逐し、事實上の主權者となるを得た、第一の理由は、人望と權勢とを合せ有した事である。而して人望と權勢は一に彼が邊境に大功を立てし所以に外ならぬ。この故に蒙古人の侵略は帝相の時代に於てのみならず、何れの時代に於ても漢人に對する脅威であつたに相違ないことは明である。尙、夏の帝都が山西省解州(安邑)より河南及び山東方面に移つたことを書き加へるのも、あながち蛇足ではあるまいと思ふ。

蒙古人が侵入して來るのは、直隷、山西、陝西だけで、それ以南には下らなかつた樣に

見ねる。これ一に地勢上の關係に外ならぬ。そのうち直隷及び山西に侵入する蒙古人の根據地は直隷山西北部卽ち宣化、大同の兩府及び察哈爾の地であらねばならぬ。先に支那本部の地は漢蒙兩族にとつて共に安定なる居住地であるこ述べたが、蒙古人はやはり寒冷の地に育まれた民である。一望萬里、無涯の地形を見慣れて來た民である。夏季暑熱の甚だしい河南、鬱蒼たる樹林に包まれた河南は彼等の敢て進み得ざる土地であつたのである。

## 第二　周　代

周室の始祖公劉が陝西省涇水のほとりに走つて以來、九世の孫太王が、岐山(陝西省渭水のほとり)に王業の基を開くまで、居常戎狄の間にあつて彼等と同一の生活を續けて居た。それが文王に至つて次第に勢力を得、周圍の戎狄を征服し、子武王は遂に紂辛を滅してしまつた。しかし武王及び文王の征服した戎狄は密須(甘肅平涼府靈臺縣)崇(陝西、西安府鄠縣)等の如く悉く西北地方のものばかりで文王が以前臣事しなければならなかつたといふ昆夷も山西北部の族ではない。のみならず

是等の諸族はすべて土耳其種であると論ずるものがある。唯昆夷のみは鄂爾多斯地方に居たといふから西翼察哈爾と何等かの交渉があつたに違ひない。而或る論者は、支那史に最も早く現はれた北狄で、西暦紀元前二十七世紀頃早く已に黄帝が之と戰へりと云ふ葷粥の如きも、其發音の大差なきことから土耳其族である匈奴と同一種であるといふ。果して然らば、上古史に於ては蒙古族は未だ現はるるに至らなかつた。從つて察哈爾の如きも土耳其族の領土であつたと云ふことが出來やう。然し邊境に散在してゐた部族の名稱は葷粥や匈奴丈ではない。周の武帝が紂辛を滅す際に西夷八族の兵力を藉りたといふその八族の名は實に庸蜀、羌、髳、微、盧、彭、濮等である。西夷卽ち陝西、甘肅方面にあつた非漢人種に於てさへ如斯き名稱の差違がある、從て單に發音の上から見ただけでは是等の八族が悉く土耳其族であるとは云ひ得まい。土耳其族の現在の散布狀態から察しても陝西甘肅及び西部蒙古は土耳其族の遊牧地であり得たに違ひないが、葷粥なる外夷も甘肅方面に居住してゐたものであるかも知れぬ。何故ならば黄帝の範圖は嘉峪關附近にまで及んでゐたからである。要するに此時代にあつて漢人と中原を爭

ふものは外族としては土耳其族であつたことは事實である。しかも彼等は蒙古の高原に住するものではなく、漢人と同じく草原の住民であつた。彼等が漢人に追はれて逃遁する場合には、決して今の長城以北には出ない。東は又黄河を境として其居住地を西方に求めたのである。現在、彼等は新疆、甘肅、青海及び阿爾泰の一部に住することは其一證左でなければならぬ。これに依て、蒙古族は未だ、土耳其族の如く、漢族の社稷を脅やかす底の勢力を有しなかつたことも知り得る。

武王即位後二百餘年の間は内亂と西夷の壓迫を示す外、所謂、犬戎に對しては何等の記録を見出し得ない。穆王の時に至り、始めて犬戎を征せるを見る。しかもその遠征は失敗に終り、四の白狼と四の白鹿とを獲て歸つたが、内政の亂れたのに乘じて北戎が反抗的態度をとり出したのはこれからである。穆王の征したといふ犬戎が北戎であつたといふ理由として、穆王の西征を擧げることが出來る。彼が西征の足跡は首都洛陽より陝西を通過し甘肅の西部まで及んだのである。或る人は沙漠を横斷したといふ記事からタリム盆地まで行つたと云ふけれども、眞僞明ではない。しかし可成西方まで進出したものであることは事實である。兎に

角、この西征は北部に至らなかつたことは事實で、特に犬戎を征すとの記事を見る所以である。從て穆王が犬戎を征すと云ふは北部山西一帶の者であることも知り得るであらう。

周代の九州のうち、最北端に位するものに幷州といふのがある。幷州は後代に於て、屢々見られる地名であつて、太原附近、又は太原府がそれであつた。しかし其範圍に於ては勢力の强弱に比例して種々に變化したことは爭はれぬ。或は直隷の保定、正定から太原大同一帶を云ふと云ひ、或は陝西の舊延安、楡林の地方をも含んでゐたといふ。何れにしても其中心は太原府であつて、「地在兩谷之間、故曰幷州」と云ふも亦「衞水、常水之間也」と云ふも太行山以西の山西省北部であつたことを知り得。衞水といふのは河南の輝縣を流るる川である。山西南部は別に冀州と稱してゐた。

又周代幷州には聖嶽として、恆山があつたといふ。現今の地圖のうちにも五臺山の北部に當つて此山名を見出すことが出來る。察するに恆山とは五臺山を指したものであらう。之に依て幷州の地は少くも今の長城まで及んでゐたもので、實

勢力は兎も角、大同も周人からすれば幷州の中であつたに違ひない。而して幷州の地は蒙漢族繫爭地帶であつたから周室の盛衰に從つて幷州の地は或は大同府まで至り或は五嶺關以南に限られたは明である。此對手たる蒙古族は卽ち西翼察哈爾所住の者であらねばならぬ。

而して東翼察哈爾の蒙古族は主として宣化府より幽州に進出する運命を持つてゐる。この運命は卽ち地理的關係である。白河にそそぐ乾桑河が彼等を直隷に導く指針であるのである。又大同と代州との間には雁門關なる障壁があつて明に朔北と中國とを地形上區別してゐるが大同と西翼察哈爾とは、其間何等の障壁を見出すことが出來ない。兩地に地勢上の差違はある。しかも明白なる差違がある。しかし雁門、居庸又は張家口、獨石口に見るが如き確然たる障壁は之を見出すことが出來ぬ。察哈爾それ自體に於ても東翼は純然たる蒙古高原であるに反し西翼の興和、豐鎭、凉城等に屬する南部は山岳の起伏、比較的多く、大同府の地勢と多くの類似點を持つてゐるのだ。或る時代には此等の地方が大同府の管轄の下にあつたことがある程である。從て對漢族の歷史に於ても可成の差違を認めぬ譯

には行かぬ。又彼等蒙古族が南下する場合を想像するも、天險雁門關を突破するよりは綏遠、鄂爾多斯の平原から陝西に至るを以て利益とすることは見易きことである。何となれば雁門以南は山川相錯綜してゐるのに鄂爾多斯は多分に蒙古の形狀を具へてゐる。高原に住し、騎射に慣れた彼等にとつては後者の方がどんなに利便が多かつたか知れない。しかも周の根據地は陝西の西安である。山岳重疊せる山西の地形は戰鬪すべく彼等にとつてあまり有利なものではないのである。故に穆王の暴政より周室の衰えたのに乘じて南下し始めた蒙古族(玁狁)は焦穫(陝西の西北)鎬(周の武帝の發祥地)を經過し涇陽(涇水の北)にまで侵入して來たが宣王の爲に敗られて太原を棄てて去らなければならなかつたと云ふ。その太原は現今の太原府ではなくつて涇陽故城を指すものであることは、正當の說と認められてゐるけれども、之を以て直ちに玁狁(獫狁)は西方より來襲したものばかりであると斷定するのは早計であらう。鄂爾多斯及び綏遠、察哈爾地方が彼等の根據地であり得ない理由はない。而して武王が周室を興すにあたり「犬戎を涇洛の北に追ふ」とあるは幾分この間の消息を語るものではあるまいか。

申侯に誘はれて、幽王を驪山の下に攻殺したといふ犬戎は玁狁と同一なるや否やは判然しない。申侯は姜族にして河南及び山東の南に居たからである。

## 第三　東周春秋時代

周室の東遷後、史家は之を春秋と云ふ。この間約二世紀半に及ぶ長年月を要してゐる。察哈爾蒙古に於て明白に部族の存在を歴史上に表はしたのが卽ち此時代である。當時北部蒙古族を抑制しつつ威勢を中原に張つた國が三つある。晉、燕、衞之れである。此中直接に彼等と接したのは前二者であつて衞は晉の未だ強大ならざる以前に白狄及び赤狄なる夷狄に苦しめられ、遂に國を棄てるの止むを得なきに至つた外、あまり史上には表はれて來ない。衞とは卽ち直隷及び河南に屬する太行山麓を根據地としてゐた者である。國も強大ではなかつたので僅に齊の恒公の勢を藉りて舊地を復したに過ぎなかつた。衞は後隣國邢を滅して勢やや張つたけれども狄の爲に苦しめられ勢振はなかつた。燕は衞に比すれば、範圍も大きかつたし、五覇の一人とこそなり得なかつたが、中原

東北境の重鎭として相當の勢力を維持してゐたものである。燕の根據地は今の順天府であつて、山戎の爲に苦しめられしことは少くないのである。この山戎を東胡山と云ふ。多分熱河及び東翼察哈爾地方に居た者に違ひない。其東胡山の侵略の最も甚だしかつたのは、恆公が齊によつて覇を稱してゐた時代であつて、燕も獨力、之に當ることが出來ず戰は常に敗績と云ふ憂目だつた。燕敗亡の後、山戎の爲最も威嚇を蒙る者は齊でなければならぬ。恒公の北部一大遠征は之が爲に企てられた。この遠征が何れの地方まで至つたかは明でないが、之れによつて燕は故地を復して、山戎に朝貢を約せしめたと云ふから、少くも山戎を今の長城以北に追ひやつた事は事實で、その追擊が又可成に激烈なものであつたに違ひない。しかし山戎の勢も相當猛烈で、之を攻擊する爲には多大の苦心を費さねばならなかつた事は「管仲微かりせば吾其れ被髮左袵ならん」といふ孔子の言によつて推知することが出來る。

晉は今の太原府がその根據地である。始め周室成王の弟が晉の地に封ぜられたのであるが狹隘な地域を占めて永く小國たるに止つてゐた。しかし其位置が北

部であつたので次第に夷戎を降して其地を併合し其人民を同化して漸次境域を擴め「詭諸」なるものの晉主となるに及んで驪戎の如き蠻族を降して勢大いに張り、列國中錚々たるものの一に加つたのである。しかし文公が秦の助を藉りて晉の主となるまでは中原に覇を爭ふまでには至らなかつた。否な寧ろ内亂の爲に妨げられ衞、祁の如く北戎の防備に汲々たる有様であつた。從て其地域も狹小で山西の北部を保つに過ぎなかつた。

文公は幸運兒である。彼の卽位は老年であつたけれども、晉國が内亂に苦んでゐる間、中國到處流浪し歩いてゐた。從て彼の胸中には中國の形勢が歴然と畫かれてゐたのである。之れが彼にとつて何よりの武器である。のみならず彼が晉主の地位を得たときには齊はすでに昔日の面影が消ゑかかつてゐた。彼が縱橫の經綸を振ふのは實に此機會でなければならぬ。彼は先づ王子帶の反亂に逃遁せる周王襄を輔けて大いに狄人を破り、つづいて楚を城濮に破るに及んで、彼の覇業は全く成つたのである。其の版圖たるや今の山西省の大部分と之に接壤せる直隸省の一部とを有し黃河の彼岸なる陝西の一部にまで及んだのである。吾人の

語らんとする察哈爾蒙古には此時に於て始めて「晉北に林胡、樓煩の戎あり」と記錄されてある。

五覇の時代には漢族の勢が猛烈に外に向つて發展した。覇業を成す爲には多くの土地、多數の人民を必要とする。しかし之を中國に求むる爲には、中國は幾多の强大なる同族と戰はねばならぬ。周室を輔けて漢人の偉業を中原に誇らんとする者にとりては出來るだけ之を避けて外敵に向ふことは、事の難易を度外するも諸侯の嫌惡を來たさない事に於て、多大の利益であつたのだ。故に彼等は盛に外夷を討伐して漢人の威を示したものである。於是此時代に於ては外夷の中國に威を振ふものなく、以後數十百年間、戰國時代に至るまでは、侵入して害を爲すものさへもなかつたとの事である。しかし恒公が覇業を爲す以前に於ては北戎が中原の擾亂に乘じて河南から山東あたりまで侵略して來た事實があるから、彼等が朔北に追ひやられた後と雖も相當の威力を有してゐたことは爭はれぬ。林胡、樓煩及び東胡山等の山戎も、只其名稱を知らるるに過ぎなかつたかも知れないが戰國に入つて次第に勢力を張つたと見ゑて、西北邊にある秦、趙、燕の三國は各

勢力は兎も角、大同も周人からすれば幷州の中であつたに違ひない。而して幷州の地は蒙漢族繫爭地帶であつたから周室の盛衰に從つて幷州の地は或は大同府まで至り或は五嶺關以南に限られたは明である。此對手たる蒙古族は卽ち西翼察哈爾所住の者であらねばならぬ。

而して東翼察哈爾の蒙古族は主として宣化府より幽州に進出する運命を持つてゐる。この運命は卽ち地理的關係である。白河にそそぐ乾桑河が彼等を直隷に導く指針であるのである。又大同と代州との間には雁門關なる障壁があつて明に朔北と中國とを地形上區別してゐるが大同と西翼察哈爾とは、其間何等の障壁を見出すことが出來ない。兩地に地勢上の差違はある。しかも明白なる差違がある。しかし雁門、居庸又は張家口、獨石口に見るが如き確然たる障壁は之を見出すことが出來ぬ。察哈爾それ自體に於ても東翼は純然たる蒙古高原であるに反し西翼の興和、豐鎭、凉城等に屬する南部は山岳の起伏、比較的多く、大同府の地勢と多くの類似點を持つてゐるのだ。或る時代には此等の地方が大同府の管轄の下にあつたことがある程である。從て對漢族の歷史に於ても可成の差違を認めぬ譯

には行かぬ。又彼等蒙古族が南下する場合を想像するも、天險雁門關を突破するよりは綏遠、鄂爾多斯の平原から陝西に至るを以て利益とすることは見易きことである。何となれば雁門以南は山川相錯綜してゐるのに鄂爾多斯は多分に蒙古の形狀を具へてゐる。高原に住し、騎射に慣れた彼等にとつては後者の方がどんなに利便が多かつたか知れない。しかも周の根據地は陝西の西安である。山岳重疊せる山西の地形は戰鬪すべく彼等にとつてあまり有利なものではないのである。故に穆王の暴政より周室の衰えたのに乘じて南下し始めた蒙古族(玁狁)は焦穫(陝西の西北)鎬(周の武帝の發祥地)を經過し涇陽(涇水の北)にまで侵入して來たが宣王の爲に敗られて太原を棄てて去らなければならなかつたと云ふ。その太原は現今の太原府ではなくつて涇陽故城を指すものであることは、正當の說と認められてゐるけれども、之を以て直ちに玁狁(獫狁)は西方より來襲したものばかりであると斷定するのは早計であらう。鄂爾多斯及び綏遠、察哈爾地方が彼等の根據地であり得ない理由はない。而して武王が周室を興すにあたり「犬戎を涇洛の北に追ふ」とあるは幾分この間の消息を語るものではあるまいか。

申侯に誘はれて、幽王を驪山の下に攻殺したといふ犬戎は玁狁と同一なるや否やは判然しない。申侯は姜族にして河南及び山東の南に居たからである。

## 第三　東周春秋時代

周室の東遷後、史家は之を春秋と云ふ。この間約二世紀半に及ぶ長年月を要してゐる。察哈爾蒙古に於て明白に部族の存在を歴史上に表はしたのが即ち此時代である。當時北部蒙古族を抑制しつつ威勢を中原に張つた國が三つある。晉、燕、衞之れである。此中直接に彼等と接したのは前二者であつて衞は晉の未だ強大ならざる以前に白狄及び赤狄なる夷狄に苦しめられ、遂に國を棄てるの止むを得なきに至つた外、あまり史上には表はれて來ない。衞とは即ち直隷及び河南に屬する太行山麓を根據地としてゐた者である。國も強大ではなかつたので僅に齊の恒公の勢を藉りて舊地を復したに過ぎなかつた。衞は後隣國邢を滅して勢やや張つたけれども狄の爲に苦しめられ勢振はなかつた。燕は衞に比すれば、範圍も大きかつたし、五覇の一人とこそなり得なかつたが、中原

東北境の重鎭として相當の勢力を維持してゐたものである。燕の根據地は今の順天府であつて、山戎の爲に苦しめられしことは少くないのである。この山戎を東胡山と云ふ。多分熱河及び東翼察哈爾地方に居た者に違ひない。其東胡山の侵略の最も甚だしかつたのは、恆公が齊によつて覇を稱してゐた時代であつて、燕も獨力、之に當ることが出來ず戰は常に敗績と云ふ憂目だつた。燕敗亡の後、山戎の爲最も威嚇を蒙る者は齊でなければならぬ。恒公の北部一大遠征は之が爲に企てられた。この遠征が何れの地方まで至つたかは明でないが、之れによつて燕は故地を復して、山戎に朝貢を約せしめたと云ふから、少くも山戎を今の長城以北に追ひやつた事は事實で、その追擊が又可成に激烈なものであつたに違ひない。しかし山戎の勢も相當猛烈で、之を攻擊する爲には多大の苦心を費さねばならなかつた事は「管仲微かりせば吾其れ被髮左衽ならん」といふ孔子の言によつて推知することが出來る。

晉は今の太原府がその根據地である。始め周室成王の弟が晉の地に封ぜられたのであるが狹隘な地域を占めて永く小國たるに止つてゐた。しかし其位置が北

鄙であつたので次第に夷戎を降して其地を併合し其人民を同化して漸次境域を擴め「詭諸」なるもの晉主となるに及んで驪戎の如き蠻族を降して勢大いに張り、列國中錚々たるものの一に加つたのである。しかし文公が秦の助を藉りて晉の主となるまでは中原に覇を爭ふまでには至らなかつた。否な寧ろ内亂の爲に妨げられ衞、祁の如く北戎の防備に汲々たる有樣であつた。從て其地域も狹小で山西の北部を保つに過ぎなかつた。

文公は幸運兒である。彼の卽位は老年であつたけれども、晉國が内亂に苦んでゐる間、中國到處流浪し歩いてゐた。從て彼の胸中には中國の形勢が歷然と畫かれてゐたのである。之れが彼にとつて何よりの武器である。のみならず彼が晉主の地位を得たときには齊はすでに昔日の面影が消わかかつてゐた。彼が縱横の經綸を振ふのは實に此機會でなければならぬ。彼は先づ王子帶の反亂に逃遁せる周王襄を輔けて大いに狄人を破り、つづいて楚を城濮に破るに及んで、彼の覇業は全く成つたのである。其の版圖たるや今の山西省の大部分と之に接壤せる直隸省の一部とを有し黄河の彼岸なる陝西の一部にまで及んだのである。吾人の

語らんとする察哈爾蒙古には此時に於て始めて「晉北に林胡、樓煩の戎あり」と記錄されてある。

五覇の時代には漢族の勢が猛烈に外に向つて發展した。覇業を成す爲には多くの土地、多數の人民を必要とする。しかし之を中國に求むる爲には、中國は幾多の强大なる同族と戰はねばならぬ。周室を輔けて漢人の偉業を中原に誇らんとする者にとりては出來るだけ之を避けて外敵に向ふことは、事の難易を度外するも諸侯の嫌惡を來たさない事に於て、多大の利益であつたのだ。故に彼等は盛に外夷を討伐して漢人の威を示したものである。於是此時代に於ては外夷の中國に威を振ふものなく、以後數十百年間、戰國時代に至るまでは、侵入して害を爲すものさへもなかつたとの事である。しかし恒公が覇業を爲す以前に於ては北戎が中原の擾亂に乘じて河南から山東あたりまで侵略して來た事實があるから、彼等が朔北に追ひやられた後と雖も相當の威力を有してゐたことは爭はれぬ。林胡、樓煩及び東胡山等の山戎も、只其名稱を知らるるに過ぎなかつたかも知れないが戰國に入つて次第に勢力を張つたと見ねて、西北邊にある秦、趙、燕の三國は各

各長城を築いて之を防がなければならなかつた。それは中原の諸國との攻防に全力をそそがなければならなかつたのと、之れ以上蒙古族を驅逐する必要を認めなかつたからである。

## 第四 戰國時代

戰國時代に於ける察哈爾蒙古の狀況を說く爲には先づ之と接觸して常に其勢力に注意を拂はねばならなかつた趙及び燕の二國に就て、其國勢の變遷を知らねばならぬ。前に北支那にありて覇業を稱へ勢嚇々たりし晉も東周十六代の王貞定の治世に至り群臣次第に權を振ひ、公室愈々衰ふるの狀態であつた。群臣とは卽ち范、中行、知、趙、魏、韓の六卿である。六卿のうち、范、中行の二氏は亂を企てて亡ぼされ、知、韓、魏、趙の四氏勢力を振ふてゐたが就中知氏の勢が最も强烈であつた。其勢を恃み、哀公を名義上の晉公として晉室の舊地を己れ一人の命のままに爲さんとした知氏は趙簡子が無音の勢力を知らなかつたのは大なる錯誤であつたのだ。始め趙簡子は尹鐸なるものをして晉陽(太原府)を治めさせたが、尹鐸の施政頗る宜

に適ひ、人民も大いに之を德としてゐた。故に尹鐸も「國難あらば晋陽に來れ」と、かねて趙子に話してゐたのである。趙襄子(簡子の子)が知氏の强迫に會つて晋陽に身を寄するに及んで尹鐸の言は明確に裏付けせられた。此時魏韓の二國はすでに味方であつたが趙襄子は單獨で晋陽を固守し、萬苦を排して知氏の軍を防ぎ、竊に韓魏兩國を說いて相共に知氏を滅してしまつたのである。晋陽を固守するを得た第一の理由は水漬けの困苦にも人民に叛意のなかつたことである。

斯くして趙は韓、魏二氏と共に晋の地を三分し戰國七雄の錚々たる者として勢を北支那に張ることになつたのである。趙は晋の貴族であつたが晋室とは何等の血族干係はなかつた。その祖は秦と同一であつて紂辛の末世に逃れて趙家を立てたといふことである。その後、周の穆王が犬戎を征した際に趙家の一人が御者として王に從ひ、其功を以て山西南部なる趙城に封ぜられた。晋が山西に勢を張るや趙氏は又之に臣事して次第に勢力を增大した。就中趙衰は晋の文公が難を避けて北狄の間にあつた際之れに扈隨せる一人にして歸國後は文公の相となつたのである。

茲に面白い事實は父衰に代つて晉の首相となつた子趙盾は實に狄夫人の腹に出たことである。

北戎人を妻とした例は、その以前に於ても重耳(晉文公)にも之を見るが狄夫人の腹より出た人物が國政を料理し又は一國の主となつたのは歴史の記錄の上では趙國が最初である。(或は最終であるかも知れぬ)、盾の子趙朔、及び晉の悼公を輔けて善政を行ひ復び覇業を爲さしめたる趙武の如きも皆其母は狄人であつた。趙をして諸侯の列に加はらしめた趙襄子も亦狄人を母とし自らも亦狄人を娶つたのである。勿論それは趙國が常に狄人と接觸しなければならなかつた、その國狀によるものであるが、北狄懷柔策を建てた第一人者を趙國に發見し、しかも漢蒙兩族の長所を取つて堂々七雄の隨一たる位置を保持し得た智慮と度量とを吾人は大いに讃美したい。

詳言すれば狄人の婦を王室に入れたのは單なる懷柔策であつたとしても狄夫人の出たる諸子を趙室の主とした事實は趙室はすでに、あらゆる點に於て北狄の習慣を取り入れてゐた證據でなければならぬ。單に推論ばかりではない、趙室の北

狄化は事實之を數へ上げることが出來るのである。北狄服の採用、騎兵の訓練等は就中偉大なる北狄化である。此二事は襄子六代の孫武靈王に至つて實現したのであるが、從來周禮を以て民法とし、孔子を以て君王の範とした平靜なる發達を混亂せんとする幾多の事實は、すでに趙建國のときより實現しつゝあつたことを推知せねばならぬ。自己を知るの明と、敢て舊慣を打破した、東洋人らしからざる趙主の度量とは、吾人の大いに學ぶべきものがあるではあるまいか。

「趙國の歷史を繙く者は、夢、前兆、其他超自然的存在物の幻覺が史記中の他の何れの部分よりも頗る多量に現はるる」ことは一々精査するまでもあるまい。趙襄子が晉家の沒落に當り家臣「智伯」の髑髏をとつて酒器を作つたと云ふが如きも漢人の風習としては未だ曾て見なかつたところである。およそ改革は勢の熟するを待つて然る後爲さねばならぬ。未熟なる勢を驅つて舊制の廻轉を試むるは徒に困難をさしまねく憂がある。外六雄に對し、讓らざる勢力を維持する爲には、內憂が最大なる疾患であることを知つてゐるならば、趙主の改革は勢に逆行したものであるとは云ひ得まい。しかも趙は秦と共に七雄の隨一たる勢を維持してゐた。

たとひ其國は中原の一隅に存在したとは云ひ、中原に覇を稱ふるが唯一の目的である以上、趙の北狄化は强ひられたる懷柔策でないことは確實である。趙の武靈王は英邁の資であつた。痲の如く亂れた戰國の世にあつて、平和の解決を翹望するが如き妥協性を彼は持ち合はさなかつた。從て堯舜を唯一の範として徒に舊慣を墨守するが如きは彼の目よりすれば愚の極であつたに違ひない。彼れが斷乎として中國の長袖を廢して胡服に改めたとき、家臣の諫言に答へて曰く。「古代の風習は古代人には相應するだらうが現代人は須く現時の必要に一致しなければならぬ」と。これのみではない、從來兵車を挽くにのみ用ゐられた馬匹を以て騎馬用とし自ら騎射を練習して騎兵の採用を企畫したのである。兵車を以てする戰と騎馬を以てするそれとは、戰鬪力に於て格段の差違あることは申すまでもない。

斯くの如くにして、彼は先づ北、林胡、樓煩を擊破して、之を大漠に追ひ、代郡(直隸、宣化府蔚州)より陰山に沿ふて高闕(陰山の西)に至る間に、長城を築きて、狄人との境界を作り、雲中(故城は歸化城の西南にあり)雁門(故城は山西省朔平府右玉縣南にあり)代

郡を塞として、之れが侵入に備へ、以て北邊の寇を除き、然る後全力を以て中原に其勢を張らんとしたのである。趙の舊都は趙襄子以來、晉陽であつたが、武靈王は、此に至つて遂に南方に遷都を行ひ、今の直隷廣平府なる邯鄲を都城として雄を四方に振ふたのである。

之れに依て此時の趙國の範圖を考ふるに、直隷の太名府、及び正定府を東とし、河南の河北道より山西の澤州、遼州は、魏韓の備へとなり、故都晉陽一帶は申すまでもなく、北部は綏遠、西翼察哈爾涼城縣及豐鎭縣の一部を其圈内に入れて雲中雁門を之が守りとし、代郡の守備區域は今の山西北境より直隷口北道の一部にまで及んだのである。

之を以て見るも、此の時代から最早や西翼察哈爾は、東翼のそれの如く純粹なる邊疆として見られては居なかつたことを知る。從て趙國の歷史を喋々するも無意義でなかつたのを嬉ぶ者である。

燕は戰國のときに至り國漸く強く、一度齊と戰つて大勝を獲て以來、北方の地順天府に據り南面して諸侯と相爭ふに至つた。之れ一に賢將秦開の手腕に待つとこ

ろ大なるものがある。

前述の如く燕は東胡の侵害を蒙ること甚だしく、曾ては齊の桓公によりて之を北方に驅逐して、朝貢を約せしめたことがあるけれども、桓公の沒後は依然たる弱國として東胡と劍州の地を爭はねばならなかつた。しかも東胡の勢は少しも減せず遂には之に質を送つて一時の和平を樂むの止むを得ざるに至つたのである。しかし秦開は名將秦開は卽ち燕より東胡に送られし質の一人であるのである。しかし秦開は通常の質の如く一室に幽閉さるるを以て滿足するものではなかつた。漢族の文化に育ち、中原の勢を知つた彼には東胡王の歡心を買ふことは決して至難の業ではなかつたのである。彼は百方意を盡して東胡王が絕大の信用を獲得し、遂に故國に歸來するを得たことは燕にとつては偉大なる獲得で、從て東胡にとつて絕大なる損失であつた。察するに秦開は自ら進んで胡に質となつたものであらう。而て彼が歸來後成就したる東胡一蹴はすでにその時彼の胸中に畫かれてあつたに違ひない。

秦開は東胡を襲破した。しかも東胡却くこと千里なりと云ふに至つては、多少の

誇張はあるにしても、燕、立國以來の憂患を消失せしむるに、如何に多大なる效果を齎したかは想見することが出來る。此憂患を益々僅少ならしむるものに、彼の長城建築がある。始め燕が王畿の北邊に位置して、諸侯と勢の權衡を計らんが爲、兵力を以て北戎を破り、其土地を沒收するか又は貨物を以て之を北狄人より買收し來つたのであつたが、此に至つて蒙古の高原は單に自己の負擔を重くするのみであるのを知つた秦開は長城を築いて明に北狄と漢人とを區分してしまつたのである。かくすることが南面して諸侯と爭ふ爲に、燕國にとりて第一義のものであつたことは申すまでもない。しからば漢蒙の區別線は如何なる地方に求められたか。實はこの問題は甚だ明白を缺くものであることを遺憾とするのである。その基點が造陽卽ち今の獨石口にあつたことは確實に指摘し得るが、ここから東方何れの地點に向つて走つたかは疑問である。しかし秦開が東胡を多倫の東南なる熱河一帶より驅逐し、大淩河の上流にまで進出したことは、此長城が熱河北方の山地を經て朝陽の北にまで及んだといふ推察を下さしむる所以であるのだ。一古志には朝陽の北に古長城があると云ふてゐるそうである。

しかし、吾人は熱河方面に就いて、あまり深い詮索を爲す必要はない。只獨石口が其西端であつたことを記憶すれば足ると思ふ。獨石口が燕の長城の中に入つたといふことは、秦開の軍が獨石以北にまで進出した證據で、宣化府が燕の範圍内にあつた明白なる記録たるものであるからだ。而て宣化府は之を上谷郡と稱し、今の懷來縣あたりが其本據であつた。漁陽(密雲)右北平、遼西、遼東等の諸郡も同時に設置された對胡防備の第一線であつたのだ。その後の燕は、戰國七雄の一には數へられてゐたけれども、趙の如き優勢は保てなかつた。しかし東胡の憂患は、よほど減殺したと見ゐて、或るときは合從の盟主となり又或る時は名將樂毅によりて中原に勢を馳せたこともあつたけれども秦王の一怒に會つて第一に亡ぼさるる運命を見てしまつた。

趙は最後まで頑强に秦に抵抗した一國である。就中有名な、藺相如、廉頗の如き賢臣、名將の助けを得て綏遠、鄂爾多斯地方の白狄及び中山を滅し一時秦の强敵たることもあつた。しかし頽勢は遂に挽回することが出來ず十代幽繆王に至り秦の爲に併呑されてしまつた。

斯くして六國を亡ぼして天下を統一したる秦王は自ら始皇帝と稱して、天下を意のままに號令することとなつた。威烈王の元年から此に至るまで實に二百九年を經過してゐる。

## 第五　秦代

始皇帝と云へば吾々は直ちに長城を聯想する。長城の效果は云々せずとも、七百餘邦里に渡る山河を聯ねて城壁を築いたといふことが吾々には大なる驚畏であるのだ。勿論、燕、趙及び秦自身が戰國時代に築た長城はあつたにちがひない。そして大體に於て秦の長城も、それ等と同じ場所に築かれたのではあるけれども漢族と蒙古族とを完全に區分してしまはうとしたその企てが、實に面白いではないか。

始皇帝はよほど神經過敏の生れつきで且つ臆病であつた樣に思はれる。それは萬里の城が眇たる一貧生の奉りたる圖書に「秦を亡ぼすものは胡である」との句があつたばかりに修築されたと傳ふるからである。この神輕過敏は成金者流の國

家が常に陷るものではあるが、幾百年ぶりで諸侯を足下に踏みつぶした第一人者であるといふ自尊心が、北狄に亡ぼされるとあつては承知が出來ない。のみならず北狄の恐るべきものであることは彼の祖先が幾十代かにわたり經驗したことであるから、蒙恬をして三十萬の大軍を動かして匈奴遠征をやらせたのも强ち過敏とばかりは申されない。しかし諸君は靜に始皇帝の事跡をたづねるとき彼は臆病者であつたとの結論に達するであらう。

蒙恬の活動したのは主として西部蒙古であつた。しかし萬里の長城は數萬人の膏血を以て東、遼東に至るまで山河萬里、串聯一氣に築造された。强胡の防備は於是完全したのである。漢蒙を劃然と分する境界線は於是か全く成つたのである。此分界の築城されなかつた以前は漢蒙人の往來甚だ容易で蒙古人の深く內地に入るものも少くなかつた。從て漢人は蒙古人を以て敵國と看做してはゐなかつた。服すれば撫し、冠すれば勦すといふ樣な狀態であつたのである。

長城が對蒙防備上如何の價値を有してゐたかは、何人も疑問とするところで、これより以後長城を以て蒙人の侵略を喰ひ止めたことはあまり聞かぬ。思ふに長城

は防禦の第二線である。たとひそれが北支那全部を包容してゐても、長城外を收めて一種の外皮卽ち防禦地帶を保有しなければ、長城は完全の效力を示さない。長城そのものは、むしろ漢蒙兩族の分界線であると見る方が妥當であらう。始皇帝の長城を築くに當り、之を以て分界線と爲さうと明に意識はしなかつたかも知れない。しかし蒙古人に對する恐怖は、何か、そこに障壁を設けなければ安心が出來なかつた。すべての蒙古人を漢人と隔てなければ氣がすまなかつたのである。若し單に防備のみが目的があるならば要所の塞を監めさへすれば、それでよいのである。嘉峪關より山海關に至るまで連綿として築かれたのはこの所以に外ならぬ。若し單に防備のみが目的があるならば要所の塞を監めさへすれば、それでよいのであるが萬里を聯ねたといふところが彼の恐怖の如何に强かつたかを示してゐる。始皇帝は六國を滅した。しかし二世紀にわたる戰亂の餘勢は、未だ靜沈するに由もない。此爲に彼は多大の兵力を中原に留むる必要を思つた。强胡の侵略も亦一日も之を忽にするを得なかつた。少しの油斷も出來る筈がない。此時にあたり「秦を亡ぼすものは胡である」といふ片言が如何に彼の恐怖心を高めたかは想像されやう。人民が征役に苦しむことなどに費すべき考慮などは恐怖心の影に其

形をかくしてしまつたのも、彼としては無理がない。現在の長城は卽ち秦の築造したものにかかると云はれてゐる。しかし後代漢族の皇帝の常に長城の修築に意を留めないものはなかつたから現在のすべてがそうであるとは云はぬ。隨煬帝の長城修築は始皇帝に次ぐ有名なものである。内三關の長城が卽ち秦の築造にかかると云ふのはあやまりではあるまい。しからば秦の領土は北、如何なる地方まで擴張されたであらうか。吾人はこれまでに趙、燕の諸國が熱河(承德)から獨石口、代郡(慰)から陰山に沿ふて雲中に至る長城を築いたことを知つてゐる。秦は此等諸國の領土を取ると共に蒙恬の北征によつて更に北部まで其勢力を擴張し得たのである。卽ち雲中郡は綏遠の全部及び西翼察哈爾一部(陶林及涼城縣の一部)雁門郡は豐鎭、及び涼城縣の一部にまで及び代郡は慰州の北を根據として興和縣の全部を領してゐたのである。之を以て西翼察哈爾は商都の一縣を除く外屢々代、雁門、雲中の三郡に分治せられてゐたことを知る。蒙古人の天地は卽ち純然たる蒙古高原に限られてしまつたのである。再び云ふ、東翼察哈爾は純然たる蒙古高原である。東胡及匈奴は依然として此地

を横行するの自由を有してゐたことを認めねばならぬ。然しながら山西北部の疆域より、更に西翼察哈爾及び綏遠の地をも棄てなければならなかつた匈奴は、漢北に彼等の天地を見出すより外なかつたのは止むを得ぬ。何故なれば造陽の北はすでに東胡の逃遁地であつたからである。匈奴の住居が、地理的に、漢人征來の目的となる、より多くの運命を有してゐたからである。大漠の北に追はるれば匈奴は、急に其創痍を治することは困難であつた。從て彼等の名は暫くの間、漢人の耳朶を驚かすことはなかつたのである。

しかるに東胡は、秦開の一擊に脆くも北走したけれども、造陽の北まで棄てる必要がなかつた。彼等は匈奴に比し地理的に有利な位置を占めてゐたのを幸福とする。此幸福は東胡の勢力をあまりに減少はさせはしなかつた。從て匈奴が朔北に窮々たる時に當つて東胡は多倫附近にあつて可成の勢力を維持してゐたのである。

始皇帝の在位は僅に十五年にして終つた。二世皇帝の暗弱は權臣趙高の專横と共に群雄の蜂起を促すに充分であつた。第二の戰國は再び中原に現るるに至つ

た。邊境の守りの如きは留意すべく、あまりに漢人は相互の攻防に多忙を極めてゐた。蒙古人の南下が自然的に行はれるのを吾人は無條件で認めぬ譯には行かぬ。此時に當り漠北に逃れた匈奴に一偉人の出現を見た。名附けて冒頓といふ。鳴鏑を以て衆心を一にし、其向ふ所を知らしめたと云ふ。蒙古人獨特の騎兵突擊を以て外敵の攻略に從事したものらしい。彼は先づ西方月氏を破りて之を逐ひ、驕れる東胡王の備を爲さゞるに乘じて、大いに之を破り其民衆及び畜產を獲得してしまつた。此餘勢を以て防備の弛める邊境を襲ふ。その結果や戰はざるもすでに明である。斯くして朔漠の雄は坐ながらにして强大なる一國を形成してしまつた。其領土たるや內外蒙古及び甘肅の北境にまで及び、其控弦の士三十餘萬、單于冒頓、自ら中央に居つて代郡雲中に當り、左右には各々賢王、谷蠡王、大將、大都尉、大當戶、骨都侯等の官を置いて、嚴然と中華を下瞰したところは實に堂々たるものであつた。左賢王は卽ち漁陽郡(密雲)の北に播居してゐたのである。

## 第六　漢　代

既にして漢の高帝、項籍を滅して中原を定め、韓王信を太原に移して馬邑(山西朔平府朔州)に都させたが韓王は元と漢王と共に中原を爭つたものであるから、匈奴の來襲に會ふや、其よく敵せざるを知り直ちに匈奴に降伏の意を示し、匈奴の兵を率ゐて晉陽を攻略させた。これ帝卽位後七年である。此匈奴を率ゐる者は勿論冒頓單于であらねばならぬ。高帝これを聞いて親しく大兵を率ゐて匈奴を征服し遂に平城(大同城)に至つて、冒頓と相對峙するに至つたのである。冒頓の精兵は實に四十萬を算し、しかも漠南を席捲した常勝軍である。高帝も遂に白登(大同城の東北七支里)に包圍されてしまつた。しかし高帝の幕下には有名な謀將陳平がゐた百計盡きて尙百計を見出すのが陳平の仕事であり、又得意の壇上でもある。遂に一奇計は畫策された。四十萬の精兵を以て圍まれた眇たる一弧山白登には何時の間にか高帝の姿は見ねなくなつてしまつた。圍の一方が陳平の奇計によつて解かれたのである。吾人はその奇計の如何なるものであつたかを知らぬ。しかし高帝が身を以て脫れたことはその時の周圍の狀況を看察することによつて推し得。陳平の奇計と雖もその上に出られる理由がない。從つて高帝に從つて

ゐた漢將が悉く冒頓の軍に降つたことも見易き理である。之等漢の降將が單于の庭に仕へ、冒頓に敎へて屢々漢の地を侵蝕せしめた。漢人の指導によつて漢族の地を侵すのである、或は社稷をおびやかすことがないとは云へぬ。冒頓に對する高帝の憂患は次第にその大を増した。しかし之を討伐する爲には少くも四十萬の精騎を要する。之れが彼には可成に苦しい。仕方がない、彼は一時の屈辱を甘んじて單于と和し、內治の爲に力を注ぐに如かずと考へた。卽ち彼は婁敬なるものを單于の庭に遣はし、宮女を公主として、美粧して單于に贈り其閼氏(單于の妻)と爲し、又歲に繒絮、酒食等を贈つて和親の約を結ばしめたのである。斯くして匈奴の侵攻から逃れることは出來たが、匈奴の勢は益々强盛に赴いて西域諸國は皆彼の號令を聞くことになつた。日逐王、僮僕都尉等は西邊に置かれた匈奴の官なのである。

勢盛なれば遂に驕傲の態度を取る樣になるのは止むを得ぬ。漢と結んだ和親の約は長く其效力を有するものと思ふのはむしろ漢の弱味からである。高帝の沒後僅か十年ならずして匈奴は、すでに邊境を橫行し始めたのである。しかし三代

文帝四代景帝は未だ南方の攻畧に從事してゐたので、北寇は之を顧る暇がなかつた。五代武帝は野心家である。漢國の基礎も文景二帝により大いに堅固を加へて來たので、遂に匈奴遠征を企つるに至つた。先づ帝は謀を用ゐて匈奴を誘ひ、以て之を襲擊しやうとしたけれども不成功に終つた。しかも匈奴の邊塞に入つて寇をなすもの益々多く、上谷も之が侵畧の手より逃るるを得なかつた。元朔二年武帝は遂に志を決し、大將軍衞青をして、敵を襲はしむることにしたのである。衞青卽ち上谷の匈奴を驅逐し追ふて、龍城に至りて激戰し胡首虜七百人を獲た。同時に公孫敖も亦、代郡に出て匈奴攻畧に從つたけれども、匈奴の爲に敗られてしまつた。茲に龍城といふのは何處を云ふのであるか知らぬ。しかし「元朔二年漢造陽の地を棄てて胡に與ふ」といふ記事から推察して、龍城は今の龍門、又は赤城ではあるまいか。

元朔二年は衞青が匈奴と上谷に戰つた年である。もし衞青の軍が匈奴を擊破し得たならば造陽の地は胡に與ふる筈がない。これ造陽は對胡防備上最も險要の地だからである。衞青が胡首虜七百を獲たといふ。しかし勝つたといふ記事は

ない。匈奴も亦漢首虜五六百は獲たかもわからない。蒙古人の記錄を見ない以上これくらゐの推測はあまり無理ではないだらうと思ふ。しかも公孫敖は代郡に於て敗られてゐる。

造陽を與ふるといふのは造陽を以て胡地に非ずとしてゐるからである。「造陽の北九百里を棄つ」などと云ふ記事は漢人の寢言に過ぎないと僕は思つてゐる。故に衞青の匈奴征討はあまり效果を擧げなかつたと見るが至當であらう。從て上谷郡も代郡も依然として匈奴の横行に任せるより外なかつた。もし上谷の一部を漢が保有するを得たとしても、保安、懷來の平地のみで、赤城龍門の谷地は漢の勢力下とは見られない。

元狩元年武帝は再び博望侯及び李將軍廣をして、右北平を出でて匈奴の左賢王を擊たせた。しかして李廣の軍は左賢王の爲に包圍されて、部下四千人の中過半は殺されてしまつた。匈奴の死傷も相當多かつたさうであるから戰は激しかつたに違ひない。會々博望侯の救援するに會つて李將軍は身を以て脫るるを得たけれども、其軍は遂に全滅の憂を見たのである。

しかし、張騫の西域遣使は匈奴にとつては苦痛であつたことは慥かである。西域なる月氏は前に冒頓が驅逐したものであるから、漢と協力して其故地を復さうとするのは豫期しなければならぬ。果して漢は西方に進出した。驃騎將軍霍去病が率ゐるところの軍である。彼は河南(オルドス)の地を取り朔方郡(朔方)を置いて更に北進し狼居胥(陰山の東、烏桓山の西)(カルカス地方にありしと云ふも明かならず)に至りて軍を還した。けれどもそれは一時であつた。右賢王は漠南から逃走したらうけれども、單于は漠北にまで逃げはしなかつた。その後間もなく匈奴の來寇を見たのはその證據であらねばならぬ。李廣をして左賢王を攻畧せしめたのもその爲である。それが前述の失敗を招いたので、武帝は於是匈奴討伐を思ひ止めてしまつたのである。

始め匈奴が東胡王を撃破したとき、東胡の餘族は二分して、一は烏桓山、(林西の東北蒙古阿魯科爾沁西北一百四十里にあり、烏聯山又は烏遼山といふ)に據り他は鮮卑山(内蒙古科爾沁右翼の西三十里、熱河の北方)を保つて、僅に匈奴の迫害をのがれてゐた。前者を烏桓と云ひ、後者を鮮卑と云ふはその山名を以て名附けたのである。

烏桓はその地匈奴に隣接してゐたので、常にその迫害を蒙つてゐたと見えて、正當の軍を以て敵對し得ない彼等烏桓は、匈奴單于の冢(墳)を發掘しては、せめてもの心いせとしてゐた。之を知つた匈奴はそのまゝにしては置かぬ。直ちに二萬騎を發して烏桓を撃たふとしたのである。匈奴の降者より之を聞知した漢の大將軍霍光は兵を發して之を横撃せんと計つた。護軍都尉趙國充は之に反對したけれども、中郎將范明友の賛成を得たので、霍光は明友を度遼將軍となし、二萬騎に將として先づ遼東に進出した。匈奴は之を聞いて北走してしまつたので明友は遂に烏桓を攻めた。烏桓は時に匈奴と兵を交へてゐて敝徹してゐたので大いに敗北して三王及び六千餘の人命を失ふの悲運に會つた。時は昭帝(武帝の次)始元年中である。之れより、匈奴漢を恐れて久しく邊境に寇しなかつた。

宣帝の神爵四年、烏桓姑夕頗る民心を得、出でて匈奴の東邊を侵した。匈奴單于大に怒り、兵を發せんとしたので、姑夕王は之を恐れ、烏禪幕及左地貴人を與へて之と和し、相共に稽侯㹶なる者を立てて呼韓邪單于と爲すことを約した。

匈奴單于は姑夕王を約して東方の憂を除いたので、今度は西方に進出して烏孫(甘

肅及びその北方)を攻略し始めた。烏孫、匈奴の勢を恐れ、救を漢に求めたので、漢は兵を出して之を救援させた。しかし匈奴は今度も漢兵の來援を聞いて遁げてしまつた。漢將常惠遂に烏孫の兵を率ゐて之を追擊し、斬獲少くはなかつた。其冬匈奴は復烏孫を攻めたが大雪に逢ひ士馬多く凍死し、且つ丁零(エニセイ河上流よりバイカル湖方面に居す)なる北狄虛に乘じて匈奴の北邊を侵し、烏桓又東より侵入を企て、加ふるに烏孫の逆襲に會ふあつて、匈奴の勢は大いに衰ゐてしまつた。諸君は匈奴の全盛時代、西邊に日逐王なる匈奴のあつたのを記憶してゐるであらう。その日逐王も居蓍堂單于と隙あつて漢に投降してしまつた。

その後の蒙古は、さながら戰國の狀態であつた。しかし結局呼韓邪單于(匈奴)と郅支單于との二大勢力が相對峙することになつた。郅支單于の勢は、中にも強く、呼韓邪單于は、屢々彼の爲に破られたので、藩臣と稱して漢に來朝することになつた。後呼韓邪單于は國に歸つて大いに民衆を服從し、勢次第に強くなつた。恰も郅支單于は西域都護甘延壽の爲に亡ぼされたので、呼韓邪單于大いに喜んで、復た來朝し、漢の婿たらんことを請ふた。これ元帝の建昭三年である。王昭君悲劇の一齣

は此時に於て演じられたのである。(王昭君の墓碑は歸化城の南二十支里の田園中にありとも傳ふ)これより以後匈奴は常に漢に服從してゐたが王莽の時に至つて又叛き出した。王莽は王位簒奪者である。彼が內政に其暴逆を行ふたことは云はずもがな、蠻夷の諸王を改めて侯となし、其待遇の道を失つたのに加へて匈奴を討たんとして、十二部の軍を興し、東域の將嚴尤をして烏桓、丁零の兵を領して代郡に屯し、皆其妻子を郡縣に質として取り上げ護烏桓校尉を置いて彼等を監督せしめた。察哈爾は卽ち護烏桓校尉の治むる所である。然るに烏桓は代郡の地が彼等の生活に適しないのを理由として、塞外に去りたいと願ふこと頻りだつた、けれども、莽は之を許さなかつたので遂に皆逃れて、小賊と化してしまつた。護烏桓校尉の監護の如きは何の役にもたたなかつた。しかし其質は盡く斬殺されてしまつた。烏桓が如何に此事を以て莽を怨んだかは察するに餘りある。しかも莽が三十萬の大軍を派して征せしめた匈奴は反つて、漢軍を敗るの狀態だつたので、先に代郡より逃れた烏桓は察哈爾一帶に偏布して、代郡、雁門、太原、朔方、諸

郡に迫ることとなつたのである。

鮮卑も、その後次第に勢力を得て熱河に進出し代郡以東を侵し、匈奴も亦次第に南下を企てて來たのである。

## 第七　後漢時代

斯くの如きが故に、後漢光武帝が中原を定むるに及んで、外藩との干係は漸く繁雑を加へて來たのである。光武の初年、烏桓、匈奴鮮卑と兵を連ねて入寇した。其害の最も甚しかつたのは代郡以東である。彼等は居を邊境に構へて所謂「朝發穹廬、暮至城郭」して、ほしいままに横行した。城郭は破壞され、田園は荒され、五郡の民庶その害を受けないものはなかつた。加ふるに塞內は連年の旱蝗に人畜の死耗するものが多かつたので百姓は遂に堪ねずして流亡し郡縣は廢されてしまつたけれども、中原の鹿を血眼になつて追ふてゐる諸侯は誰一人顧るものはなかつたのである。此等外夷の中最も富强を極めたのが上谷塞外なる白山に根據を構るものであつた。（白山は四時頂上に雪を戴くが故に白山と云ふと記するのみでその

ない。匈奴も亦漢首虜五六百は獲たかもわからない。蒙古人の記錄を見ない以上これくらゐの推測はあまり無理ではないだらうと思ふ。しかも公孫敖は代郡に於て敗られてゐる。

造陽を與ふるといふのは造陽を以て胡地に非ずとしてゐるからである。「造陽の北九百里を棄つ」などと云ふ記事は漢人の寢言に過ぎないと僕は思つてゐる。故に衞青の匈奴征討はあまり效果を擧げなかつたと見るが至當であらう。從て上谷郡も代郡も依然として匈奴の橫行に任せるより外なかつた。もし上谷の一部を漢が保有するを得たとしても、保安、懷來の平地のみで、赤城龍門の谷地は漢の勢力下とは見られない。

元狩元年武帝は再び博望侯及び李將軍廣をして、右北平を出でて匈奴の左賢王を擊たせた。しかして李廣の軍は左賢王の爲に包圍されて、部下四千人の中過半は殺されてしまつた。匈奴の死傷も相當多かつたさうであるから戰は激しかつたに違ひない。會々博望侯の救援するに會つて李將軍は身を以て脫るるを得たけれども、其軍は遂に全滅の憂を見たのである。

しかし、張騫の西域遣使は匈奴にとつては苦痛であつたことは慥かである。西域なる月氏は前に冒頓が驅逐したものであるから、漢と協力して其故地を復さうとするのは豫期しなければならぬ。果して漢は西方に進出した。驃騎將軍霍去病が率ゐるところの軍である。彼は河南(オルドス)の地を取り朔方郡(朔方)を置いて更に北進し狼居胥(陰山の東、烏桓山の西(カルカス地方にありしと云ふも明かならず)に至りて軍を還した。けれどもそれは一時であつた。右賢王は漠南から逃走したらうけれども、單于は漠北にまで逃げはしなかつた。その後間もなく匈奴の來寇を見たのはその證據であらねばならぬ。李廣をして左賢王を攻略せしめたのもその爲である。それが前述の失敗を招いたので、武帝は於是匈奴討伐を思ひ止めてしまつたのである。

始め匈奴が東胡王を擊破したとき、東胡の餘族は二分して、一は烏桓山(林西の東北蒙古阿魯科爾沁西北一百四十里にあり、烏聯山又は烏遼山といふ)に據り他は鮮卑山(內蒙古科爾沁右翼の西三十里、熱河の北方)を保つて、僅に匈奴の迫害をのがれてゐた。前者を烏桓と云ひ、後者を鮮卑と云ふはその山名を以て名附けたのである。

烏桓はその地匈奴に隣接してゐたので、常にその迫害を蒙つてゐたと見ゑて、正當の軍を以て敵對し得ない彼等烏桓は、匈奴單于の冢(墳)を發掘しては、せめてもの心いせとしてゐた。之を知つた匈奴はそのままにしては置かぬ。直ちに二萬騎を發して烏桓を擊たふとしたのである。匈奴の降者より之を聞知した漢の大將軍霍光は兵を發して之を横擊せんと計つた。護軍都尉趙國充は之に反對したけれども、中郎將范明友の賛成を得たので、霍光は明友を度遼將軍となし、二萬騎に將として先づ遼東に進出した。匈奴は之を聞いて北走してしまつたので明友は遂に烏桓を攻めた。烏桓は時に匈奴と兵を交ゑてゐて敝微してゐたので大いに敗北して三王及び六千餘の人命を失ふの悲運に會つた。時は昭帝(武帝の次)始元年中である。之れより、匈奴漢を恐れて久しく邊境に寇しなかつた。匈奴單于大宣帝の神爵四年、烏桓姑夕頗る民心を得、出でて匈奴の東邊を侵した。匈奴單于大に怒り、兵を發せんとしたので、姑夕王は之を恐れ、烏禪幕及左地貴人を與へて之と和し、相共に稽侯𤡆なる者を立てて呼韓邪單于と爲すことを約した。匈奴單于は姑夕王を約して東方の憂を除いたので、今度は西方に進出して烏孫(甘

粛及びその北方)を攻略し始めた。烏孫、匈奴の勢を恐れ、救を漢に求めたので、漢は兵を出して之を救援させた。しかし匈奴は今度も漢兵の來援を聞いて遁げてしまつた。漢將常惠遂に烏孫の兵を率ゐて之を追擊し、斬獲少くはなかつた。其冬匈奴は復烏孫を攻めたが大雪に逢ひ士馬多く凍死し、且つ丁零(エニセイ河上流よりバイカル湖方面に居す)なる北狄虚に乘じて匈奴の北邊を侵し、烏桓又東より侵入を企て、加ふるに烏孫の逆襲に會ふあつて、匈奴の勢は大いに衰ねてしまつた。諸君は匈奴の全盛時代、西邊に日逐王なる匈奴のあつたのを記憶してゐるであらう。その日逐王も屠耆堂單于と隙あつて漢に投降してしまつた。

その後の蒙古は、さながら戰國の狀態であつた。しかし結局呼韓邪單于(匈奴)と郅支單于との二大勢力が相對峙することになつた。郅支單于の勢は、中にも強く、呼韓邪單于は、屢々彼の爲に破られたので、藩臣と稱して漢に來朝することになつた。後呼韓邪單于は國に歸つて大いに民衆を服從し、勢次第に強くなつた。恰も郅支單于は西域都護甘延壽の爲に亡ぼされたので、呼韓邪單于大いに喜んで、復た來朝し、漢の婿たらんことを請ふた。これ元帝の建昭三年である。王昭君悲劇の一齣

は此時に於て演じられたのである。(王昭君の墓碑は歸化城の南二十支里の舊園中にあり。眞の墓は歸化城の北なる大青山中にありとも傳ふ)これより以後匈奴は常に漢に服從してゐたが王莽の時に至つて又叛き出した。王莽は王位簒奪者である。彼が內政に其暴逆を行ふたことは云はずもがな、蠻夷の諸王を改めて侯となし、其待遇の道を失つたのに加へて匈奴を討たんとして、十二部の軍を興し、東域の將嚴尤をして烏桓、丁零の兵を領して代郡に屯し、皆其妻子を郡縣に質として取り上げ護烏桓校尉を置いて彼等を監督せしめた。察哈爾は卽ち護烏桓校尉の治むる所である。然るに烏桓は代郡の地が彼等の生活に適しないのを理由として、塞外に去りたいと願ふこと頻りだつた、けれども、莽は之を許さなかつたので遂に皆逃れて、小賊と化してしまつた。護烏桓校尉の監護の如きは何の役にもたたなかつた。しかし其質は盡く斬殺されてしまつた。烏桓が如何に此事を以て莽を怨んだかは察するに餘りある。しかも莽が三十萬の大軍を派して征せしめた匈奴は反つて、漢軍を敗るの狀態だつたので、先に代郡より逃れた烏桓は察哈爾一帶に偏布して、代郡、雁門、太原、朔方、諸

郡に迫ることとなつたのである。鮮卑も、その後次第に勢力を得て熱河に進出し代郡以東を侵し、匈奴も亦次第に南下を企てて來たのである。

## 第七　後漢時代

斯くの如きが故に、後漢光武帝が中原を定むるに及んで、外藩との干係は漸く繁雜を加へて來たのである。光武の初年、烏桓、匈奴鮮卑と兵を連ねて入寇した。其害の最も甚しかつたのは代郡以東である。彼等は居を邊境に構へて所謂「朝發穹廬、暮至城郭」して、ほしいままに横行した。城郭は破壞され、田園は荒され、五郡の民庶その害を受けないものはなかつた。加ふるに塞内は連年の旱蝗に人畜の死耗するものが多かつたので百姓は遂に堪ねずして流亡し郡縣は廢されてしまつたけれども、中原の鹿を血眼になつて追ふてゐる諸侯は誰一人顧るものはなかつたのである。此等外夷の中最も富强を極めたのが上谷塞外なる白山に根據を構るものであつた。(白山は四時頂上に雪を戴くが故に白山と云ふと記するのみでその

何處なるや明でない。多分今の沽源縣管内だらうと思ふ。）光武帝、卽ち、建武二十一年冬十月伏波將軍馬援を遣はし、代郡なる五原關（紫荊關）を出でて烏桓を攻めしめた。烏桓之を知り相率ゐて逃走したので馬援之を追擊したが獲るところ少く、遂に軍を還してしまつた。之れ烏桓の策略である。高原に漢軍を誘ひ、軍を還すを待つて得意の猛襲を行ふたのである。馬援遂に大いに敗れ、晨夜奔歸し、塞内に入る頃には馬の死する者實に千餘匹であつたといふ。翌二十二年には烏桓、匈奴を擊破して悉く漠南の地を收めてしまつた。時に光武帝全く宇内を統一し、前漢の勢を回復したので、建武二十五年烏桓大人來朝し、三十年には鮮卑大人來つて内屬の意を示すことになつた。漢卽ち常山、居庸二關の後方はすべて彼等の居所とし、寧城（萬全）より護烏桓校尉を退かしめ此地に南北質館を置いた。蓋し烏桓鮮卑が中國の文華にあこがれたのである。しかるに建武の末年頃より、赤山（興和城ならむ）に據を構ふる烏桓、數々上谷を侵して害を爲したので詔して功賞を設け、之を塞外に追はんとしたけれども、禁ずることが出來なかつた。時に祭肜なるもの遼東にあつて、太守となつてゐた。彼乃ち鮮卑の偏何なるもの

を誘ひ之を率ゐて、烏桓討伐を行ふた。二代明帝の永平元年に至り偏何遂に赤山を撃破して、其魁師を斬り、首級を持つて彤の下に詣つた。赤山(不明、但し白山と相對するものであるから東翼察哈爾内であるらしい)烏桓は此意外なる强敵に襲はれて如何に驚いたことであらう。

烏桓に追はれた匈奴は漠北より西方に進出したので明帝は耿秉、竇固を將として五原(綏遠管内)より出で之を北方に驅逐し、又彼の班超の西域征服等の事がありて匈奴の勢大いに衰へ、遂に服從するの止むなきに至つたけれども、四代和帝の時に匈奴の逢侯なるもの漢の吏民を殺して漠北を經畧しやうと謀つた。帝乃ち永元六年冬十一月、車騎將軍鄧鴻等を遣して、羽林五校(禁衞軍の五將士)及び郡國積射緣邊兵に將として、逢侯討伐に向はしめた。鴻卽ち護烏桓校尉任尙の率ゐる烏桓鮮卑の兵四萬と共に大いに逢侯を敗り、焉杜亦兵を遣はして之を追擊して又大勝した。

永和五年春、南匈奴左部吾斯等の叛あり。馬續與梁、護烏桓校尉王元と共に、緣邊兵及び烏桓鮮卑、羌胡等を發し、合計二萬の兵を以て掩襲して之を敗つた。南匈奴左部とは五原地方の匈奴である。羌胡は鄂爾多斯に住んでゐたといふ。

以上數度の戰鬪に漢軍を助けて功あつた烏桓及び鮮卑は、漸く橫着の體度を示して來たのは止むを得ぬ。實勢力も亦次第に加つてゐたことは申すまでもない。和帝四代の孫順帝が其永建二年護烏桓校尉耿曄をして鮮卑を撃たしめたのも、更に又建康元年、匈奴中郞將馬寔が再び南匈奴左部を撃ちて、烏桓、胡光を脅したのも此爲に外ならぬ。併し鮮卑の勢は仲々衰ねなかつた。烏桓が代、雁門、雲中、定襄の諸郡國及び之れに近い塞外に散布してゐたが、鮮卑は東翼察哈爾より烏桓の北部を包むで、東は右北平から西は實に五原以西まで及んだといふ。匈奴は卽ち鮮卑の北に居してゐたのである。

漢は其後、宦官の跋扈、黨人の禍等ありて、其政愈衰微し始めたのに靈帝の時には黃巾の賊、所在を燔刦するの始末であつたので大兵を動かすことが出來ず、只一度、護烏桓校尉夏齊が熹平六年八月、高柳(代郡)を出でて鮮卑を伐つたのみである。其效果の僅少であつたことは察するに餘りある。思ふに夏齊が護烏桓校尉としての位置を保ち得たに過ぎまい。

## 第八　三國及晉代より五胡十六國時代まで

之れより先き桓帝(靈帝の前)の延喜六年鮮卑の檀石槐なるもの、自ら其地を分ちて三部となし、右北平より以西の上谷十餘邑を中部となし、漁陽、上谷、二郡の地に居を定めて次第にその勢力を增して行つた。(遼東二十餘邑は東部、上谷の西、敦煌に至るを西部)、烏桓大人亦上谷にあり、靈帝の初年に至り部下の九十有餘落悉く王を稱して漢に對抗の氣勢を示し出したのである。漢末に至り遂に閻柔なるもの護烏桓校尉を殺し、邢舉を代理として烏桓、鮮卑を師ゐて歸附せしめた。時に漢は相國董卓の暴虐に憤慨し郡雄四方に起り甲討乙伐の亂脈を呈してゐた。しかし北部は曹操なるもの魏公となつて山西、及び直隸の南部を領し、吳蜀と共に天下三分の形勢を爲す勢を以て居たので烏桓も敢て中國を侵さず、或るときは反つて魏公の爲に襲はれたこともある程である。邢舉の歸附したのは卽ち此魏公である。魏公卽ち閻柔を校尉に封じた。時は後漢最後の帝なる獻帝の建安十一年である。既に此に於て閻柔統ぶるところの烏桓一萬餘部落は悉く中國に其居を定めた。

して魏公曹操死し、その子丕遂に獻帝を廢して魏王と稱し、中原に居を占めて勢益々盛であつた、之を文帝といふ。しかし呉蜀との交戰に寧日もなき有樣だつたので烏桓鮮卑の居は次第に南下し上谷代、雁門、雲中、定襄は勿論の事、東は幽州を領し、西は鄂爾多斯から陝西の楡林以南まで南下して來た。從て此等地方の郡縣は悉く廢され、彼等は平和の中に彼等の故地を安全に見出したのである。又敢て漢の地を侵害しやうとも思はなかつたので依然として魏の配下たるに滿足してゐた。文帝の時は田豫が護烏桓校尉となり、明帝は又、其衆を五部に分ちて各長を撰任して之を師と稱し、漢人の一人を司馬と爲して烏桓を監督してゐた。魏末に師を改めて都尉と稱したが、要するに漢蒙の衝突は起らずに濟んだ譯である。

しかるに魏將司馬懿の孫炎、呉蜀二國を滅して天下を統一し晉國を建設してより姦臣、外戚の跋扈あり、加ふるに二代惠帝の世に至つて八王の亂あり、骨肉相爭ひ、又清談の風行はれて士風惰弱に陷つたので、所謂五胡の中原に亂入するもの次第に其多きを加へ出した。

抑々漢魏以來、來降したる戎狄は中國人と共に內地に雜居することを許してゐた

が、年を經るままに漸く繁殖し、その勢も亦從て強く、或るときは怨恨によつて吏民を殺害することさへあつた。晉の世に至つて、內亂の續發は彼等が勢力の增長となり、彼等が勢力の增長は、遂に晉室の社稷を脅すもののあるを見、郭欽は武帝に、江統は惠帝に各徙戎の緊要事なることを上疏しなけれども、用ゐられなかつた。他日の大患は此時に釀されたのである。

恰も好し匈奴に一偉人の出現を見た。彼の名を劉淵といふ。祖を於扶羅と云ひ、父を豹といひ、嘗ては洛陽にあつて任子となつてゐたことがあつたといふ。劉淵は父の死後左賢王となり、又建威將軍五部の大都督となつた。五部とは魏の明帝によりて分たれた戎狄の區分である。而劉淵は新興の人であるといふ。新興とは今の山西省太原府の北、忻縣のことである。之れによつて蒙古人が如何なる地方まで南下してゐたかを知ることが出來る。淵は成都王李雄と提携し、晉の內亂に乘じて山西省汾州府なる汾水のほとり左國城に據り、大單于と稱し遂に國を立てて自立した、之を漢といふ。彼は蒙古人にして中原に國を建てた隨一人である。しかも彼は石勒、王彌、劉曜等を用ゐて、大いに晉軍と戰ひ、弟劉聰は遂に長安を陷れ

て山西なる平陽に都し劉曜又、その後を襲ふて長安に遷都し河北の地を保つてゐた。晉室は遂に都を建業(江蘇)に移してしまつた。この後を東晉といふ。斯くの如く漢趙は中原に覇を稱へてゐたけれども、北方は遂に彼の勢力の及び得なかつたところである。しかも漢趙の如きは戎狄の、漢人と共に中原を爭ふたる最初の人たるに過ぎない。或は近親を殺し、或は主を殺し、或は又父兄さへも殺して、入り代り立ち代り十六國が、眼まぐろしい戰鬪を續けることが東晉、元帝の太興二年から南朝宋の文帝元嘉十六年まで實に百二十年の間であつた。そのうち吾が察哈爾蒙古と離るべからざる干係を有するものは代(後の魏)及び鮮卑の慕容の族であらねばならぬ。

李雄、劉淵と殆んど同時に塞北に擡頭したる二人あり、鮮卑にして大棘城(朝陽府、義縣龍城とも云ふ)に據つた者を慕容廆と云ひ、上谷の北、多倫附近にあつて可汗を稱してゐた者を拓跋祿官といふ。やはり鮮卑種である。就中後者は察哈爾にその産聲を擧げて、察哈爾にその少年期を過したといふも宜い程である。

晉惠帝の元康五年拓拔綠官は其國を三分して、自らは上谷の北濡源(上都河上流)の

西に居り、兄子猗㐌をして代郡參合陂(山西陽高縣の東北邊境外)(大同の東南にありとも云ふ)に居らしめ、定襄の盛樂故城(歸化城の南)には弟猗盧を置きて、統括させてゐた。元來拓拔の家は世に北部大人となつてゐたものだが、力微にして表はれず、曹魏の時の如きは子沙漠汗を遣して質とした程であつた。綠官は沙漠汗三代の孫であるのだ。

綠官其國を三分してから弟の猗盧やや勢を示し、曾ては晉の爲に代王に封ぜられ馬邑城を與へられたこともあつたが、部下の爲に殺され、是より以後も殺逆相繼いで部落は離散してしまつた。しかし猗盧の從孫什翼健なるもの立つに及んで驍勇にして智畧あり、悉く離散部落を集合して次第に勢を回復し東は濊貊(朝鮮北境)から西は破落那(コーカンド地方)にまで及び北は沙漠から南は陰山に至る地方を服してゐた。此時中原は石勒其主家を亡ぼして後趙國を建ててゐたがそれも部將苻堅の爲に亡ぼされ、苻堅は秦王と稱して勢威仲々に大であつた。之を前秦といふ。その勢を以て前凉を下し遂に代に迫つて來た。丁度この時代には內難あり什翼建の庶長子寔君、其弟を殺し又父をも殺してしまつた。この隙に乘じて秦軍は雲

中に進入することが出來、さしたる抵抗もなしに寔君を捕獲して代國を亡ぼし、勝手にその國を二分して劉庫仁と劉衞辰とに之を與へた。二人共劉淵の族であるといふ。

一方慕容氏は如何、慕容廆鮮卑大單于を稱してから、子皝立つて燕王と稱し(前燕)西段氏(?)を破り、南、趙兵を郤け、東、高麗を代ち北、宇文(鮮卑)を滅して其勢甚だ盛であつたが後趙の衰ふるに方つて、子の儁、慕容格等を遣はし、冉閔氏(魏)を亡ぼし、都を鄴(河南、河北道、彰德附近)に移して遂に帝を稱することとなつた。當時、塞北承德附近に勅勒なるものがあつた。儁帝卽ち慕容格の弟垂を遣はして大に之を塞北に破り俘斬十萬餘、馬十三萬、牛羊億萬頭を獲たといふから、散々に塞北を荒したことが想像される。儁の死後も慕容格及び垂の二人が子暐を輔けて、大いに國威を振つてゐたが、格の死後は、垂、南晉の名將桓温を枋頭(河南衞輝府城の北、淇縣)に破つて威名甚だ盛んであつたので遂に猜まれて秦に出奔してしまつた。この爲に燕は秦に滅さるる事になつたのである。これより慕容の族は陝西及び南部山西の地にあつて互に相爭ひ、秦と共に中原に肩を並べたけれども、北方にまで彼等の手は屆か

なかつた。しかし秦に逃れた慕容垂が中山(直隷定州)に後燕を建てたことは記憶して置かねばならぬ。何故なれば、垂は秦の滅亡後、西燕僞の子慕容仲、慕容永、長安に都す)を攻畧して魏を伐たんと謀つたからである。魏は卽ち拓拔氏、代國の後裔である。

始め拓拔什翼健の孫に珪なる者あり。當時尙幼なかつたので母賀氏は珪を携て劉庫仁に依食を乞ふて彼の下に亡命してゐたものである。

東晉孝武帝の大元九年、長樂公(順天、冀州)苻丕が後燕の爲に苦しめられるのを見て劉庫仁は大兵を擧げて之を救援しやうとした。丁度その時、庫仁の部下に燕の慕輿文なるものあり、或る夜、急に庫仁を襲擊して之を殺し、その駿馬を盜んで燕に逃奔してしまつた。そこで庫仁の弟頭眷が代つて其衆を領してゐたが翌太元十年庫仁の子顯は頭眷を殺して自立した。しかし何を恐れてか、顯は寄食してゐる拓拔珪を殺さうと企てたので、珪は急遽、賀蘭部に奔りて、彼の舅である賀訥の下に依ることになつた。

彼は亂世に生れて亂世にその生を培はれた。しかも彼には天稟の鋭さがあつた。

顯が彼を殺さんとしたのも多分此故であらう。珪に對する顯の恐怖は果して實現した。太元十年十二月珪の曾祖紇羅及びその弟建等が賀訥に請ふて遂に珪を推して賀蘭部の主としたのが是である。珪たるもの最早躊躇すべきではない。太元十一年正月彼は仍ち牛川(綏遠、托克托城の西北、盛樂)に其衆を集め、再び立つて代王となることを宣言した。同時に長孫嵩を以て南部大人としたのである。太元十二年代王珪、年號を登國、國號を魏と改め、圖南の一歩を踏み出した。彼は先づ十月、努川(不明、綏遠の西方ならむ)より牛川に遷幸し延水の南に屯し、更に代郡より上谷に出でて高柳(代郡)に至り賀驎と會合した。是れ賀驎が彼の配下たるを約したのである。後燕の慕容垂、珪の南下せんとするを見、太子寶を遣して之を伐たしめたが珪軍の爲に大敗したので、彼の勢の意外に强盛なるを知り太元十二年十二月垂は、珪をして西單于の印授を帶ばしめ上谷王に封じやうと申出たが、すでに胸中魏帝を以て任じてゐる彼は、納るべきもない。垂、是に於てか自ら大軍に將として魏を攻めやうとして征途に上つたが、不幸途中に病を得て死んでしまつた。珪此期に乘じて、大擧して燕を逆襲し、遂に進んで中山(直隸定州)を包圍した。燕帝寶

堪へずして龍城に出奔したが、部將蘭于の爲に殺せられた。於是、拓拔珪は都を平城(大同)に遷して魏帝を稱することとなつたのである。之を後魏の道武帝といふ。時は登國二年(太元十三年)珪が代王となつてから僅か二載に過ぎなかつた。斯くして魏帝珪は同年五月契丹の庫莫奚を弱落水の南に破り七月再び彼の襲擊を擊破して、遂に翌登國三年二月、東赤城に幸した。五月に至り三度兵を北方に動かして、六月大いに庫莫奚を破り、其四部雜畜十餘萬を獲得し、弱落水を渡りて將士を將賚し、大いに氣勢を擧げた。察するに弱落水とは上都河であらう。何故なれば魏帝の都は平城であつて、しかも赤城はその東に當つてゐて赤城は卽ち宣化府赤城縣である。而して五月赤城から北行して六月敵と會つたといふから弱落水の位置は上都河と見るも宜いだらうと思ふ。しかし錫林河が卽ち弱落水であるといふ推論を認めぬ譯には行かぬ。兎に角庫莫奚なるものは多倫又はその北方錫林鄂爾に居してゐたものであるに違ひない。

しかるに七月に至り劉衞辰が賀蘭部に侵入して來たので賀訥は之に敵するを得ず、困急甚だしかつたので魏に降を請ふて來た。魏帝卽ち訥の部落を悉く賀蘭部

の東境に徙してしまつた。十一月賀訥の弟賀染干が燕を逃れて牛川に歸來してゐたが登國五年正月其兄を謀殺しやうとして訥に知られ、賀蘭部は遂に兄弟相爭ふに至つた。於是魏王珪は燕に請ふて自ら嚮導となり、之を攻略せんと計つた。燕は乃ち二月慕容麟を遣して訥を討ち、更に將軍蘭干をして染干を攻めしめた。夏四月蘭干遂に染干を牛川に敗り、六月には麟、訥を赤城に擊破して之を禽にし其部落數萬を降した。燕王仍て麟をして訥の部落を統轄せしめ。染干を山中に徙した。

之より先き東晉奕帝の太和二年燕の下邳王慕容厲等勅勒を北に破り、馬牛數萬頭を獲得したことがあつたが、更に安帝の義熙九年に至り(魏帝即位より二十七年後)魏帝に追はれた慕莫奚が燕主に降服を申出た。時に燕は、內亂續發し、臣の馮跋なるもの北燕を建て順天に都してゐたので、慕莫奚の大人を善王の部下に移した。かかる間に魏帝珪は劉衞辰を攻めて之を殺し子勃々逃れて朔方にあり遂に大夏天王を稱することとなつてゐたのである。即ち魏の領土は錫林鄂爾、察哈爾上谷より、山西の大部、綏遠、四子部落、茂安明及び賀蘭の東方までを含んでゐた。直隸の北

部及び熱河の南部は燕の領域でなければならぬ。而中國は夏、西秦、北燕、北凉後、魏及び南晉の諸國が入り亂れて、相爭ふことを止めなかつた。

## 第九　後魏時代と隋

後魏の道武帝在位二十四年にして殂し子嗣立つ、之を明元帝といふ。彼は珪が奮戰の後を受けて、唯平安に其領土を保有するに止り、敢て外地併呑の野望を起さなかつた。しかし彼は神瑞二年五月、東、大寧(張家口外ならむ明の大寧故城は熱河平泉縣の東北にあれどもあまりに位置が異つてゐる)に幸し、六月辛酉濡源(上都河の源、獨石口外)に次し、烽臺を築いて燕に備へ、頹牛山に狩し白熊を獲たなぞと云ふから可成に餘裕があつたに違ひない。その餘裕を以て南宋を破つたこともあるのである。

太武帝は明元帝の子である。名を燾といふ。彼は父帝の內的勢力を外に向つて發輝し、西、夏主昌(勃々の子)を擊つて之を擒にし、東、北燕を攻略して馮跋の子弘を追ひ、北凉及び吐谷渾さへも降して遂に河北を一統し、其勢を駈つて東胡の一種であ

る柔然を北方に破り、玆に始めて太祖の偉望を成就したのである。太武帝は、しかし之を以て滿足はしなつた。彼の胸には圖南の計が欝積してゐる。しかし柔然の勢も亦之を度外視する譯には行かぬ。故に先づ北方の新民を漠南に列置して、之れが監督に便にして背後の憂を柔らげ樣としたのである。其配置の狀態を見るに、東は濡源より西は五原陰山に及ぶ、およそ三千里の間であるといふ。之を又武川、撫冥、懷朔、懷荒、柔玄、禦夷の六鎭に分けて監督に便にした。今其地を考ふるに、懷朔は光綠城の東北にある。光綠城は漢の五原稒陽の塞外、馬邑を去る北三百里の地にあるといふ。武川は白道中溪の水上にある。白道は陰山の北であつて、北は大漠に通じてゐる。今の綏遠武川縣(四子王部落)の地と見れば大差ない。柔玄鎭は干延水の東にある。「干延水は柔玄の西、長川城の南、小山の東南にあり漢の且如故城の南を經て東流す」といふけれども長川城、小山の位置がよくわからない。しかし今の東洋河は卽ち干延水であるから柔玄鎭の位置は今の張北縣及び興和縣治であるに違ひない。(興和縣內、二道河子附近)而懷荒は柔玄の東禦夷の西にありといふ。之に依つて懷荒は張北縣の東部及び沽源縣商都縣の一部で

禦夷は多倫縣及び沽源縣の一部であつたことがわかる。而て撫冥は察哈爾右翼族にあるといふから、涼城縣の北部から陶林縣まで含んでゐたのである。涼城縣自身は梁城郡と云つて代哈泊附近にあつたといふ。そして得勝門附近には永固鎭があつたから豐鎭はそれに含まれてゐて涼城と共に塞內である。

その後、太武帝は、太平眞君七年に至つて、幾土塞圍なるものを築き、上谷に起つて黃河の岸に至るまで廣袤千里を貫き、又塞圍の北方千里の地を以て長城の外郭とした。これより先き太祖道武帝も長川(千延水の一支流)の南に長城を築き赤城から西五原に至る二千里の延袤を聯ねたことがある。今の宣郡の邊垣が是であるといふ。

口北三廳志の著者は云ふ「濡水は禦夷鎭の東南に出て、西北流して禦夷故城の北を經過してゐる。濡水は卽ち今の灤水(上都河)であつて、灤水の源は塞外黑龍山に發してゐる。今の開平府の界である。則ち禦夷は灤水の流域であつて、懷朔、柔玄、武川と共に皆塞外にある。此に由つて六鎭はすべて塞外にあると推論を下すことが出來る。東は禦夷より起り西は懷朔に盡き、柔玄は眞中に居り、懷荒は又禦夷柔

玄の中にあることがわかる。三鎭は共に宣化府の塞外にあつて塞圏内にあることも明である。撫冥も亦東にあるといふ者があるけれども確ではない」と。斯くの如く北邊の守りを固めた太武帝は南宋をその敵手として圖南の實行に取りかゝつたことは云ふまでもあるまい。しかし、それはあまり察哈爾史の範圍外の樣だから、此には唯楊子江岸にまで大兵を進めたことを云ふに止めて置く。それだけで後魏の威勢の及ぶところを察することが出來る。史家が南宋を南朝と云ふに對して後魏を北朝と云ふのは此の後のことである。

しかし、支那皇室の常習たる内訌は、後魏の朝廷にも免かるゝを得なかつた數である。帝始め、崔浩なるものを親任してゐたが、國書の罪によつて之を殺し、更に宗愛なるものを用ゐてゐた。しかし愛は權勢を專にしてゐたので太子晃と仲が惡くひそかに晃を殺してしまつたが、發覺を恐れて太武をも殺してしまつた。そして勝手に安南王余を立て、又勝手に之を殺したので群臣は相謀つて晃の子濬を立て宗愛の族を誅した。之を文成帝と云ふ。帝は在位十四年にして崩殂し、太子弘が即位した。是が獻文帝である。帝は佛老の學を好んで嫌世的思想を持つてゐた

ので在位僅に五年で位を太子宏に讓つてしまつた。是が孝文帝である。その時年が僅に五歲であつたといふ。退位した獻文帝もまだ十七歲であつたといふから、一般に早婚の風があつたことを察することが出來る。

孝文帝の卽位後間もなく、延興三年十二月、柔然が柔玄鎭の二部に侵入し、勅勒も亦之に應じて叛した。しかし、その勢はあまりに大ではなかつたらしい。その後二十年ばかり經つてから孝文帝は、その太和十八年八月甲子に柔玄鎭に行幸し、同月乙丑、南に還幸したといふてゐるからである。その通つた途々に、彼は親しく高齡者を引見し、又人民の疾苦、貧窘、孤老等を訊ねて粟、帛を與へたといふ。帝は元來讀書を好み、先聖の政を慕つてゐたので、此外にも、刑罰を輕くしたり、均田の法を布いたり、或は戶籍を制し或は學校を立て、樂章を定め、祀典を正しくし、又は同姓の婚烟を禁じたりした。それから又平城は邊僻であるといふので南征に託して都を洛陽に遷し、遂に胡服を廢し、胡語を禁じ、國姓を改めて元となし、又諸弟をして中州の名族を娶つて前妻は之を妾媵となさして、その上に多くの中州の儒生、名族を親近したので宗室及び勳舊の者に悅ばないものが多く、或は胡服を著けて舊都に歸つ

たものもあり、又或は舊土を戀ふて叛を謀つたものさへあつた。帝は又海内を一統しやうとして屢々南朝と戰を交へたが遂に志を得ず在位二十九年で崩じてしまつた。慓悍勇武の風は漸く消ね出したが此時が後魏の極盛時であつたことは疑がない。太武帝によつて察哈爾一帶に分在せしめられた柔然は、次第に其勢を得て來たけれども、敢て侵略的態度を取らなかつたことでわかる。しかして柔然はずつと以前、後魏が中原に覇を爭ひ出してから、漠北の地に依つて可干を稱してゐたものであることを記憶せねばならぬ。そして漠南に居た柔然の勢力も相當強く、後魏に對して、よほど横著に振舞つた者と見ね、魏人も之を憎み、其名を醜悪にして虫類に比し蠕々と稱してゐたことは後魏の中世以後に於ける察哈爾の位置を暗示してくれるものではあるまいか。

洛陽に遷都してからの後魏の庭は、あまり察哈爾とは干係がないから、詳くは書かぬ、唯孝明帝の時になつてからは內訌が益々激しくなつて來て、宿衞の武士が蔓り、時に洛陽に參勤してゐた、懷朔鎮の函使高歡が、之を見て家に歸り、貲を傾けて客と結び、彼等に云ふて曰く「宿衞相率ゐて大臣の第を焚くも敢て禁討するものがない。

天下の事知るべきのみ」と。この言が撫蒙の一官吏の口から出たことが味ふべき點なのである。高歡は後に兵を擧げて帝を輔け遂に東魏の丞相となつた。北齊の始祖は卽ち彼である。

その孝明帝の正光二年四月、柔玄鎭に大雪が降つて、人民の困苦が甚だしかつたので、元孚なるもの白虎の幡を持つて柔玄、懷荒二鎭の間に蠕々主阿那瓌を勞ふた。これ一種の懷柔策である。その時阿那瓌の衆は三十萬と號してゐた、陰に叛意があつたので、遂に孚を拘留し、轀車(囚人を乘せる車)に乘せて、日に酪一升、肉一段(酪は槳卽ち酒類にして、肉と共に匈奴の常食なり)を給し、其衆が集る每に、孚の東廂に坐して之を行臺と稱し、甚だ禮敬を加へた。しばらくしてから遂に、孚の轀車と共に南に下り舊京(平城)に至つて始めて、元孚の歸還を許したのである。

間もなく蠕々主那瓌は懷荒鎭によつて反叛した。干景、懷荒鎭將となつて之に赴いた。しかし鎭民が困厄をも顧みず粮廩を徵集したので、鎭民の怨をまねき遂に景及其妻は執縛されて別室に拘禁されてしまつた。鎭民は倘倦き足らず、二人に胡服を著せて毀辱を加へること月餘に及び遂に之を殺してしまつた。阿那瓌の

勢力は一段と加はらざるを得ない。正光五年、帝は沃野(朔方郡)懷朔、薄骨律(朔方郡)武川、撫冥、懷荒、禦夷を改めて州と爲し、其郡縣は古城邑の名を以て名附けた。又酈道元に詔して節を持して、黄門侍郎を兼ね、都督、李宗籌と共に諸兵の粮廩を貯へて、邊備の事を司らしめた。しかしその實勢力は塞内のみであつて塞外は依然として、柔然の横行を許すか、若しくは彼等の機嫌を取らねばならなかつたに相違ない。その後の魏は内爭益々甚だしく、遂に東西の二魏に分れ、それが又北齊及び北周に代られ、北周の相國堅、又帝にせまりて帝位を讓らしめた、是れ隋の高祖である。海内を統一した隋國の建設者である。しからば、柔然はどうなつただらうか。阿那瓌が塞北に威を振ひ、背面にあつて魏を嘲笑してゐたのも唯嘲笑に止り阿那瓌の死後は次第に勢衰へ、加ふるに北方に突厥の起るあつて、盛に柔然を侵犯したので、國を擧げて北齊に投じてしまつた。彼等が漠北に可汗を稱すること殆んど百五十年であるといふ。北齊主即ち柔然を助けて突厥を攻つたが成らず、突厥は悉く漠北を占領してしまつた。而て柔然

は馬邑川のほとりに移らなければならなかつた。馬邑は朔州であるけれども、馬邑川の何處であるかはわからない。しかしやはり馬邑附近であるといふ推察はつく。何故なれば、突厥の地は漠北であるといふけれども、錫林郭爾から、もつと南下し熱河、察哈爾の北方にまで及んでゐたから柔然の逃げるところは朔平府地方でなければならぬ。

突厥も匈奴の別種である。切めは甚だ微弱であつて、曾て柔然の鐵工をしてゐたことがあるといふ。併し此に至つては最早北蒙の一部酋ではない。古匈奴の舊勢を復び得て遂に可汗を稱することになつたのである。隋の時に至つては薛延陀漸く強盛に赴き、次第にその部を南下し、近く、塞下に迫つて來た。是に於て隋の煬帝は十五萬丁を朔方以東に發して邊城數十を築かしめた。薛延陀も亦匈奴種である。族類甚だ多く、僕骨、同羅、契苾等の部と共に鐵勒諸部と稱せられ、初は東西突厥に分屬してゐたが、後突厥の苛虐なるに憤激して別に可汗を立て、遂に突厥を破つてしまつた者である。伊吾、高昌、焉耆等の西域諸國も皆之に附いて來たといふ。しかしこれくらゐの勢では、とても煬帝に敵すべくもない、仍て彼等は契丹と

は相互に攻擊してゐたけれども、突厥と共に隋室には服從の態度を取つてゐたのである。而て察哈爾は隋代に於ては涿郡、雁門、馬邑の北境であつた。煬帝が再度の遼東攻略に失敗して群雄四方に割據せるときに當つては、突厥が馬邑の校尉劉武周を立てて定陽可汗となし、馬邑の太守を殺し、更に樓煩(雁門關の北)定襄等の諸郡を下し、金城(甘肅皐蘭縣の西北)の方面まで攻略したことがあるけれども、中原に南下するまでには至らず、唐の太祖が天下を一統してからも、依然北境にあつて、僅に漢地侵害を以て滿足するだけの野望しか持ち得なかつた。太祖も亦唯之が防備を爲すだけの餘裕があつたばかりであつた。

## 第十　唐代より五代に至る

しかるに太宗の貞觀三年に至り突厥の頡利可汗、突利可汗と、兵十餘萬騎を合せて入寇した。その時唐はすでに海內を統一し、外夷に、その雄略を用ゐんとしてゐる矢先だつたので、兩可汗は太宗の威勢に恐れ、渭水の附近まで南下したけれども盟を爲して退いてしまつた。後兩可汗互に勢力を爭ひ、又薛延陀、回紇等も離反し、且

つ人民飢ゑること甚だしく、牛馬の死する物も多かつたので、國勢大いに衰へた。この機に乘じた太宗は直ちに將軍李靖をして頡利を擊たしめ、之を陰山に破つて擒にしてしまつた。是時突利はすでに入朝をして唐の臣となつてゐたので、突利の故地を四分し、頡利の地は、之を六分して、左に定襄都督、右に雲中都督(大同)を置いて其衆を統べしめた。

始め突厥の始祖畢卒して、子の什鉢苾はまだ若かつたので、其弟の利弗設が處羅可汗となるを俟つて、什鉢苾を泥步設となし、東偏に居らしめ、幽州(順天)の北に置いたことがある。彼等は割合に唐の攻激を逃れ得る地位に居たので、勢力を增すことは出來なくとも、そのまゝ、其地方に留つてゐることが出來たのである。

將軍李靖が突厥を破つたとき、その降者を雲中(大同)に置いたといふのは泥步設の族ではあるまい。雲中に移された突厥三百帳の長たる阿史德氏は、西突厥なる利弗設の族であらう。此阿史德氏が高宗の時に至つて、温傳及び奉職の二部の離反に會ひ、阿史那泥熟匐なる者を立てて可汗とした。その衆が十萬もあつたといふ。雲中にある唐將之を攻めたが大敗してしまつた。そこで高宗は裴行儉を遣はし

て大兵を發して之を攻め、大いに其兵を擊破して泥熟匐を殺し、奉職を擒にした。之が永隆元年である。しかるに、行儉が軍を還すや温傳は再び、阿史那伏念を誘ふて共に入寇を企てて來た。依て行儉は再び兵を動かして、之を攻めたが、既にして伏念は自ら温傳を縛して降服を申し出たので、突厥の餘黨は皆平定されてしまつたのである。

高宗は又將軍高侃をして西突厥を擊ち、更に車鼻可汗を討伐せしめ、之を破つて狼山都督を鬱督軍山(杭愛山の北)に置いて、その遺衆を統べしめたといふ。その後將軍蘇定が又西突厥沙鉢羅可汗を擊つて之を下し、玆に突厥は全く唐の統治下になつたのである。

唐は則ち單于、瀚海の二都護、十都督、二十二州を置いて之を分轄せしめた。そのうち察哈爾は武(宣化)新(保安)嬀(懷來)慰の四州外境にあるものを東翼とし、雲中都督(大同)及び單于都護府(歸化城の南)の管下にあるを西翼としてゐた。此西翼察哈爾も唐時に於ては中國ではなかつたのである。しかし綏遠はすべて塞內であつたことは、西域を降伏させた唐の威勢からで察することが出來る。しかも遼東高麗に

も唐は大兵を動かしてゐる。察哈爾は卽ち、丁度其中間にあつて、依然蒙古人の土地であつたのだ。その證據に高宗の末年卽ち弘道元年に阿史那篤綠、阿史德元珍等が單于都護府を圍んで、司馬行師を執ねて之を殺したとある。單于都護府は後振武軍と稱した。之より先き、慕容氏に逐はれた契丹は、同族の庫莫奚(單に奚といふ)と共に松漠(熱河圍場縣及び內蒙古克什克騰地方)に遁れてゐたが魏齊、周隋の際漸く勢力を回復し、庫莫奚は西南に居り(承德、朝陽西府地方)契丹は東北(哲里穆、昭烏達兩盟地方)に居を占めてゐた。太宗の貞觀三年に至り、奚の可度なる者、內附して來たので、帝は饒樂都督を今の赤峰に置き、續いて內附した契丹には松漠都督を置き、各酋長を以て、その都督に任命した。就中可度は、饒樂都督となつて六州の諸軍事を督する外、樓煩縣公に封ぜられ姓李氏を賜ふたとある。可度の管內なる、阿會部を以て弱水州とし、處和部は都黎州、奧失部は洛壞州、度稽部は大魯州とし、元俟折部は渴野州と爲し、各、首領辱紇主を以て刺史とした。此等が饒樂府に隸したものであることは勿論である。又東夷郡都護府(安東都護府)を營州(錦州の北、柳城)に置き、東夷校尉をして松漠、饒樂の地を統轄せしめた。

唐地理志によれば「突厥州の五府を定襄、雲中、桑乾、呼延堅と云ひ、統ぶるところの州は十有九ある。契丹府は松漠と云ひ。州凡そ十七あり」。倶に宣郡の塞上ではあるまい。

契丹は、斯くして松漠の地に自由なる居住を爲すことを得た。それに營州よりは甚だ遠距離の地にある。從て東夷校尉の監督は充分に届き得なかつた。これ契丹の勢力をして次第に大ならしめた所以である。勢力を得た契丹は遂に兵を擧げた。それは中宗の光宅元年九月(則天武后の治)である。彼が南下の勢は割合に凄じく、一馳して營州に陷れ、冀州を陷れ、又瀛州(直隸河間)を攻め立てた。武后則ち狄仁傑を起して魏州(直隸大名府)の刺史と爲し之を防がしめた。又左威衞大將軍程務挺を以て大撫道大使に任じて北寇に備へることになつた。

しかるに默啜可干なる突厥の餘類が、契丹の營州を陷るや、其虚を衝いて、漠北なる契丹の故地を占領し、其妻子を擒にして去つた。之を聞いた武后は、兩外夷を相敵せしめて之を制しやうと思つて、直に默啜を立てて可干とし、且つ之に婚を許し、又豐、勝六州(オルドス及び歸化城の西部)の降戸數千張を與へた。しかし默啜は武后

の計畫通りにはならなかつた。オルドス及び其北部を與へられた彼には、北方に契丹の地を得るよりは漠南にその勢力を張る方が、どれほどよかつたか知れない。それが又彼の勢力を増大する所以でもあるのだ。果して默啜は強くなつた。強くなれば邊塞に入寇するのは恰んど既定の事實である。時に中宗は再び帝位に復してゐたので、朔方軍の總管張仁愿をして、默啜の突騎施が西方に進擊せる際に乘じ、襲ふて漠南(綏遠、朔方)の地を取り其衆萬餘張を收め之を河南(オルドス)の地に置て、三受降城を河北に築き烽侯千八百所を置いた。「默啜是より復敢て邊に近かず」とある。三受降城の內東受降城は歸化城の南、東勝の對岸、托克托の附近である。次の玄宗の時に至つては、郭虔瓘を朔州の大總管とし幷州(今の山西太原)に居らしめ涼州の大總管と共に默啜に備へしめた。しかるに默啜は、北方の拔曳固部(鐵勒部)を伐つて之を破り、勝を恃んで備をしてゐなかつたので拔曳固の散卒が、其不意に出て之を斬り唐に降つて來た。又突厥の毘伽なるものが西方に進出して涼州を掠め出したので、玄宗は宰相張說をして朔方の節度使を兼ねて、夏、鹽、麟、豐(歸綏縣、四子部落及び喀爾喀石翼)勝の六州(オルドス)定遠(陝西漢中府巴縣)豐安(歸綏)の二軍及

び三受降城を領せしめた。時に緣邊の兵六十萬、張說は自ら邊塞を巡視して殘胡を平げてしまつた。於是西方の鎭邊は全く成つたので、玄宗は專ら力を契丹及び奚に用ゐることとなつたのである。

契丹が東北部直隷に進出し、唐と對峙の勢を有つことになつてから、饒樂府(赤峰)なる奚は、西方に其居を移し、冷陘山に到り、嬀州(直隷懷來)の西北に接してゐた。そして唐が東西に兵を動かして攻防に從事してゐる際に次第に其勢力を增加して行つた。玄宗の時になつて、その先天元年六月幽州都督孫佺、左武衞將軍李楷洛、左威衞將軍周以悌等が奚酋李大輔を攻めんとして、冷陘山に到つて交戰し、敗績をまねいた事がある。孫佺は元來怯懦であつて、大軍を動かす樣な力量あるものではなかつた。それが將軍烏可利の諫言には耳を借さずに周以悌、李階洛の兵二萬八千騎を發し、軍を三分して奚攻伐に向つたのである。佺は先づ楷洛をして四千騎を率ゐて前驅せしめた。それが奚騎八千に遭遇し、之と戰つて旗色が甚だ振はなかつたにも拘らず佺は敢て救援しやうとしない。のみならず兵を引いて還らうとした。奚騎は之に乘じて尾襲したから唐兵は大いに敗れ、佺も仕方なく山を阻ん

で方陣を作り防備の形を取ることにした。奚酋李大輔仍ち使をして「朝廷がすでに吾と和親してゐるのに、今此大軍は何の爲に來たのか」を問はしめた。佺は自分は勅を奉じて招撫の爲に來たばかりであるが楷洛が命を聽かずに戰を挑んだのである。此は皆楷洛の罪であるから彼を斬つて謝しやう」と答へ悉く軍中の帛及び袍帶を斂めて大輔に與へた。そこで大輔も、今將軍が南に還るそうだから靜肅を守る樣に、兵を諭したけれども、唐の將士は懼れて又隊伍を作らず、人心が定まらなかつた。そこを大輔の兵が追擊したからたまらない、唐軍は散々に潰れ、佺と以悌は擒にせられて後殺され、楷洛と可利だけが漸く脫歸することが出來た。

しかるに後數年を經て、開元四年八月契丹の李失活が奚の李大輔と共に、所部を率ゐて來降して來た。そこで玄帝は失活を以て松漠軍王と爲し都督を兼ねしめ、且つ彼が八部落の酋長だつたので之を刺史に任命した。又將軍薛泰を以て、軍鎭を監督せしめて之を撫し、大輔は饒樂都督兼饒樂郡王に命じた。翌開元五年十一月に契丹の李失活が入朝した。且つ唐は東平王の外孫楊氏をして永樂公主となし之に妻女を送つたりした。

その後契丹の牙官に可突干なるものあり、驍勇にして衆心を得、次第に勢力を得て來たので契丹王李娑固は之を猜み且つ畏れて、突干を去らしめ樣とした。そこで可突干は直ちに兵を擧げて娑固を襲擊した。娑固は之に敵せずして營州に敗奔した。仍で營州の都督使都護薛泰は奚王李大輔と共に娑固を奉じて可突干を討った。しかし戰は敗れ、娑固、大輔は皆殺され、薛泰も又生擒にされてしまつた。突干仍ち、娑固の從父弟鬱干を立てて契丹主と爲し、使をして唐朝に謝罪を請ふて來た。玄宗之を許し、一切可突干の罪は咎はずに、鬱干を以て松漠都督となし、李大輔の弟魯蘇を饒樂都督に任命した。そして開元十年には餘姚縣主(江南)の女慕容氏を燕郡公主として、契丹鬱干に嫁せしめた。開元十四年更に契丹松漠王李邵固を廣代王とし、奚の饒樂王李魯蘇を奉誠公に封じ、又玄帝はその從甥陳氏を東華公主として邵固に嫁せしめ成安公主の女、韋氏は東光公主として魯蘇の妻とした。前に李娑固を殺した可突干はその後も松漠の廷にあつて、國政を專にして人心を得てゐたが、開元十八年の初頭、廣代王の使として入貢した際に、同平章事李元紘が彼を禮遇しなかつたので、歸來、彼の叛心は漸く强く、遂に同年五月、其主邵固を殺し、

國人を率ゐて四方を脅し、突厥を下したので、其勢當るべからず、奚王李魯蘇及び其妻韋氏、邵固の妻陳氏等は、皆塞内に逃遁してしまつた。

翌開元十九年三月、信安王禕が裴耀卿及び幽州(順天)の節度趙含章を率ゐて、道を分けて契丹討伐に向つた。是時平盧(今の直隷津海道盧龍縣、永平府郭首縣)の先鋒將に烏承玼なるものあり「しばらく兵を按じて敵の情勢を偵つてからにしやう」と提議したけれども、含章が反對したので、遂に白山に於て敵と交戰することになつた。戰は果して敗績した。於是承玼は別に兵を引いて、契丹の兵を撃つて之に勝ち、禕等も亦、その後大いに奚契丹を撃破して、俘斬すること甚だ多かつた。此に白山といふのは後漢の時烏桓の居たところで五原關外の大荒中にあるものである。開元二十三年李過折を以て北平王松漠州都督に任命した。初め幽州の節度使張守珪が部下に安祿山といふものあり、本と營州の雜胡の一人であつたが驍勇にして膽力あり、曾て奚契丹の討伐に敗績したとき、守珪が之を殺さうとした。祿山大呼して曰く「奚契丹を滅そうとするならば、どうして祿山を殺すのか」と。彼も一種の英雄であつた。守珪も殺しかねて祿山を京師に送つた。玄宗は卽ち彼の才を惜ん

で許し營州の都督とし更に天寶元年、遂に安祿山を平盧の節度使に任命し又范陽節度使をも兼ねしめた。是の時に當り、唐の羈縻州(外夷の地にして唐の統治下にあるもの)八百五十六、十節度經略使を置いて邊に備へた。そのうち河東節度使は朔方と相椅角して突厥を防ぎ太原に治し、范陽節度は奚、契丹を控制して幽州に治し、而て平盧は其東を制してゐたのである。北、西、南三面の鎭兵を合すれば實に四十九萬、馬八萬餘匹なりといふに至つては、盛なりと云はざるを得ない。しかし兵を增すこと益々多くして、天下益々苦しみ出したことは致し方がない。既にして安祿山は奚、契丹を討つて之を破り、其降者八千餘人を養つて、曳落河とした。曳落河とは壯士の事である。皆驍勇にしてよく戰ひ一以て百に當ることが出來たといふ。天寶十年には遂に祿山は河東の節度使をも兼ねることになつた。會々突厥の降將阿布思が回紇(漠北に居す)の爲に破れたので、祿山は其遺衆を誘ふて降らしめた。是に於て祿山は三鎭を兼領し、士馬も亦强精であつて、天下に彼と比肩し得るものがなかつた。而て天寶十四年には奏して部下の蕃將を以て漢將に代へたのが三十二人、祿山自身がすでに胡人であるのに、部下の將も亦胡人であるから

地は胡國ではないけれども、殆んど胡國と變りはない。

祿山は遂に反した。奚契丹の各公主を殺して反旗を翻した。所部の兵及び契丹、奚の兵を合すれば十五萬はあつたといふ。楊貴妃に溺れてゐる玄宗は、とても彼に敵すべくもない、平原(山東濟南)の太守顏眞卿、常山(直隸正定)の太守顏杲卿相繼いで義軍を起したが成らず、海內糜爛し、玄宗は蜀に逃れてしまつた。子の肅宗、回紇及び西域の兵を藉りて僅に疆土を回復し、甘肅の靈武に卽位することが出來た。

しかし祿山は滅んでも賊徒は滅びず、節度使は悉く中原の交戰に寧日もなかつたので、邊備がおろそかになり、從て外蕃の入寇を見ることになつたのである。

其後、唐は、叛亂に繼ぐに藩鎭の跋扈あり、國內平安の日を見出すことが出來なかつたが、玄宗から四傳して憲宗の時に至り、帝が英毅の才を以て漸く彼等を制し、國威漸く回復して來た。時に劉濟幽州にあり、奚が屢々邊を侵すのを見て憤慨し、元和年間、兵を動かして、之を擊走せしめ尙一千餘里の遠きまで敵を追窮して靑都山に至り、斬首すること實に二萬級であつたといふ。これ皇室の威勢よりもむしろ藩鎭の勢力を語る者であらう。その後も宦官及び朋黨の横暴に苦しんでゐたけれ

ども宣宗の大中年間、幽州の節度使張仲武が奚北部及び山奚を破つて、莫大の雜畜を俘獲したことがある程である。然るに契丹は、中原の亂鬪に加はらず、しかも日々に其大を增して行つた。奚王突董蘇、次第に契丹の壓迫を感じ、懿宗の咸通九年其臣薩葛をして入朝せしめ、暗に唐の威勢を藉りやうとしたが、契丹は益々盛になるに反し唐朝は內亂に加ふに水旱の續發を以てし、益々衰微に赴いてゐたので、奚王も遂に契丹と對抗の勢を持することが出來なくなり、部を擧げて之に服屬してしまつた。虜奚の酋長去諸之を怨み別部を引いて唐に內附し、嬀州の北山を保つことになつた。之を西奚と云ふ。而て契丹は奚の東北に居を占めて居た。唐の內亂は次第に其激しさを增し北方にも蔚州(直隸口北道)の兵馬使李克用、代、雲二州を取つて晉陽にせまつて來た。また契丹も勢に乘つて幽薊(順天)に入寇して來た劉仁恭仍ち、摘星山を踰ゑて之を討ち、胡地の牧草を燒き拂つて苦しめたので、牧馬の死するものが少なくなかつた。契丹、卽ち盟を乞ひ、良馬を獻じ、劉仁恭に牧地を求めて來たので之を許した。時に僖宗の末年卽ち光啓年間である。劉仁恭は盧龍(平盧)の節度使であつて、李克用と共に北方の重鎭であつたのだ。間もなく天祐

三年契丹の兵は再び劉仁恭を擊ち軍を還して山北の奚を襲ふて之を破つた。そして天祐四年には梁王朱全忠が唐朝を亡ぼしてしまつたのである。

朱全忠、唐を簒して洛陽に都して帝を稱した。之れが梁の太祖である。しかし海内の統一はほんの形式ばかりで、群雄は四方に割據して虎視耽々たる有樣であつた。そのうち北邊に雄を走せたのが李克用の晉と劉仁恭の燕である。前者は元來西突厥の別部の出であつて沙陀(甘肅鹽池縣の北)の人である。彼の祖父たる沙陀部の酋長朱邪は唐の憲宗の時、内附してゐたが、子の赤心が龐勛の亂(懿宗の時)を討つて功があつたので大同の節度に任じ、名を李國昌と賜り。尋で振武の節度使に任ぜられた。克用は卽ち國昌の子である。彼は一度中原に侵入しやうとしたが成らず父と共に韃靼に逃れた事があつたが僖宗は黃巢の亂に苦しみ、彼の力を借りやうとして克用の罪を許した。克用大いに喜んで沙陀の兵を率ゐて來り連戰敵を破つて長安を復し又之を蔡州から汴州に追擊して、黃巢を殺してしまつた。しかるに黃巢の降將に朱全忠なるものあり、時に宣武の節度使となつて汴にあつたが、克用を襲ふて之を殺さうとしたので克用は身を以て脫出して來たことがあ

る。朱全忠は梁の太祖となつた人であるが此の時から梁晉の敵視が始まつたのである。斯くして彼は河東の鎭守使に任ぜられ、又宦官の跋扈するを快からず思ひ河中(オルドス)の節度使王重榮輔けて長安に逼り、宦官を誅した。これより李克用の勢益々大となり、遂に爵を晉王に進められた。しかし近畿諸鎭の跋扈も亦益々甚だしく、恣に兵を用ゐて政權の簒奪を行ひ、昭宗の英邁を以ても如何ともすることが出來ず、遂に朱全忠の毒手に倒れてしまつた。是に於て梁は中原に頑張ることになつた譯である。而て各藩鎭は各王を稱して四方に割據してゐた。盧龍の節度使、劉仁恭も燕王を稱して獨立國の勢を有してゐた。劉仁恭はもと李克用の軍將であつて昭宗の乾寧二年盧龍の節度使となつても尙克用に屬してゐたが後燕によつて獨立した者である。

梁帝卽位以前より晉との交爭は絕わず、再度晉陽は包圍されたことがあつたが、帝位に卽くや直ちに其官爵を削奪し、康懷貞等をして潞州を攻め晉將李嗣昭を上黨(潞州府)に圍ましめた。時に李克用死して子の存勗が立つてゐたが、諸將と相謀り急に潞州を救つて大に梁軍を敗つた。是に於て北方の諸鎭は存勗を推して盟主

とした。是より存勗の勢は益々強く再び梁軍を破り、遂に兵を將ゐて劉仁恭の子守光を伐ち、梁の援兵をも敗つて守光を生擒にした。しかも彼は北寇の憂を除かんとして、奚王去諸の子掃剌に李紹威の名を贈り且つ契丹の遂不魯なる者の姉を娶つて自らの妻とした。外夷の孫とは云ひながら仲々思ひ切つた懷柔策である。しかるに、遂不魯は契丹主と隙をはさみ出奔した。それを紹威が納れたので契丹は怒つて之を攻めたけれども克たなかつた。時に北方は今の外長城を界として悉く彼等の地であつたのだ。是に於て存勗兵を集めて梁と交戰し遂に大梁(開封)に入つて梁國を亡ぼしてしまつた。梁は建國以來十七年である。後唐の莊宗とは彼の事である。しかし中原に入つてからの莊宗は甚だ振はず遂に內亂の爲に死、次の明帝(克用の養子)又在位八年にして死し、その間も海內に姑息の平和を樂しむに過ぎなかつた。次の閔帝に至つては河東の節度使石敬塘と善らず遂に彼を晉陽に圍むに至つたが、下すことが出來ず、石敬塘又契丹の援兵を得て大いに唐兵を破り遂に帝位を稱することとなつた。彼を晉の高祖といふ。唐は凡そ四百十四年にして亡びたのである。

五代と云へば尙二箇國が殘つてゐるわけだが、察哈爾史としては、むしろ北方に雄を稱し出した契丹卽ち遼國の歴史に就いて、その事蹟を看察するを妥當と信ずる。そして又外境の變異からばかり見て來た察哈爾上古史も後唐の滅亡を以て終りとしたい。そして純粹の蒙古人が純粹の蒙古の土地に中原を睥睨した輝かしい事蹟を以て察哈爾中世史の筆を起すのを誇りとするものである。

遮莫、後唐以前の察哈爾は、中原のめまぐるしさに比ぶれば實に安閑たるものであつた。後から、あとからと戰鬪もなしに入り來る胡夷、蕃客を迎ひては、彼等の搖籠たるに甘んじてゐた。しかも彼等が成長すれば直ちに中原に向ひ、察哈爾は敝履の如く棄てられるのである。棄てられるが故に察哈爾は安閑であつた。その安閑さが英雄を生み、俊豪を育てたのではあるまいか。胡戎にとつては中國は魔性の國である。やがて黃河の積泥にみじめにうづまる運命と知りつつも、盲目となつて幾多の雄豪は察哈爾の高臺から駈け下りた。驅け下りるには加速度がつく。容易に途中では止まらない。安閑なる察哈爾よ。中原に奔馳した汝の子等が暖い汝の懷を思ひ出さぬとは誰が言ひ得やう。安心するが宜い。おまへには偉大

なる天分がある。

者代々系統は何等論議を要してゐるわけだが政治傾向としてはむしろ北方に移変相も出し古来学者も議論の歴史に於いて、その事蹟を詳らかにする資料を得ざるをそも又外様の変異からはかり見て来た時期上古史も後期の滅亡を以て終をさしむや。そもそも純粋の要害人が純粋の意志の土地に中原を開拓した結果かも知れ事蹟を以て系統的中興史の事を成すのを語りをするものである。

殷末殷墟以前の殷帝時代は、中原のめまぐるしさに比ぶれば実に安閑たるものであられ。殷末からあまからず戦闘もなしに入り来る周族諸部を遂ひ立て彼等の故郷たるに甘んじてゐたが、しかも彼等が支配すれば直ちに中原に向ひ祭祀信仰は殷墟の如く継てられるのであるが、周て見られるが故に殷帝諸は安閑であつたが、その安閑さが英雄を生み偉業を育てたのではあるまいか。周公において中原は殷墟の調であある。やがて資料の祖型にふじめにうつまな運命と知りつつ、も支配目をなやて数多の暴虐は殷帝周の高位から強け下がなる、暴は甚しくもには殷殷後顧の殷帝に熱中ではまらない。支配なる殷帝統一も、小民に至いしは彼の子孫の殷おそろ又後悔の調べを以ては殷帝すら周やる。殷のするを止まる。むしろには殷よ

# 第二章　中古史

## 第一節　遼國と察哈爾

### 第一　遼の立國

慕容氏に追はれた鮮卑が松漠の間に竄逃し、唐代になつてから漸々勢を回復し松漠都督の位置と權勢とを維持してゐたことは前節に述べて置いた。唐の滅亡後は國內の擾亂に、邊塞の防備がおろそかになつて來たので塞外の人民は自由に地を侵し、人民を衆めて、悉く獨立國の形勢となつてしまつた。晉、燕の諸國が北方に雄を稱してゐたと云ふても、中原の鹿を逐ふに全力を盡さねばならぬ樣な僅かの威勢しか持つてゐなかつたので、先づ外夷と妥協して、之が侵入を除くことが出來れば宜い方であつた。たとひ全力を外夷討攻に盡すことが出來たとしても、之を服從させる事が出來たかどうかは甚だ疑問である。中にも我が察哈爾の地は天然の形勝に加ふるに强剛なる契丹の據るところとなつて、晉及び燕に對しては嚴

然たる敵國を形造つてゐたのである。此中國の亂世をよそにして、松漠の荒凉にその產聲を擧げたのが遼の太祖安巴堅(阿保機)である。時はまだ唐の咸通十三年で、奚の一酋去諸が、西奚を率ゐて僞州の北に獨立してから間もなくであつた。彼が生れたときにも、東洋式英雄が生れるときに生ずる奇蹟が、現はれたさうである。しかも身體からは神光、異香を放つたといふが、旣に長ずるに及んで身長九尺、力は三百斤の弓を引くことが出來たことを證明する、一前驅に過ぎまい。彼の生地は松漠の德呼部轄堵哩であるといふが今確實な場所を指すことは出來ない。只彼の最初に侵出した地方が西方であるので多倫の北方錫林河附近であることを推定するだけである。又轄堵哩にも錫林(石烈)といふ土地が彼の生地だつたと書いてある。彼が成長した頃は契丹の勢は日々に强くなつてゐて、東、西の奚は、其壓迫に苦しんでゐたのである。今、阿保機の事蹟と察哈爾との干係を綴らうとして再び唐の末代に遡らねばならぬのを、ことわらねばならぬ。そして、それが必ずしも重複するものでないことは、上古史に於ては、すべてが客觀であつたのに、中古史に至つて主觀的であるが爲である。たとひ重復したとしても其間に幾分の差異あ

ることは疑がない。その差異が反つて多くの興味を呼ぶものと僕は思つてゐる。始め阿保機は徳哷部(迭剌)の撻馬絨沙里(扈從官)となつてゐたが、數度の戰鬪に功を立てて名聲揚り、國人は彼を阿主沙里と稱してゐた。則ち彼は計略を用ゐて室韋部を降し、克裕爾庫及び烏爾古を攻め、奚を討つて常に勝たないことはなかつたのである。元來契丹には八部の部長があり、毎に其の中の一人を推して王と爲し、其旗鼓を掌しめて諸部に令し、三年を期間として交代することになつてゐた。唐の昭宗の天復元年に選ばれたのが哈陶津汗である。その下に阿保機は本部の額爾奇木(執政)となつたのである。しかも彼は專ら征討に從事し、連りに室韋、于厥及び奚の師錫爾格等を破つて其土地及び人民を獲得し、勢に乘じて、翌年秋七月、四十萬の大兵を發して河東に進出した。河東と云ふても今の山西代州以北である。次の天復三年の春には東に女直部を下し、冬十月軍を還して幽州の北なる奚部を略して、彼等の地を沒收し、その俘獲七千戸は悉く之を饒樂河(遼水)の畔に徙してしまつた。是れより次第に南下の兵を發し、或は燕北に劉仁恭と戰ひ、或は河東に李克用と盟を結んで大いに威勢を擧げた。その間にも東征の軍は休まず、內蒙古は殆

ざ契丹の席巻するところとなつたのである。斯く契丹の勢が中國の弱勢を以ては到底對抗することが出來なくなつた矢先に契丹王哈陶汗が死んでしまつた。時は昭宣帝の天祐四年である。阿保機是に於てか選ばれて翌年春正月契丹王の禪を受けたのである。しかも契丹が今日の如き隆勢を得たのは一に阿保機の勇鬪に待つ所が多かつたので、彼の威勢のみ益々高く在位三年なるも敢て交代せず、諸部大人の強制に止むなく、一部を引いて古漢城(獨石口外上都河の上流)に居りはしたものの城を築いて大いに對抗の氣勢を示した。其勢たるや契丹王たるといささかの差異もなかつたのである。しかも彼は諸部の大人を誘ふて來會せしめ悉く之を殺してしまつた。最早や彼の契丹王たるには何人も異論はない。斯かる間にも彼の野心は常に實行と伴ひ強盛なる部下は彼が命のままに、或は黑車子、室韋(共に契丹の別種にして今の北滿洲に據れり)を破り、或は幽州を侵し、梁と和して晉地を威嚇し、彼が卽位の年冬十月自らは天皇帝と云ひ皇后蕭氏は之を地皇后と稱し、又蕭實喇を北宰相に、南宰相は耶律烏魯斯を擧用した。最早や彼は北蒙の強たるのみではない。彼と和親せざるものは、中原に於てさへ、その壓力を感

せざるを得なかつたのである。太祖の二年李克用が死んだ際の如きは使を遣して彼の死を弔ふた程だから晉も相當契丹懷柔に腐心しなければならなかつたのである。夏五月に至つては皇弟撒剌に命じて烏丸、黑車子、室韋を討たしめて、東北に領を廣め、しかも益々其手を擴げて行つたので、中原の各國が蝸牛角上の爭を爲すに比すれば領土的野心を滿足せしむるには殆んど理想に近い位置に居たのである。故を以て梁の如きは、再び遠く郎公を派遣して來聘したとさへ云はれてゐる。三年には羊城を炭山の北(興和城附近)に置いて市易を通じたといふ餘裕さへも持つことが出來たのである。太祖の四年秋七月皇后蕭氏の兄、達魯北府宰相となり、冬十月には烏滿山に、奚庫濟等の叛亂を平定し、翌年春正月遂に西部奚親征の軍を起して、獨石、龍門の險を突破し、又兵を分けて東部奚を征服してしまつた。奚王府の六部(約囉、伯特、敖拉、瑪展、綽囉、托輝)は斯くして契丹の地となつたのである。是に於て契丹の地は、東すでに海に際し、南は白檀(密雲縣)に及び燕の劉守光と對し、西は松漠を踰ゑて潢水(遼水の上流)に至つてゐた。三月には彼は親ら灤河(上都河)に進出し、南下して薊州(今の薊州)の地を略し戰勝の碑を刻して、大いに氣勢を擧げ

た。夏五月皇弟墀克の謀反を赦して誅せず反つて彼を迭刺部の額爾奇木となし六年春二月親しく劉守光を幽州に攻め、更に北方に軍を還して珠巴克を擊つて之を下す等、一定の計略こそなかつたが、彼が馬首の向くところ、縱橫の馳駈をほしいまゝにすることが出來たのである。この奔馬は尙ほも止らない。皇太子が五年秋九月迭刺部の夷離菫汗里軫等を率ゐて雲內(烏剌特旗)の地を略し、冬十月晉の天德軍(歸化城)節度使宋瑤が一度降りて再度謀反を企てたるを攻めて其城を拔き、搖を擒にし、其民は陰山の南に居住せしめたことがあるので七年の春正月には太祖自ら西方に馬首を向け、その進む處、賓に甘肅(赤水城)にまで及んだといふ。しかるに遼東に進出した皇弟墀克が諸弟を率ゐて叛を謀つた。しかもそれは一度ではなかつたのである。或るときは太祖の軍を還すを待つて伏兵を以て之を擊ち、又或るときは行官を襲ふて其不意に出たりした。しかしそれは常に失敗に歸し、太祖の宏量は幾度か之を許したが七年の夏四月遂に彼等を昭圖に於て誅してしまつた。更に九年の春正月烏爾古部の叛を平定してよりは太祖も一種の落ちつきを見出したのであらう。二月遂に龍化州(翁牛特部)に於て遼國の天皇帝た

るを宣し、年號を神册と改めた。時は梁の末帝の貞明二年である。名將赫嚕は總軍國事を拜し、子貝を立てて皇太子とし遼國の基礎は是に於て定つた。

斯くして再び遼兵の進擊は開始された。先づ同年秋七月突厥親征の軍を起して、西北路を襲ひ、諸部を悉く平げて其酋長を擒にし、部衆一萬六百戶及び鎧伏牲畜を收めて歸還し、其途次晉の朔州を拔いて節度使李嗣本を擒にし、冬十月更に蔚、新、武、僞、儒(延慶)、五州を攻めて口北道を略し、再び西して河曲(山西雁門道、河曲縣)に至り、更に陰山を踰ゑて、盡く其地を收め武州を改めて歸化州と爲し、雄武軍を置き、僞州を可干州となし、西南招討使を置いて、功ある者を選んで之を領せしめた。十二月、李存勗が新州(保安州)に置いた威塞八軍を收め、之を奉聖州武定軍と改めた。吾が東翼察哈爾は卽ち奉聖、歸化二州の地である。北境は乙室部、訛僕括部、與撒里葛三部に接し、乙室部大王及び都監は西南の境に鎮駐してゐた。大王とは兵馬の政を掌る者で始めは夷離菫と云ふてゐた。而て鴛鴦泊(興和城の北二十支里ばかり)には司徒あり、闍撒狘は車軸山に居つた。訛僕括部と與撒里葛とは望雲縣(赤城縣)の東に同居してゐた。望雲縣は奉聖州に隸してその北境にある。

神冊二年の春二月晉新州の裨將盧文進が晉に叛いて節度使李存矩を殺して來降したので共に進んで其城を攻め之を陷れ、文進の部將劉殷を以て刺史とした。其勢を以て遂に幽州に侵入し、晉の節度使周德威と新州の東に於て合戰し大いに之を破り、斬首三萬餘級を獲たとある。夏六月再び幽州を圍んだが大暑と霖雨の連續に閉口し赫嚕を留めて盧國用に當らしめた。しかし間もなく、晉王李存勗が李嗣源を遣して救援するのに會つたので軍を還してしまつた。この時には大敗して還つたのである。

幽州に志を得なかつた彼は翌三年春正月皇弟安圖を以て雲州及び西南諸部を討たしめた。しかも自分は松漠に歸つて臨潢府(巴林の東北)に城し、之を都とした。上京路は卽ち之れである。尙契丹大字を制定せしめて之を頒行したことなどは注意すべき事である。翌六年夏五月には法律を定め正爵を置きて階級を示し、又長吏に命じて民の利病を詢ねしむる等種々內政にも意を用ゐる餘裕を示し出した。從て蒙古族の常習たる「遊牧は少くも其主腦者に於て形を變へ國家的不動の形を示し出したことが想像出來る。然しながら其年の冬十月晉の新州の防制御

使王郁が所部の山北兵馬を以て內附して來たといふ記事から見ると、口北道の如きも、奉聖、歸化二州を置いたといふけれども實際の政事は依然として支那人が行つてゐたのに違ひない。それを蒙古人の側から見れば征服されたる屬地であり。支那側から見れば依然たる支那の土地であつて、對蒙防禦と對蒙外交との第一線であつたのだ。從て、この時の戰場は口北道、雲內及び幽州の北部で、察哈爾は純然たる契丹の地であらねばならぬ。そして、それが又中國に進出する場合の根據地の位置である。此根據地を下り、太祖は內附者王郁の部兵をも率ゐて、六年の冬十月居庸關に入り、十一月古北口を下り、兵を分つて檀(密雲)順(順義)安遠、三河、良鄉、望都(保定府慶都縣)潞(通州)滿城(保定の西北四十里)遂城(除水縣)等の十餘城を馬蹄にかけて風の如く還つた。幽州の地は最早彼に抗し得る者がないのである。故に十二月には王郁衆を率ゐて、來朝し、忠順の意を示したとある。太祖も中國に相當の野心を抱いてゐたので郁を呼んで子となし、厚く彼を賞賚し、其衆を潢水(遼水)の南に卽ち克什克騰附近に徙し居らしめた。しかも太祖は直ちに郁を利用し太子と共に南下せしめ定州(望都の南)にまで進出した。於是、蒙漠の戰場は東、口北道より南し

て今の保定附近になつたのである。是より李存勗の軍と涿州、定州、望都、鎭州(正定)に戰を交へて互に勝敗あり、一たびは檀州に軍を還したが翌天贊元年には再び薊州を拔いて刺史を擒にし一駈して鎭州に晉軍と相對した。時に張文禮なるもの鎭州にあり、遼に内附してゐたので、彼の請求により軍を南下したのであつた。間もなく晉軍は敗れ、遼軍は之を石城縣まで追擊して將軍李嗣昭を殺した。六月には別部鷹軍を派して西南諸部を擊ち其捕獲物を貧民に與へて歸り、十一月皇次子耀庫濟に命じて大元帥となし薊北の地を略せしめた。是の年、戶口が甚だ多くなつて統轄に不便を感じ出したので迭刺部を分ちて二となし兩節度使を置いて之を統べしめることにしたのである。翌天贊二年は李存勗が梁を滅して後唐の莊帝を稱した年である。而て遼が後唐の南下と同時に、幽州の安次、潞、三河、漁陽、懷柔、密雲等の縣を安全に自己の手中に握り、益々晉の背後を壓してゐたのである。故を以て後唐は遼に叔父の禮を取つて事ふることを約したとさへある。而て天贊三年の秋九月、躢林に日輪を拜して、天神を祭つたりした。躢林は松林であつて今の開平の東北である。

斯くの如く、口北道から直隷にかけては盛に彼等が馬蹄のあとを發見し得るけれども、北山西の地にはあまり見出すことが出來ない。これ山西は後唐の故地でもあるし、河東の節度使は其手兵が仲々あなどり難いものがあつた爲である。僅に天德軍(歸化城)を攻略したばかりで河東の地に於ては遼、唐の和約は割合有效に實行されてゐた。しかし一方遼の勢は次第に加はるばかりなのに中原は依然たる亂世であつたから遼の壓迫は勢河東にも加はらざるを得ない。河東に加へられる壓迫は後唐に取つては最も恐るべきものである。何故なれば、河東は彼等の根據地であるからである。後唐が遼に叔父を以て事へた所以は卽ち之れである。遼は天贊五年、年號を天顯と改め、しきりに今の東三省を略して進み、尙、高麗にも其手を伸して之をして屬國たらしむる等、無人の境を行く如き威力を示したが、遂にその年の秋七月二十七日、龍化州扶餘、農安(長春附近)の行官に於て、太祖阿保機が崩殂してしまつた。帝の謚を神烈と云ひ、其陵は克什克騰旗の北なる木葉山にあると云ふ。

太祖の后、蕭氏は又まれに見る女丈夫で漢人韓延徽を引いて黑幕の謀主としたの

も彼女であるといひ、太祖の崩後は自ら大元帥と稱して、遠征の軍を還す樣な事はしなかつた。翌二年冬十一月、皇次子耀庫濟卽位、之を太宗と云ひ、年號はそのままである。この時分から、或る時は內附し、或るときは叛し、又或るときは救援を遼に求めたりした燕北の諸節度使の事に就ては、此すべてが遼の影響ばかりで斯の如き態度を取つたものでないことを知らねばならぬ。前章にも見る如く、彼等節度使の態度はむしろ、彼等自身の利害から打算して取られたものであるのだ。彼等には最早や自己の存立以外何等の原動力をも有しなかつた程、中國は亂麻の狀態であつた。しかし後唐はまだ節度使の如き弱勢ではなかつたので、自己の面目と威勢とを保つ爲にも、又節度使の抑制を容易ならしむる爲にも、遼と和を講ずるを以て得策としたことは云ふまでもない。故を以て、天顯三年冬十一月、太宗自ら兵を將ゐて、唐を侵さうとしたのを聞いて、直ちに使をして遼に來聘せしめたのである。しかし太宗とても此間の消息を知らぬではなかつたので、容易に兵を引かうとはしなかつた。「唐がしばしば使節を遣すのは只威を畏れるばかりにすることだから、輕擧して士氣を緩めてはいけない」

とはその時太宗の云ふた言葉である。かくして太宗は師を引きはしたが、高麗まで征服した今は、南下するより、其進出の途を見出し得ないことになつたので、都を上京(臨潢)から南京(幽州、順天府)に徙して此地を王居と定めた。四年秋九月南京に行き、冬十月、大いに六軍を閲兵して軍容を整へ、皇弟魯呼をして、雲州(大同)に赴き郡縣の未だ附せざる者を討伐せしめた。しかし幽州に於ける數度の交戰にその精騎名將の多くを失つたことは爭はれぬ。故に此行の如きも、支那側からすれば「契丹寇雲州」位に記錄されてるだけであまり成功は認められなかつたに相違ない。それでも翌五年の春正月には魯呼の軍が寰州(故城は山西の馬邑縣にあり)を拔いたとあるから、雁門道はやはり契丹の兵馬に荒されたのである。西翼察哈爾は豊州(歸化城)天德軍を攻めた時からすでに遼地であつた。

河東に對する壓迫が加はると同時に、唐の遣使來聘の度數も亦多くなつて行つたのは當然である。卽ち天顯六年の夏四月から同九年に至るまで八回も使節が派遣されてゐる。ことに八年の春正月魯呼が西方黨項(吐渾)を攻めて之に克つたりしたので、唐は切に遼に請ふて黨項を征することを罷めて貰ふたことがある。而て

九年秋、八月には太宗自ら南侵せんとして九月雲州に至り、河陰(雁門道山陰縣附近)を拔き、其以東の地(靈邱)を略し、十一月には武州の陽城(寧武の北、神池)を圍んで之を降し、明年に至つて悠々と引き上げて來た。かかる間に後唐にては莊宗はすでに死し、次の明帝も八年の冬十一月に殂し、閔帝が立ち、石敬塘の勢のみ隆々たる時代であつた。

天顯十一年秋七月唐の河東の節度使、石敬塘が閔帝の軍に包圍されて、すでに危と見ねたので契丹王、太宗に臣事を約して之が援兵を請ふて來た。太宗仍ち八月自ら將として敬塘を救ひ、九月大いに唐軍を擊破して進んで太原を拔いた。更に遼州潞州に唐軍を追ふて、冬十一月遂に石敬塘を大晉皇帝に封じ、迪離畢に命じ五千騎に將として敬塘を送つて入洛せしめ、自らは十二月師を還した。そして翌年の正月灤河(上都河)に至り皇子述待と共に功を太祖に告げ、太后に朝し、詔して諸部の士卒を休養せしめた。

天顯十三年は會同元年と改められた。そして約の如く、晉は趙瑩を遣して十六州(幽、薊、瀛、(河間)莫(保定の南)涿、檀、順、新、僞、儒、武、雲、應(大同の南、懷仁の南)寰、朔、蔚、)の地圖を以

て來り獻じ、且つ、歳に金帛二十萬を贈り、吉凶慶弔ある毎に使を遣すことを盟はしめた。

此時の遼の地は東は、實に海に至り、西は金山、流砂に及び北は臚朐河に至り、南は白溝(雄州の北)を以て晉に界してゐた、幅員實に萬里である。詔して皇都を以て上京府と爲し臨潢と稱し、幽州を升せて南京となし、元の南京(遼陽府)を東京と改め、尙新州を改めて奉聖州となし、武州を歸化州とした。而て大同府は卽ち西京府である。南北二院と乙室の額爾奇木は、この時、王號を稱するを許された。獨石口外東北一百里、上都河源に黑龍山といふのがある、此地は當に北安州(熱河)及び檀州(密雲)儒州(延慶)の界上である

今契丹の制度を見るに、北院は官帳、部族、屬國の政を掌り、南院は漢人、州縣、租賦、軍馬の事を掌り、國制を以て契丹を治め、漢制を以て漢人を治めることにした。兩院の下には樞密、宣徽等の諸院あり、皆南北に分れ、北院が上位である。北樞密は、兵機武銓、群牧の政を掌り、契丹の軍馬は皆之に屬してゐた。又北面軍官なる者あり、太子又は親王が軍を統べるときは天下兵馬大元帥と稱し、大臣が軍馬の政を統べると

きは大元帥と稱するのである。皆副元帥ありて、その大將が軍馬の政を統べるときは兵馬都元帥と稱し、副元帥府、同知元帥府等あつて之に屬し、其の下に大詳穩、都監、將軍、小將軍、軍校、隊師を置き、又護軍司、衞軍司、諸路兵馬統署司を置いた。その外に北面邊防官なるものがあり、而て上京路諸司は奚部を控制し、西南面招討使、西北面招討使は南京、西京等の各路專使と共に南西を制してゐた。又北面軍行官なるものあり、行樞密院、行軍都統署、行軍都押司、及び遠探軍行騎は之の所屬部である。北面屬國官は、其府を諸國、諸大部に置き、諸小部は諸使、諸司に隷してゐたのである。契丹は國民皆兵の制であつて凡そ、人民にして年十五以上、五十以下は悉く兵籍にある。その編制を見れば、一隊は五百人であつて、十隊が一道となるのである。道には主師があり、以て一面に當らしむるとある。又諸軍の兵馬最も精鋭なる者三萬人を選んで之を護駕軍と名付け、驍勇なる者三千人を撰んで先鋒軍となし、剽悍なる者百人を撰んで之を遠探欄子軍とした。五京の丁藉を合算すれば其數、百十萬七千三百、宮衞の兵及び屬國軍は此數内ではない。「風氣剛健にして弓馬に便習す」と云ふてゐる。

斯くの如くして北方の强遼は、徒らに美名のみを逐ふて功名を急ぐ、中原の諸侯のそれの如くならず、檜舞臺に花々しい活躍こそしなかつたが、名は常に實とともなつて一步は一步と、隊伍を整へた、亂れざる姿で、悠々と、その威力を動かすことが出來た。從つて察哈爾の地は依然たる安閑の狀態を持續することが出來たことを想像し得られるだらう。各人の强要してしかも獲られざる平和を、吾察哈爾は自然に體驗してゐる。「安心するが宜い汝には偉大なる天分がある」と又云ひたくなる。會同二年秋閏七月の出來事として乙室大王の賦調が面白くなかつた事を記してあるのを見ても其の平和さの一端を窺ふことが出來る。しかも彼を罪することなしに只譴責のみを以て許したさある。又冬十月には上烏古部が水草肥美なるを以て、北南院に詔して三石烈戶を移して之に居住せしめた。而て南王府の如きは群臣の中、人民が愛する者を撰んで其の二刺史とした。此の事實はすべて察哈爾自身の事ではない。多く邊境に近い部分の事である。邊境に近い所でさへ以上の如き平和の狀態を見ることが出來るとすれば王畿たる、察哈爾は平和の施設を見るべくあまりに平和であつたと云ひ得る。內政に心を用ゐる場所の中に察

哈爾が入らなかつたことが反つてその平和を裏書するものだ。三年の春三月には水門(?)に出獵した、その悠閑さを以て、途上、不謹愼者を誡しめて歩いた。その時に白鹿を獲たといふ。白鹿は平和の象徴である。翌月には幽州に出御して內政を閲し、駕を拱宸門に入れて元和殿に御し諸臣を引見した。其駕は間もあらず、南京を發して六月の癸丑奉聖州(保安)に次して、軍士を勞ひ、秋に入つて察哈爾に入り、皇太后に朝覲した。又其年の冬十一月有司に詔して民に播種紡績を敎へ、且つ相續法を定めたりした。翌四年の春には乙室、品卑、突軌三部の鰥、寡(男女やもめ)を調査し、自活することの出來ない者は、政府から、之に生活料を支給せしめ、尚始祖希善汗の事跡を編集せしめた。又西京道、歸化州、雄武軍には炭山あり、一に陘頭とも云ひ涼殿を此處に設け、此東北三十里には又新涼殿ありと云ひ共に承天皇后の納涼したところだと云ふ、新涼殿は今の興和城で涼殿は萬全縣にある。しかし此年の夏六月に入つてから振武軍(朔州)の將趙崇なる者が其節度使耶律華利を逐ふて朔州を以て晉に內附したことがある。太宗卽ち宣徽使尼古察に命じて彼を攻めしめ城は間もなく取返すことが出來たが尼古察は城下で戰死してしまつた。太宗怒つ

て城中の丁壯を誅したとある。南唐、呉越の二國が使をしてはるばる蠟丸書を奉らしめたのが卽ち此歳である。

## 第二　石晉の滅亡

之より先き石敬塘が後唐の大軍を破らんとして太宗に援兵を請ふた際に、以後晉は遼に臣事することを約したことがある。だから後晉の建設の成つた後は朝貢して之に臣事することを怠りはしなかつた。怠れば河東の强壓は事實となつて現はれるからである。しかし外夷に臣事することを快しとしない者があつたのは當然である。就中成德の節度使安重榮の如きは、或は契丹の使を執へ、又或は其叛民を納れたりして、大いに反抗の氣勢を示したが契丹の詰責に會ふて、晉帝大いに驚き、百方罪を謝し、重榮を殺して其首を契丹に送つた。又西方吐谷渾は晉の屬國の形であつたが、自己の國ではなかつたので晉の意志に反して遼に向つて不從順の態度を取る場合がしばしば見られた。會同五年春二月に於ても、遼は明王温に命じて吐谷渾を討たしめ、同時に使をして晉に吐谷渾の叛者を索騷することを

求めたとある。晉は卽ち齊州(濟南府)防禦使宋暉業、翰林祭酒使張言を遣して、遂に來り太宗の起居を問はしめた。兎に角、石敬塘は、自分を救けて中原に覇を稱するを得せしめた契丹王太宗を德としてか、在位中は忠順に太宗に臣事して纔に北方に事なきを得てゐたのである。しかるに敬塘は五年の夏六月遂に死んでしまつた。時に晉の侍衞馬步、都虞候に景延廣なるものあり、同平章事馮道と共に、國事多難を口實として、敬塘の意に反し、齊王重貴を立てて位に卽かしめた。之が出帝である。しかも延廣は定策の功によつて同平章事となり、政を行ふて、甚だ專恣であつた。遼が弔祭の使を派して慰禮として馬二十四及び羅絹を致し、皇太后も特使を遣はして慰問したのに對して、秋七月、晉は金吾衞大將軍梁吉及び判四方館事朱崇節を遣はして來謝せしめたが、其謝禮文に晉帝自らを臣と稱せずして孫と書いてあつた。遼卽ち客省使喬榮をして之を責めしめたに、彼延廣答曰く「先帝は聖朝が立てたのであるから臣と稱してゐたが今上は我國自ら册立したのだ。孫と稱したからと云ふて不足な理由はない。翁若し怒らば來り戰へ、孫には十萬の磨劍を横へて待つ者がある」。大膽と云へば大膽な宣言ではあるが、晉も建國以來十年

に埀んとして、幾分の自信を有つて來たことが屈辱に對する反抗心を誘起したのであらう。たとひ自信はなかつたとしても、此の種の反抗心は永久に現はれずに濟むものではない。しかし安閑な遼朝にとつては思ひ掛けない宣言であつたことは事實である。「於此帝始有南伐意」と見ゆる所以であらねばならぬ。天顯十二年以來僅に五星霜を經過しただけである。

右の如き大膽極まる宣言はしたものの晉に取つて最も恐るべきものは遼の來襲である。幾分自信はついたとしても、實力は遼に優り得るや否やは甚だ疑問であつた。むしろ此場合晉としては、勝利を得るといふ積極的のものではなくつて、遼勢を喰ひ止め得るかも知れない自信であつたと見る方が妥當であゑ。故に晉は其年、河東の節度使劉知遠をして叛臣烏爾古指揮使を逐うて燕京から北朝に朝せしめ、翌年春二月先帝の遺物を進上したりした。遼も亦夏五月使をして晉に行かしめ生辰の禮を致し、秋八月遼帝が奉聖州に幸した際に出帝は子延煦をして來朝した。しかるに十一月上京の留守、耶律迪輦が晉の諜者を捕へて其二心あるを探

知し得たので太宗は愈々南侵の心を定め、南京に至り侵略策を謀り趙延壽、趙延昭安圖、嘉哩等に命じ滄、恒(正定)易定の四州より道を分つて大軍を進めた。明けて七年の春正月延壽延昭の兩將は先鋒五萬騎を率ゐて任邱(河間の北七十里)に次し、安圖は雁門を越ゑて忻、代二州を圍み、延壽も亦進んで貝州(清河)を圍んだ。しかるに貝州の軍校、邵珂は南門を開いて遼兵を納れたので太守吳巒は井に投じて死んだ。延壽は更に元城(大名府城東)に進み、率ゐる所の部兵を南樂(大名府の南)に屯田せしめた。晉も張彥澤をして黎陽(大名府濬縣)に之を防がしめたが、其敵せざるを覺り遂に使を派して修好を求め、河北の諸州を割讓した。しかし、遼兵の進擊は止まず、翌月博州(柳城)刺史周儒を降したので、平盧(山東、青州)節度使楊光遠は密に軍を進め、又晉將景延廣も石斌に命じて麻家口(山東濮州の東北)を守らしめた。そして諸方の援兵が來るのを待つて水陸倶に進擊を開始した。晉帝も遼兵が次第に皇都大梁(開封)に近くので、自ら將として救援軍を率ゐて北行し共に遼兵を擊つて、大に之を破り三月遼兵が再度の來襲も物の美事に擊退して大いに氣を吐いた。この二戰に於て出帝は遼に對する反抗心が意外に成功したので、心が驕り出し、契丹恐る

るに足らずとして、遊興に日を送り、奢侈を事とし、小人を任用して政治を顧みなかつたので朝政は益々衰微に傾いて行つた。既にして契丹は再び南下を企圖し、その年の五月にはすでに德州を擊破し、七月には平盧の楊光遠が降服して臣を稱した。そこで晉も張暉を使者として表を奉り和を乞ふたが、遼は暉を拘留して歸さなかつた。八月に至り、鎭州の兵が遼軍を襲ふた事があるが戰敗してしまつた。太宗十一月諸道の兵を温楡河(北京の西)の北に閱し、十二月遂に恒州を圍んで其九縣を下した。更に翌年正月邢(順德府)洛(廣平府)磁(彰德府)を殺掠して殆んど鄴の都境まで攻めて行つた。これから河北の平原に於て數合の戰は戰はれ、互に戰敗あり、北面行營都招討使杜重威の任命を見てよりはやや勢を得て、北方に遼兵を追ふことが出來たが三月には陽城に於て再び破られた。既にして、晉將符彥卿と戰つて遼兵も遂に一敗地に塗れ太宗は一橐駝に乘じて南京に走り、九月赤山に至つた。赤山に於て帝は宴を開いて從臣を勞へ且つ彼等に軍國の要務を訊問した。その時「民を愛することが本である」との答に深く感銘したといふ。戰には敗れたが其綽々たる餘裕は此處にも見られる。

會同九年秋八月遂に晉親征の軍を起して、杜重威を滹沱河に降し、長驅して大梁に入り帝及び皇太后を捕へて本國へ護送した。晉は遼に助けられて中原に覇を稱し、今又遼の爲に亡びてしまつたのである。その間、僅に二世十二年である。大同元年(會同十年)春正月太宗正式に汴に入城し、晉王を降して負義侯と爲し、二月國號を大遼と改め改元を行ひ且つ鎭州を併せて中京とし、趙延壽を留守兼大丞相政事令に任命し、中外の官僚にも、それぞれ恩賞を與へた。

河東の節度使劉知遠が自立して帝を稱し漢を號したのが即ち此月である。はじめ劉知遠が遼に對する出宗の宣言を見て、必ず遼兵の來襲をする事を期待し、早くから備を怠らなかつたのが、晉、遼の戰は幸に直隷の平原に於てのみ戰はれたので、兵戰に煩はさるる事なく、其勢を持續することが出來たのである。今太宗が汴に入つて歸ることをしなかつたのを見て、直ちに自立を宣言したのは、當に然るべき事なのである。然るに太宗は大梁にあつて盛に胡騎を出して、防守に名を藉り四方を剽掠し始めた。仍ち東西兩畿から鄭、滑、曹濮二州に至るまで數百里間は財帛を絕ち、丁壯老弱の鋒刃に斃れ、溝壑に委する者、甚だ多かつたといふ。しかしこの

様な亂暴は所在に群盜の蜂起を結果し、國內大いに亂れたので太宗も「自分はまだ中國がこんなに治め難いものだとは知らなかつた」との一語を殘して、兵を引いて北方に歸つてしまつた。その歸途に於て太宗は遂に崩殂してしまつた。處は直隷の欒城であつて、時は大同元年夏四月である。

## 第三　世宗の治世

是に於て伯父と共に南伐に從事してゐた人皇王の長子、永康王烏雲は伯父の梓宮を奉じて鎭陽に歸つた。しかるに帝の崩殂があまりに不意であつたので、遺詔がなかつた。そして帝には一人の甥と二人の弟がある。此間に必ず爭の起ることを知つてゐる諸將は非常に憂懼して爲すところを知らなかつた。そこで南院大王耶律吼詣、北院大王耶律斡等議して曰く、「天位は一日も曠ふすることが出來ない。しかもし太后に善後策を問ふたならば必ず皇弟魯呼を立てよと云ふであらう。しかし彼の如き暴戾殘忍の性では到底人望を得ることが出來ぬ。此の場合永康王を立てるより外はない」と。斡も之に同意を表したが、魯呼次子人皇王も共に朝にあ

るので仲々決し難かつた。適々宿衞の將に安圖なるものあり、その父迪里は嘗て太祖の崩じたとき、太宗を立てることを諫言して、太后の爲に殺されたので烏雲(永康王)は安圖の幼いときから之を憐んで色々と世話してやつてゐた。安圖も大いに之を德としてゐたので召されて對應策を問はれたときに彼は「あなたは聰安、寛恕且つ人皇王の嫡男である。そして先帝も永康王に最も多く望をかけてゐた。斷乎として卽位召され。後悔は及びませぬ」と答へ自分は直ちに黑幕の活動を始めた。會々京師(上京)より來た者があつたので、安圖は詐つて魯呼が死亡したと彼をして軍中に報せしめた。それが幸にも成功して人々は皆之を信じたので彼は直ちに南北二大王の下に到り、永康王の卽位が理から云ふても、又人物から云ふても當然の事であることを力說し且つ魯呼の殘忍暴逆を數へて「若し魯呼にして位を嗣がば社稷を如何にせん」と呼號した。二大王も共に之を望んでゐたことなので、永康王の卽位に對する唯一の大障害である太后の激怒に反して決然たる態度を取ることを約束した。卽ち軍を整へて諸將を召し、策を定めて、永康王の卽位を行ひ世宗と號し、同時に宣言を發し、天位は一日も曠ふすることが出來ないこと、世

宗は人皇王嫡男であることを云ひ世宗の位に昇ることは實に天意に外ならぬ。天意に逆ふ者は軍法を以て嚴罰に處することを發表した。諸將欣然として命に從つたので世宗は太宗の柩前に於て卽位の大禮を擧げることが出來たのである。納まらないのは太后述律の胸である。最愛の魯呼、雲州に又渤海に猛虎の勇を奮ふた魯呼、その魯呼が、人皇王の長子とは云ひながら、未だ戰場に花々しい功を誇つたこともない若輩烏雲如きの幕下に馳驅する樣になつたことは、實に怪しからぬ。現在の地位から云ふても烏雲は只永康王であるに過ぎないのに魯呼は皇太子兼天下兵馬大元帥で且つ南征に際しては京師の留守である。魯呼自身の胸も太后と共に穩でなかつたことは察することが出來る。

魯呼は太祖の第三子である。少にして勇悍、怪力、性殘酷で、怒り易く、怒れば直ちに人を殺し或は之を水火の中に投じたといふ。太祖も嘗て之を奇とし「吾家の鐵兒」であると云ふた。或る日の事、天大いに寒かつたので太祖は三子に命じて薪を取りにやらせた。しかるに太宗は擇ばずして最も先なる者を取つて歸り次子人皇王(東單王)は其乾いた者を取つて束ねて歸り、魯呼は少きを取つて多きを棄て、旣に

歸つてからも袖手して立つてゐた。太祖曰く「長は巧で次は成、少は及ばず」と云ふた）

世宗は鎭陽に卽位して直ちに、北歸と定め、先づ定州に次し、天德、碩格、嘉哩等に命じ梓宮を護衞して、先に上京に赴かしめた。太后是に於て、愈々怒を表に發し魯呼に兵を率ゐて之を拒むことを命じた。斷るまでもない太后は魯呼と共に上京に居たのである。世宗は六月南京に至り五院額爾奇木守圖、詳袞、瑠格等が人を馳せて太后の兵を發して我行を拒むを報ずるを聞き、彼等の請にまかせて前鋒たらしめた。安圖等は泰德泉に至り魯呼の軍と會戰し、之を敗走せしめた。世宗はそこで兵を率ゐて北上し石橋まで進んで行つた。石橋は沙河の橋であつて、沙河は順義の附邊を流るゝ河である。此河の南は姚家州と云ひ北は宣化館と云ふてゐたさうである。此處に於て太后の軍將李彥韜の降り迎へるのを納れ、秋閏七月遂に潢河（遼水）にまで進んだ。太后も軍勢を整へて川を挾んで對軍した。しかるに對陣僅に數日にして太后の軍は鋒を收めて上京に歸つてしまつた。之れは耶律烏哲の諫言によるといふのが表面の理由で實は太后と魯呼との仲が惡くなつたの

だといふ。併し其の間の機徴を捕へて戰亂を未然に防いだのは烏哲の功でおらねばならぬ。斯くして世宗は上京に入ることが出來たが、魯呼が太后を謀つて世宗を廢さうとすることを告げる者があつたので、世宗は二人を祖州(巴林)に遷し、其出入を禁じてしまつた。

翌月には世宗の母蕭氏太后となり、南北院大王に崇德宮戶各五十を分賜し、土地財產の整理を行ふて在籍の明でないものは之を沒し、又北院樞密使を置いて安圖を以て之に任じ、九月には世宗を天授皇帝と稱し、年號を改めて天祿と名付け、更に安圖を東單國の主とし明王察克に封じて泰寧王となし、瑠格を特里袞とし、高勳を南院樞密使に任じた、此年詔して汴の駐兵を悉く引き上げてしまつた。漢主劉知遠が晉陽に入り帝を稱し更に進んで汴に至り、勞せずして中原に名のりを擧げたのはすでにその後の事である。翌天祿二年正月に、天德蕭翰、瑠格、瓌都等が謀反したが間もなく誅せられ、それぞれ罪の輕重に從て罰せられた。中原では漢主知遠が死し子の承祐が立つた。之を穩帝と云ふ。

夏四月には南唐がわざわざ李朗王祚を遣して賀表を呈した。しかしそれは表面

で實は共に漢を攻める事を議したのである。冬十月南京の留守、趙延壽卒し、中臺省右相德暐が之に代つて燕王に封ぜられた。翌三年正月再び蕭翰及公主額伯哩の謀反を誅殺して、內鬪悉く收まつたので、その年の秋九月諸臣を召して南侵を議し、翌月諸將をして兵を率ゐて南下せしめた。南下軍は一馳して貝州より冀州、南宮、堂陽(南宮の西南二十里)を略し、深州刺史を殺して俘獲甚だ衆し。明年十月再び南侵を企て、安平、內邱、東鹿等の諸城を荒して歸還した。是歲に太后は祖州の幽居に於て死んでしまつた。

此時に當り漢に於ては隱帝三叛「李守貞(河中)王景崇(鳳翔)趙思綰(長安)」の連兵を平定して意愈く驕り、讒を信じて遂に鄴都留守、天平節度使、郭威と隙をはさみ、敗戰して亂兵に殺せられた。郭威は穩帝の叔父にあたる河東の節度使劉崇の勢を恐れ、崇の子、武寧の鎮守使劉贇を迎立しやうとしたが、契丹の入寇を聞いて贇を殺し、自ら帝位に卽いてしまつた、是を周の大祖皇帝といふ。時は遼の天祿五年春正月である。郭威卽ち朱憲を遣はし遼廷に朝し、並に良馬を致して修好を求めて來た。遼の後援がなければ中原に覇を稱することの如何に困難であるかは、何人も既定の

事實として認めざるを得ない。同時に又遼の後援にして獲らるれば、容易に中原は得らるる者であるのだ。漢の生命は僅に二世四年である。周の建國が、直ちに劉崇の自立をうながしたことは、今更其理由をたづぬるまでもあるまい。劉崇の根據地は河東の太原である。險要の地ではあるが所領十二州(幷、汾、忻、代、嵐、憲、隆、蔚、沁、遼、麟、石)を以てしては、北漢を號するにいささか物足らぬ。物足らぬと知りつつ自立しなければならなかつたのが劉崇の運命であるのだ。しかし周と雖も中原に乘り出してから間がない。遼の向背如何によつては劉崇も恐るべき敵となるのだ。故に周は翌二月姚漢英、華昭允を遣はして親書を帶して修好を重ねしめた。しかるに夏六月劉崇は周の攻略に會つて遼に援兵を請ふて來た。世宗卽ち燕王德咵、及び樞密使高勳を遣はして、劉崇を大漢神武皇帝に冊封し又南唐にも乞にまかせて應援の兵を發したりした。此夏帝は百泉湖より百泉嶺に至り假署し、秋九月自ら將として南侵し途次歸化州詳古(上都河源炭山「黑龍山」の別峯)に於て、大いに宴を盛んにして天地を祭つた。その際群臣悉く醉ひつぶれてしまつたのに乘じて泰寧王察克の爲に弑せられた。帝時に年三十四、在位僅に五年である。帝

の墓を顯陵と云ひ、朝陽の南、松嶺の中にある。初め世宗は中華の風俗を慕ふて多く晉の家臣を用ゐ、契丹の諸將相を侮り、且つ酒色に荒んだ。この爲に國人は面白からず思ひ、しばしば叛旗を擧げたので兵を興して征討し尙、北漢や南唐の乞にまかせて應援の兵を派遣したりしたので周の怨を買つた。之れがやがて禍をまねく本となつたのである。それに察克が姦邪の者であることは烏哲もしばしば忠告したのだが帝は之を顧みず、是年の七月に太液谷に幸した際にも察克謀反の跡があつたのに三日間も留飯して、意に止めなかつたので詳古山に於て遂に殺されることになつたのである。

## 第四　遼の外寇と內憂

此變事を聞いた烏哲は早速に人を派して、諸王及び論禁衞長、皮室等を召集し、同力して察克及び燕王德哷を討伐した。諸將も之を聞いて相繼いで至つたので、兵を整へて賊の不意に出でて之を圍み、悉く亂黨を平定することが出來た。烏哲卽ち太宗の子壽安王を迎へて位に卽かしめた。之れが穆宗である。母を靖安と云い

皇后は蕭氏である。帝は卽位の年、應歷と改元した。

應歷二年春二月太尉和爾郭勒濟の謀反あり、夏六月には國舅政事令蕭默赫特、宣政殿學士李幹の兩人が南奔を謀って、事覺はれ、秋七月には政事令隆科、林牙迪里、待中紳圖、郞君哈里等叛を謀つたが悉く成功せず、穆宗の地位は比較的安固たるを得た。之れ一に烏哲の深慮による者でなければならぬ。穆宗を立てた烏哲の名望が穆宗にも影響を及ぼしたことが少くないのを認めねばならぬ。穆宗も之を認めないことはなかつたと見ゐて、卽位したとき「朕の生命は、實に卿の手より出たも同樣である」と云ふて、逆黨の財產を悉く烏哲に賜らうとしたことがあつた程である。しかし烏哲は之を固辭して受けなかつた。此間に、夏六月、北漢の乞を入れて、中台省右函高模翰及び漢兵に命じて周軍を晉州(正定の東八十里)に、圍んだことがある。此の戰は勝利を獲ずに北歸したけれども、內寇、頻繁の折としては、まだまだ相當に餘裕はあつたに違ひない。是年の冬に漢が使をして葡萄酒を遼帝に進めたといふ。餘事ではあるが漢は山西の太原に居してゐたことから葡萄酒に就ての古い、且つ面白い記錄であると思ふ。そして三年の春には周も和順の意を表した。し

かし冬に至り魯呼の子衞王完郎君札幹、迪里、等の謀反があつて遼としては割合に急忙な月日が、これからずつと續いて行く。

應曆四年の春正月周主威殂して太子榮嗣立した。是を世宗皇帝と云ふ。

北漢の王劉崇之を聞いて大いに嬉び、又周を攻めやうとして遼に兵を請ふて來た。遼仍ち武定軍（奉聖州）節度使楊袞をして萬騎を率ゐて來援せしめた。劉崇は又自ら三萬人を督して共に南し、潞州に逼り高平の南に陣した。周の世宗奮然として自ら大軍に將として來りて高平に戰ふ、宿衞の將趙匡胤、張永德と兵を左右翼に分つて奮擊し、世宗も亦親しく矢石を犯して、戰ひ大勝利を獲て、直ちに晉陽に逐ふて之を包圍した。旗幟環城四十里であつたといふ。猛虎と恐れた契丹兵を打破つた、其洋然たる有樣を想見することが出來る。しかし遼兵追擊の命を受けた郭從義尙鈞等、輕擧して、南院大王特烈の爲に忻口（忻州の北五十里）に破られ、加ふるに大雨連日に亙つて士卒の病を起すもの多くなつたので帝は遂に師を班してしまつた。

秋九月に再び漢の請求により彰國節度使蕭迪里、太保許從贇を遣して忻、代二州に掟つてからは、遼漢の親交益々深く、むしろ漢は屬國の態度さへ取る樣になつた。

即ち五年春二月には遼帝に尊號を奉つて許されず、冬十一月漢主崇が死んだので次子承鈞は之を遼に告げ且つ册立を請ふて來たので之を許した。十二月にはわざわざ軍官を派遣して軍事を議せしめ、翌年六月再び對後周の軍事を議す爲に遼に遣使された。北漢は最早や自己一人の力を以てしては三晉の北を保つに大なる不安を感じてゐたのである。

外寇の憂がなければ太平の日を保つことが出來る。太平の日は、その中に倦怠の勢を釀すものである。倦怠はやがて内憂の本であらねばならぬ。安閑な遼國にも此頃になつて漸く倦怠の色を表はして來たことが見られる。始めに錫庫といふ女巫があり長壽の藥方として男子の膽を用ふべきことを帝に申上げた。穆宗も可成亂暴の性を持つてゐたので、直ちに之に從つて盛に人を殺しては其膽を取つたが數年ならずして其數甚だ多かつた。七年に至り、漸く其非なるを覺り、夏四月錫庫を射殺してしまつたといふ。

此年、北漢は重ねて使をして朝貢して來た。翌八年の夏四月には南京留守蕭思温が沿邊の州縣を攻めてゐたので人を遣はして之を勞したが周の勢も仲々に侮り

難く、五月束城縣(保定の南)を陥れたので思温は帝駕の燕に南下を請ふて來た。漢も亦十二月に周兵の復來寇を知らせて來た。遼も戰に倦む頃である。しかも自己の力を以ては中國の治め難きを一度は經驗もし加ふるに三晉は已に臣下の禮を取り、獨り周のみ燕南に騷擾してゐるけれども遼の根據地は未だ到底脅すに足らぬ。それに外境の事に盡すべき力の幾分を今は內治に割かねばならぬ時機にも立ち至つてゐる。故に帝は是等の請求を外にして應歷九年正月潢河に駐蹕し四月再び周の來侵を告げる者があつたのも南京留守蕭思温を兵馬都總管に任じて之を擊たしめたりした。しかし、周兵は次第に北進して益津、瓦橋、淤口の三關を拔き、瀛莫二州を陥れたので、帝遂に南京に下り、漸く周兵を退かしめることが出來た。六月には復容城縣(濠州の南)を回復し、西方に向つて懷州(巴林の西北)に行幸した。此月周主榮殂し子の宗訓が立つた。穆宗も亦十二月遂に上京に兵を還してしまつたのである。王子迪里、前宣徽使哈斯等の謀反が表れて囚はれたのは此月である。

後周にあつては高平の戰に大功あつた趙匡允の名望次第に高く、殿前都默檢より

更に歸德の節度使となり、遼の入寇を防がんとして出陣して陣橋驛(開封府祥符縣)に至つたとき軍士又大いに譟き、匡允を擁して南還し帝位に卽かんことを請ふたので遂に周主を廢して自ら帝位に就いた。宋の太祖皇帝とは彼の事である。時に應歷十年春正月、周は凡そ三世四十年にして亡び、五代を通じて八姓、十三世五十四年である。

此のドサクサにまぎれて北漢は遼の請を納れ大同の節度使阿拉を遣して四部を率ゐて(汾州の西)を奪つた。遼は漢の請を納れ大同の節度使阿拉を遣して四部を率ゐて應援し且つ、蕭思温に命じて三部の兵を以て之を助けしめた。しかも翌月、石州は完全に宋の爲に奪取されてしまつたのである。此時遼に於ては謀反するもの多く、先づ政事令耶律壽遠、太保綽卜鄂博等が七月のそれを始めとして、八月懷州に南した際には近待古格を擊殺し十月更に魯呼の子喜隱の謀反があつた。翌年の春二月司徒烏哷濟の子特爾格其父を誣告して謀反するあり、之等は或は誅され、或は許されて、悉く成功する者はなかつたけれども、宋の勢が次第に強大に赴いて、中原の王國の叔父たる位置は、遼自身の自惚れのみとなりつつあつた原因の一部は此

處にて見られると思ふ。

只太平の齎す效果として此年の五月司天王白李正等が始めて厤法を定めたことを記してある。翌年には御史太夫蕭和斯を北院樞密使とし、之に對衣鞍馬等を賜ひ、夏五月旱魃の連續に人民が苦しむのを見て左右に命じて雨乞ひを行はしめたそれに穆宗は一面暴君の相を備へてゐたと見ねて生物を殺すことに甚だしく興味を持ち、且つ、酣飮を好んでゐた。それが自己の地位の安固となるに從つて次第に其激しさを增して行つた。卽ち應歷十三年正月、宋が益津關に城塞を築くのを知つて南京留守高勳、統軍使、崔延勳に命じて之を擾がしたばかり、自分は九日間も晝夜連續に暴飮して、漢の求救の如きは馬耳東風に獵者を集めて之が技能を戰はしめ、九月には靑牛白馬を以て、天地を祭り原野に於て大いに痛飮したのみならず罪なくして徒に人を殺しては快としてゐた。以上の如き暴政はこれから毎も止むことはなかつたのである。

應歷十四年春正月、宋は漢に侵入して來た。遼卽ち、西南招討使特烈に命じ兵を率ゐて行きて漢を助けしめ尋いで宋兵を石州に圍んで之を走らしめた。十六年に

は漢が金器、鎧甲を貢して來た。翌十八年七月に漢主承鈞が死しその子が卽位したがその年宋は大軍を派して漢を太原に圍んだ。特烈卽ち兵馬總管となつて諸道の兵を發して之を救ひ、翌年三月漢主繼元を封册して皇帝となし、漢が白鹿を獻ずるを納れた。以上を見れば外邊の事件が次第に少くなつて行く樣に見ゆるが事件が少くなつたのではなく、穆宗が飮酒に溺れて戰に倦んだものと見るのが至當である。彼は卽ち、或るときは人民を生き埋めにし、或るときは白鷹山に盛なる鹿狩りを試み、掌鹿官に賞賜して、無辜者を殺し、宴を開いて徹宵飮み續け、そのまま晝はねて、夜は飮み、氣にさわれば何人をも論ぜず之を殺したりした。又或時は東に鴨獵を行ひ、大酒家を賞し、其家に行幸して連日、宴飮し、無唔に左右の者へ官爵を授けたり、此外種々な殺人法や、刑罰を以て人を殺して樂んでゐた事が十三年から十九年の春まで少しも變るところがなかつた。その事跡から見ると殆んど一種の狂人に等しい。人間の血と酒とは穆帝の命でもあつた樣である。その命も、しかし、長かるべき筈がない。應歷十九年三月再度懷州に行き黑山に狩獵を爲し、熊を獲て大いに歡び群臣と共に痛飮して大いに醉ひ、そのまゝ行宮に還らむとして遂

に霄格等六人の爲に弑されてしまつた。時に夜陰、所は黑山の下である。黑山は毎歲穆帝の獵を爲した所なのである。帝はまだ、そのとき三十九歲であつた。其時共に穆宗と獵に從事してゐた、世宗の第二子賢なる者あり、變を聞いて直ちに飛龍使尼哩、待中蕭思温、南院樞密使高勳の等の師甲士一千人を率ゐて馳せて行宮に赴き、亂を定めて遂に卽位した。之を景宗といひ、改元して保寧と云ふた。逆黨霄格等は保寧五年に愈く誅されたといふ。

始め、世宗が察克に殺された際、皇后蕭氏も共に死んだので、景宗は僅に四歲で獨ポツチになつてしまつた。それに元來病身だつたので、穆宗は彼を興慶宮に連れて行つて養育したのであつた。そして景宗には北府宰相蕭思温の女である蕭氏といふ妃があり、景宗卽位後間もなく皇后となり、國事はすべて皇后が之を決したといふ。蕭氏は少さいときから父思温を驚かした程慧敏であつた。だから國事を決する際にも明達、治道、善を聞き、學を習ひ、且つ、軍政を知つて、群臣を駕馭することが巧かつたので、皆死力を盡して其職を勵まぬ者はなかつたといふ。

斯くて穆宗が氣まぐれの政治に漸く離反した人心も、次第にやわらぎ、且つ、遼が背

後から脅すことの少い爲に南征に力をそゝいでゐた宋は北方に兵を還すの不得策なるを知り、北漢さへも敢て攻略しやうとはしなかつたので事實上平安な月日がこれから七八年も蒙地を支配して行つた。今其間の出來事を綴つて見ると、先づ北漢は保寧元年の夏五月李匡文、劉繼文、李元素等を派して景宗の卽位を賀したのを手始めに、翌年には十二月、三年には四月から每月、敬意を表しに來朝し、十月復貢物を獻じて來た。四年の夏四月皇子隆緒生を特派して賀表を呈し、更に五年には正月と十二月に來朝し、七年春二月雁門節度使劉繼文來朝して貢物を奉つた。此間景宗は或は潢河に行き、又或は東京まで行つて領土を巡視し、歸路盤道嶺に次したとき后父思温が盜賊の爲に殺されたことがあつたが三年には南京の統軍使魏國公韓匡美を鄴王に封じ右皮室詳袞耶律賢適を北院樞密使とし、又賊盜を誅したりした。しかも六年の春三月には宋までが使を遣して和親を請ふて來た。そこで涿州刺史、耶律昌珠に侍中の官を加へて宋と和を議せしめた。翌年宋再び來賀し、四月遼も郎君舒蘇を遣して宋に使し、八年には春秋の二度來聘して來た樣な始末である。

# 第五　遼、宋の交戰

しかるに北方に遼と和親した宋は南方に向つて其翼を廣げ、先づ南唐を攻めて安徽、江西を領し、湖南、荊南を略して兩湖を取り、南漢の地兩廣を略し、後蜀を亡ぼして四川に入り、呉越も亦來朝して服從したのでその勢實に昇天の如くであつた。このとき中原に於て宋に對抗して獨立國を稱してゐるのは弱國北漢只一つであつた。たとひ遼の後援が恐るべきものであつたとしても、海内を統一した宋の勢を以てしては、北漢も、今までの安息を保ち得ないのは當然である。しかし宋と雖も未だ遼を云々しやうとは思はなかつたと見ゐて、北漢に侵入する前に遼に奉賀使を派遣してゐる。派遣してから一と月とも經ぬ、保寧八年秋九月兵を派して北上して來た。仍て遼は南府宰相、耶律沙、冀王迪里等をして赴援し宋師を退けた。その年の冬十一月九分まで海内統一の野心を滿たし一分を殘して宋の太祖は死んでしまつた。そして弟晋王が卽位してからは、しきりに遣使して遼の機嫌を取り出したのである。遼の勢はまだまだ落ちては居らぬ。しかし北漢を攻める場合

に、遼をして中立的態度を取らしめる爲に、この和親を實行するのは、あまり效果は認められぬ。何故なれば遼は北漢を以て自己の臣下なりと心得てゐるからである。

或るときは粟二十萬斛を與へて漢を助け、或るときは又戰馬を之に送りたりしたので漢も亦、明に臣事することを告げてゐる。故に乾亨元年(保寧は九年まで)正月宋が又漢を伐つた際に、遼は塔瑪及び長壽を遣して興師の故を問ふて來た。宋も最早や北漢を攻める爲には同時に遼兵をも驅逐しなければならぬのは必然の運命であると覺つたので「河東が吾命に逆ふので其罪を問ふまでである。北朝(遼)が之を援けずして吾と和好すればよし、然らざるときは矛を交ふるばかりである」と答へすつかり兩國間のこれまでの和親を破つてしまつた。そこで遼は翌月南府宰相耶律沙を都統とし、冀王迪里を監軍として之に赴かしめ又南院大王耶律色珍に命じ樞密副使穆濟と共に所部の兵を督さしめ、又北院大王希達、乙室王薩哈勒等の兵をして燕を守らしめた。三月耶律沙等、遂に兵を進めて宋師と白馬嶺(太原の東北四十里許、忻縣との交界、今は石嶺關といふ)に交戰した、沙の將兵卽ち白馬嶺の

險阻によつて敵を擊破せんとし、且つ兵力の不足を憂いて後續兵の來るを待つて進擊しやうと謀つたが、迪里、穆濟等は急擊を主張して止まなかつたので遂に潰走の止むなきに至り、迪金はその子幹格、沙の子德里、及び圖魯卜部節度使圖敏、黃皮室詳袞唐古等と共に均しく戰死し士卒の死傷も亦甚だ衆かつた。會々色珍の兵が後ればせに來援し「萬矢俱發」したので敵も愈く退いた。しかし勝利は確に宋軍の獲るところである。北山西に於ては宋も志を得なかつたが南山西は宋師が常に活步し得たに違ひない。卽ち夏六月には宋師が再び太原に來襲して來たが、漢が獨力以て之に當つても利を獲ることの出來なかつたのは當然である。防戰一箇月に滿たずして漢主劉繼文は北方に逃奔したが遂に宋に降參するの止むなきに至つたのである。宋の太宗が卽位してから四年、北漢建國以來二十年である。遼はそこで劉繼文を彭城郡主に封じ代州に據らしめたが、終に之を疑つて責めたので繼文は憂死してしまつた。(宋の郭守文の爲に敗死したとも云ふ)

宋の太宗は此戰勝を利用し、乘じて遼兵を中國より驅逐せんとして北進して來た北院大王希達、統軍使蕭托果、乙室王薩哈勒等之を沙河(易水)に迎へて交戰したが利

あらずして退却したので、宋軍は大擧して南京(順天)を包圍した。秋七月耶律沙等軍を還して宋兵と高梁河(北京の西、玉泉山水)に戰ふに及び少郤休格、色珍等も來りて横擊を加へたので、宋軍一とたまりもなく敗走し、太宗は身を以て免かれ涿州に至り竊に驢車に乘じて遁還してしまつた。宋軍の死するもの實に萬餘人、捕獲兵仗、糧餉あげて計ふべからずとある。沙即ち景宗に俘獲を上り、將士を賞し、權知南京留守韓德讓、權馬步軍都指揮使耶律學古、知三司事劉宏も百方人心の慰撫に努め城池を修めて防備を固めたりした。九月には燕王韓匡嗣を都統とし、王府宰相耶律沙を監軍とし、特里袞休格、南院大王色珍、權奚王穆濟等と共に道を分つて南侵を企て畫した。しかし翌月匡嗣は宋兵と滿城に戰つて敗績し太保舒蘇は宋師を火山に破り、匡嗣も亦休格の勇戰により宋兵の追擊を追ふたが、南侵の計畫は成功せずに軍を還した。その退却は隊伍整然、實に見事なものであつたといふ。翌乾亨二年正月休格を北院大王に任じ、十月には再度の南侵を議して、先づ旗鼓を祭つて勢を擧げ、南京に出陣した。十一月瓦橋關を圍んで、宋兵の夜襲を却け更に瓦橋の東に之を破つた。守將張、兵を引いて出戰するに及び休格奮擊して之に勝ち師を斬

り、遂に餘衆を追ふて入城した。休格は勢に乘じ、沙河を渡り、追擊して莫州に至り散々に宋兵を惱した。しかし十二月太宗の親征軍に會ふて利あらず、師を南京に宋還した。越ねて翌々年の夏四月、景宗自ら將として南侵せんとし、滿城に至つたけれども宋と戰つた利あらず、守太尉、奚の斡里は流失に中つて死ぬ樣な始末だつたので翌月師を班し、九月途を變ひて雲州に出陣したが、焦山に至つて、病の爲に崩じてしまつた。焦山は今の朔平府左雲縣の東南にある。

南院樞密使德讓、色珍と共に遺詔を奉じて梁王を立て、軍國の大事は悉く皇后の命を聽くことにした。翌月蕭后を皇太后と尊び、國政は悉く彼女の攝するところとなつたのである。太后卽ち南院大王巴古濟を總領山西諸州事となし、北院大王林格を南面行軍都統とし、奚王和碩鼐を以て之に副とし、同平章事蕭道寧は本部の兵を領して南京に駐し、而、德讓を寵任して總宿衞事となし色珍と共に大兵を參決せしめた。時に聖宗卽ち梁王の年少なるを以て宗室の面々は各大兵を擁してゐるのに疑惑をはさんで內外震恐したので德讓は太后に勸めて、諸王に詔して其第を歸せしめて私に相會するを得ざらしめ、尙其兵權も奪ふことにしたので、人心も大

いに定つた。それに、休格も亦太后から南面行軍都統の全權を委任されたので戎兵を均しくし、更に休法を制定し、農桑を勸め武備を修めたので邊境は大いに治つた。翌年より聖宗は年號を統和と改む。

斯くて太后は承天太后なる尊號を上られ、或は西に或は東に領内を巡遊して、政治を見名勝をさぐつて統和元年の太平を祝福し、翌年春正月彭德の節度使蕭達林の來朝を謁見し、二月には聖帝と共に饒樂川(遼水上流、克什克騰)に獵を觀、四月には自ら滯獄を決判した。以後每歲之を行つたといふ。尙保安州の西四十里に上花園あり、三十里に下花園あり、共に承天皇后が自植の花圃であるといふ。又今の興化城にあつたといふ新涼殿には每歲暑を避けて涼氣を味ひに出掛たものである。

然しながら遼の太平は宋に取つては憂患を惹き起す原因となる。さきに漢を亡ぼして先づ中原一統の志は成ると見ることの出來る宋も、北山西及び北直隸は、中國の地でありながら蒙古族の管下にある。啻に中國統一といふ名義ばかりではなく、此等の地方を敵手に委ねて置くことは中原に對する脅威を大にする所以である。故に宋は屢々山西直隸の北方に於て遼と戰つた。しかしそれは勝利を得ず

に終つたのである。中原の帝王となつた今は尙更、遼軍驅逐を、常に心懸けてゐるべきである。或はそれが今日の宋が生命であるかも知れぬ。しかるに今遼は景帝が死んで聖宗が卽位した。しかも聖宗は未だ年少である。賢なりと雖も太后蕭氏の專政では知れてゐる。乘ずべきは將に此時であらねばならぬ。斯く宋の將士は考へた。

斯くの如くにして統和四年春三月の遼討伐軍は起されたのである。その主腦の面々を見るに、曹彬、崔彥進、米信は雄州道(保定の東)より潘美、楊繼業は雁門道(山西代州より大同に至る途中、西北二十五里)より又田重進は飛狐道(今の保定道の北境恒山附邊倒馬關)より各々所部の兵を率ゐて北進したのである。涿州、固安、新城(皆涿州附邊)は瞬く間に陷つてしまつた。是に於て太后、親ら帝と共に師を率ゐて應援せんとし、先づ宣徽使布琳を南征都統となし、休格を以て之に副とし、各道の兵を徵して馳せて燕南に赴かしめ又東京留守耶律穆濟を遣はし偏師を以て繼いで進ましめた。而て太后は兵を駝羅口に駐し(涿川の東北)四月南京に至り諸將の捷報を聞いて、酒脯を以て天地を祭り、群臣を率ゐて、大いに士氣を鼓舞した。次で軍を進

めて涿州に至り、固安を陷れ五月曹彬等岐溝關(涿州の西南)に於て大いに宋兵を擊破し、休格亦宋軍の粮道を絕つて、其將吏を擒にし、車馬器械を得しこと算ふべからず。追ふて巨馬河に至り、散々に敵をほふつた。しかし飛狐關より進んだ田重進は仲々强く靈邱にまで進出して來た。それに彰國節度使艾正等は應州(大同の南)を以て宋に內附し、又鄀州防禦使呂行德等は飛狐(廣昌)を以て、都指揮穆超は靈邱(廣昌と共に口北道の南部にあり)を以て各々宋に內附してしまつた。又雁門道より進擊して來た潘美も亦雲州を陷れたので、太后は燕南の軍を還して南京に至り、又色珍に命じて山西兵馬都統と爲し、北山西に馬首を向き變へることになつたのである。色珍仍ち蔚州に敵を破り二萬餘級の斬首を、獲勝に乘じて靈邱、飛狐を攻めて之を降し、六月には太后居庸關を度つて、口北に出陣し凉陘に凉を納れ、七月朔州を復すとの色珍の報告を得た。そのとき朔州の將楊繼業は、擒られ食せざること三日にして死んだといふ。雲應諸州を守る宋將は遼軍の此勢を聞き皆城をすてて遁げてしまつた。

斯くして宋軍を退けた太后は翌月北院大王晉努寧を山後五州都管と爲し詔して

山西今年の租賦を復し、九月には黑河(赤城の東邊外を流る)に行幸して群臣に命婦菊花酒を賜ひて、之を慰撫し、更に儒州に出で十月居庸關を出でて十一月南京に次して親しく輜重の兵を閲し、悠々と京兆をめぐりて次第に南下し沙河を渡つて休格の軍と會し、共に軍事を議して滹沱河の北に陣營を布いて再び南侵を議したのである。休格卽ち騎兵を以て宋兵を絶つて邢州に入らしめず、尋いで莫州任邱に於て宋將劉廷讓を破り邢州、深州を掠奪して歸り翌年又東城文安(共に任邱の東北)を屠つて南京に歸還した。

統和六年秋九月太后南京に出遊し、自ら將として南侵を始め、色珍等共に涿州を陷れ、狼山(保定の西北五十里)郞牙山を破り、東して益津關(霸)を拔いて、十二月再び西して長城口に進み又滿城を攻め邢州、新樂を陷れ翌年正月に師を還した。間もなく宋の雞壁塞の守將郭榮が衆を率ゐて來降した。而太后は南京に屯して諸軍を諭し易州に赴かしめ、刺史劉墀を降して、其軍民を燕京に遷した。夏五月に至り休格は兵を引いて滿城に至り宋の降卒七百人を招致して、巴雅爾と共に宋兵を泰州に擊破した。

斯くの如く遼宋の合戰は或は直隸の野に或は山西の山岳に絕ゆず戰はされ、互に勝負はあつたけれども、概して宋軍の不利に終つてしまつた。遼にとつては無聊の折の好い敵手とも見ることが出來るが、宋に取つては仲々に大事な戰である。たとひ遼軍は正定附近を極南として敢て河南まで侵入はしなかつたけれども、宋と雖も創業の秋であるから、遼の侵入は其內治に多大の干係を齎すことが宋軍に取つて仲々に大事な戰である所以となるのだ。故に宋としては全然遼軍を中原より驅逐してしまうか、もしくは一步を退いて之と親交を結ぶかの二途に出ない。今遼軍遠征が思ふ樣に行かない。さればといふて之と對抗の氣勢を煽りながら持久的防禦戰を行ふことは今の場合とあまり變りがない。殘る一策は之と和戰することである。十二年秋八月宋は使を遣はして和議を申込んで來たといふのは遼としてはむしろ豫期しなければならぬ事である。しかもその講和使は翌月再び來朝したけれども遼は許さなかつた。武斷一點張りの遼にとつて宋と和を結ぶことは其好敵手を失ふことになるからである。中國の霸王は敵手あるが故に苦しみ蒙古高原の大王は敵手なきが故に苦しむとは思白い對照であらねばな

らぬ。蒙古及び蒙古人は中國人と一所にはならぬ。好敵手を獲て內政擧り、それを失つて內政も亦從つておろそかになる。內寇の萠しはその中に醱酵するのである。蒙古王國の第一義は何と云ふても戰である。

宋は和を求めて來た。それは戰に勞れたことを意味する。從て戰が第一義である遼は抗抵の弱い且つ中國人の群居する河北に侵入を企てることは面白くない。中國を取つたとしても之を治めるに如何に困難であるかは太宗の經驗ばかりでなく中國人の文化に相當の敬意を表してゐる、遼帝の敢て爲し得ざるところである。故に西邊撫定が企てられたのである。其元帥は皇太妃であつて蕭達林が軍事を督してゐた。而て聖帝は狩獵を樂しみ、或ときは盤台嶺(龍門城邊外の西北、張北、沽源二縣の分界、今は雙盤台嶺といふ。)或るときは延芳澄(北京の南)に又或るときは望雲縣(赤城、景宗嘗て此に潛邸を作る)に出で、或るときは又鴛鴦濼(張北縣興和城の北二十里許、乙室部の司徒は此處に居つた、鴛鴦鴻雁の類多しと見ゆ)により東翼察哈爾を東北に通過して平地松林(克什克騰旗の西南)に出獵し或は望雲縣邊外の黑河なる南山に至つたりして休むことがなかつたので太后もそろそろ心配し

出し且つ出獵中に逆臣の殺に合ふた前例もあるので、あまり田獵に馳騁してはいけないと戒めたと云ふ。

聖宗の統和十七年は宋眞宗の咸平二年である。秋九月聖宗は再び南侵を始めた、翌月遂城に至つて戰つたが勝たず、別軍として蕭繼遠を遣はし狼山鎮の石砦を貫いて瀛州に進軍した。翌年正月に至り軍を南京に還して將士を功賞し、冬十一月には李繼遷の子德昭に朔方軍節度使を授けた。朔方は卽ち西夏の地であつて鄂爾多斯の西部である。聖宗の統和四年春二月李繼遷なるもの西夏の部衆を率ゐて遼に來投するまでは宋の羈絆を受けゐたものである。元來は魏の拓拔氏の後であつて、李なる姓は唐朝から貰つたのである。その後五代を經て宋に至るまで世々其地を有ち、鄂爾多斯の右翼楡林府米脂縣を根據とし、夏(陝西北部米脂縣銀楡林の南)宥(オルドス右翼前旗卽ち楡林邊外)綏(葭州神木縣)靜(米脂縣附邊)の五州に據つてゐた。始に宋に臣となつて趙姓を貰つたが、宋は彼族を長城外に悉く徙してしまつたので、快からず遂に叛いて斤澤(懷遠縣、米脂の西、今の横山)に侵入し遼に內附して來たのである。之より遼と西夏との往來は絕えず行はれ、或るときは共に

宋軍を敗つたことさへある。統和十九年には宋の恒環、慶(寧夏より慶陽の間)三州を與へて宋の西方を脅した。翌年六月には靈州にまで南下したことを使をして告げて來た。

統和二十一年夏四月耶律諾觀蕭達林等が宋將王繼忠を望都に捕へて送つて來たが太后は之を許して戸部使とした。(或は王繼忠を高陽關(陽高)の守將であるともいふ)繼忠卽ち聖宗に炭山に謁すとある。炭山に就ては萬全縣の西南にある炭山を云ふ場合もあるし又獨石口邊外一百里なる灤河の上流黑龍山を指す場合もある。遼が始めて城を建てたといふ炭山は黑龍山に相違ないらしいが歷代皇后の納涼地であつた炭山は興和城と相對して見てどうしても萬全縣のそれでなければならぬ。又室韋と相連るといふ炭山は察するに黑龍山であらう、黑龍山(炭山)にも遼帝は屢々獵と納涼とに出遊した土地である。故に特に歸化州の炭山若しくは陘頭といはない限り遼時に於ては黑龍山を指すものと見るのが至當であらう。二十二年の秋九月聖帝南京に行幸し、固安から漸次南下して南侵を圖り、定州、遂城を攻めて之を取り、十月瀛州に攻め入つたが克たず、十一月馬軍都指揮使耶里科里

や、東京留守蕭巴雅爾等は益々南下して河北なる洛州(永年)及び魏府(大名府南)まで進出し更に德淸軍(大名の南)を破つた。その勢仲々防ぎきれなかつたので、連年遼に苦しめられた宋の將士は帝の召問に答へ或は南京に行幸せんと云ひ或は又蜀に幸せんと請ふて、議論仲々多かつたが同平章事寇準は斷然として主戰論をとなへ、退却策を議したる者は悉く之を斬つて出戰しやうとまで極言したので、宋の眞宗遂に親征の議を定め、澶州(大名府南部淸豐縣)の圍みを破らんと兵を率ゐて濮陽に至り、黃河を渡つて陣した。時に寇準一策を進めて州城の樓門に上り旗幟を建てしめ、軍勢をして一齊に萬歲を叫ばしめた。遼兵之によつて大いに氣を奪はれ、宋軍の意氣は大いに擧つた。

時に戶部使王繼忠、しきりに和を帝に勸め、その利益の僅少ならざるを告げて止まなかつたので、帝も繼忠の書を齎して宋の軍營に至らしめた。宋も戰勝の不確實なるを覺つてゐたので早速曹利甲に命じて講和せしむることに決したのである。しかるに遼はその戰勝の勢を藉りて、先に周の世宗の取つた關南の地を求めて來た。眞宗、寇準の主戰論をしりぞけて曰く「數十歲の後には能く遼兵を防ぐことの

出來るものがあるに違いない。しかし今重ねて、蒼生を苦しめてまでも遼と決戰するに忍びない」と、卽ち毎歲絹二十萬匹、銀十萬兩を贈ることを約して、關南の地は依然宋の領土とし、且つ宋を兄とし遼を弟とするといふ名の下に誓約を交換し兵を解きて還らしめた。是より宋遼の親交深く往來絕ゆることがなかつた。仍ち二十三年二月には宋遼の境界なる雄州の白溝に榷場を設けて交易を開き、五月には宋の孫僅等、遼朝に來りて皇太后の生辰を賀し、冬十月には宋の歲幣が始めて至つた。遼も亦、太保和卓、太師博諾、政事舍人高正等を遣はして修交を重たのである。右の如き修交使は兩國より絕えず派遣されて親交は益々深くなつて行つた。宋に取つては、政策であるかも知れないが敢て中國の地を望まない遼では心からの親交だと云ふことが出來る。のみならず、中國の王から歲幣を貢せしむといふのは遼の大なる誇りでなければならぬ。北方の王は、しかく單純であるのだ。しかし太妃(太宗の第二子齊王の妃)を懷州(長春附近)に幽閉して之を殺し且つ其餘黨を悉く殺して大いに女姓的暴政を行ふた太后も二十七年冬十二月南京の行宮に崩じた。宋卽ち遣使して共に合葬し翌二十八年には左龍虎衞上將軍蕭和卓が太后

の遺物を持つて宋に至つた。この年九月、朔方軍節度使李德昭を夏國王に封じた。翌年年號を開泰と改め、益々宋との親交を深くし、國内も無事太平に、且つ宋といふ大國を南にひかへてゐるので可成の緊張振りを示しながら、三年は五年と過ぎて行つた。その間、或るときは蓮花濼(蓮花灘、沽源縣内、獨石口の西北七十里)に又或るときは瑞鹿原(不明)に狩獵を行ふて、徒然を慰してゐたが、太平二年春三月(開泰は十年にして終る)宋の眞宗崩じ子仁宗卽位し、遼宋の修交はまた重ねられた。

## 第六　法天皇后の攝政と遼の滅亡

(重天父子の亂、昭懷太子の誣など)

斯くの如くして聖宗の晩年は遼時の極盛期のうちに事もなく過ぎて行つて十一年の夏六月聖宗の崩御も何等の影響も來さず、子の宗眞が興宗を稱してからも、その勢名に聊の變動も見せなかつた。只聖宗の元妃が自ら第二代の太后となり法天皇后と稱して國政を攝したことが目につくが承天皇后の例があるので敢て珍らしくはない。しかし法天皇后はもと一宮人に過ぎない訥木錦と云ふ者であつたが宗眞を我が子の如く愛育したので聖宗の寵を受け、遂に順聖元妃となつたの

であつた。しかるに宗眞の母は聖宗の皇后たる齊天后である。此兩人間に葛藤の生ずることは勢止むを得ないことである。殊に國政を攝して權勢を張らうとする法天太后にとつては肅太后は正に目の上の瘤であらねばならぬ。故に法天太后は自分の味方とならない者を片つ端から殺さうと謀つた。その惡いぐちを最先に扱いたのが駙馬蕭楚布、國舅蕭必塔等である。圍場都太師女直珠格爾、石祗候郎君詳袞蕭雅魯等七人は之を見て皆其家を捨てて上京なる齊天后の下に走つてしまつた。此樣なことのある以前にも護衞馮嘉努、耶律吉遜も齊天后を無き者にすることは四十年間も先帝に待つたことから先帝に對しても相濟まぬ儀であるまいかと忠告したけれども法天后の聽き入れないのは勿論と云ひ得るが興宗も育ての恩を强く感ずる一人だつたと見ゑて之を許さなかつたので、遂に上京に遷つてしまつたことがある。斯の如くして重熙元年の春、人を遣して齊天后を自盡せしめてしまつた。但し之を尊んで仁德皇后としたと云ふから、法天后もいくらか氣が咎めたに違ひない。太后の顏は又「鬱面狼視」と云ふからあまり氣持のよい者でなかつたらしい。それに、越ゑて三年には太后が竊に諸弟を召して少子重

元を立てんことを議した。それを重元が帝に告げたので帝も快からず太后の璽綬を收めて慶州(西喇木倫の上流なる哈喇木倫の沿岸、經棚の北)に遷つてしまつた。しかし同八年には仲直りをしたといふからその後は太后もあまり專横に振舞はず餘生を送つたものと見ゐる。而して二十一年の八月には温湯に幸し九月鹿を黑山に射ると見ゐてゐる、温湯は赤城の東北なる龍門所塘子口東十里なる黑河北岸にある。

是より先き重熙元年冬十一月西夏の李德昭卒し、その子夏國公元昊西夏王となり、更に駙馬都尉を拜して次第に勢を伸張して行つた。元來西夏國は、遼と宋の二大國の間に介在して、その勢力も三國對立とまではとても行かなかつたので、前にも述べた如く或るときは宋に、又或るときは遼に款を通じて、その生命を維持してゐたのみならず、先王德明の如きは遼より西夏王に封ぜられてゐながら宋にも竊頴を通じ四平王に封ぜられて、その難を絕つことに腐心しなければならなかつたのだ。しかし元昊は雄毅の士であつた。いつまでもこの貧弱國の形に滿足することはとても彼の大略に合はない。仍ち彼は職官を立て學校を設けて其國政を改

革し、陝の北部から甘肅に侵入して環、慶(慶陽)二州を取り爪州(洮沙)蕭州(安西)をも席卷して、興州(寧朔)に居り賀蘭山に依つて遂に帝を僭號し國を大夏と稱することになつた。云ふまでもなく、是は宋侵略の氣勢である。そして西夏が遼に封貢して居ることを知らない宋にとつては、大いに怒つたといふことも無理ではない。眞宗は此に於て愈々知經州(甘肅涇原道)夏竦、知延州(陝西延安)范雍に命じ、守備を爲さしめた。既にして元昊は延州に寇して來た。范雍仍ち門を閉ぢて守戰し容易に降らず、會々大雪が降り續いて屯衞の西夏兵大いに困却し遂に退却してしまつた。しかし西夏の侵略は一時も絶ゆることなく、西邊は騷然として安からざる有樣であつたので、宋は夏竦を陝西の經略安撫使とし、范中淹と韓琦とを陝西の經略安撫副使として、大いに州兵を訓練して、賊の衆寡を量つて巧に出戰したので西夏も仲仲進むことが出來なかつた。仲淹は兼ねて延州の知を受持つてゐた。

西夏が宋と決戰しやうとすれば遼の了解を得且つ之が援助を請はねばならぬ。宋も亦遼の了解を得なければ再び燕南の地により帝都を脅さるる憂を生ずることになる。故に重熙九年宋は郭楨を遣して西夏討伐の事を通告して來た。西夏

亦十年秋九月使をして宋俘を獻じ、暗に共同して宋を討たふと云ふて來たが、宋との和親が可成長い間續いて來てゐる今急に西夏を助ける譯にも行かぬ。かかる中にも元昊は精兵十萬を率ゐて再び入寇を企て、韓琦の軍を擊破して、遂に豐州(陝西北部府谷縣邊外)を陷れ麟州(陝西神木縣邊外)の糧道を絕つてしまつた。宋仍ち陝西及び甘肅の諸知州を分ちて四路となし韓琦を知秦州(甘肅渭川道天水縣)に、王沿を知渭州に范仲淹を知慶州に、龐籍を知延州となし、各經略安撫招討使を兼ねしめた。しかし元昊が再度の入寇に延州は陷り、渭州は荒され、經汾以東は皆壘を高くして固守しなければならなかつたが范仲淹の出戰するに及び西夏も軍を還してしまつた。

事態斯くの如くなるが故に、重熙十一年春正月、遼も遂に南院宣徽使蕭特默等を宋に使して興師の理由を問はしめ且つ、關南の地卽ち晉陽(太原)及び瓦橋(直隸雄州の南、易水)以南十縣の地を求めて來た。それに興宗は宋侵略の意志を抱いて、宋境に師を動かして之を威嚇し且つ國內にも可成に主戰論がやかましかつた。そこで宋も今關南の地を遼に取られては大變だと思つたので百方使者を說いて、夏と和

睦することを約束した。その爲に遼に對する歲銀及び歲絹を增さねばならなかつたことは止むを得ない。依て翌年正月遼は耶律廸里を遣はして夏を諭し宋と和を講ぜしめることにした。その講和の條件は、宋は先づ元昊を夏國王に封じ絹二十萬匹茶三萬斤を賜ひ、境界を定めることであつた。翌月夏は遼に使して興宗に尊號を上り兵を罷めたことを告げて來た。此時、宋では王安石が宰相となつて新法を勵行してゐる最中だつた。遼の南方侵略は歲幣の增加ぐらゐで止まるべき性質のものではない。白溝を以て境としたといふけれども事實甚だ漠然たるものであつたので關南の地は常に遼の欲して止まない所のものなのである。從つて關南の地は遼宋爭議の唯一の原動であつた形になる。この原動地の解決の爲に王安石は斷然たる態度を取り「將に取らんと欲するならば暫く之を與ふるに如かず」と云ふて遂に天章閣待制韓縝を遣して新に境界を定め、東西凡そ百餘里の地を遼に與へてしまつた。しかし元昊の大略も亦オルドス及び陝西甘肅の北部を以てしては到底滿足はしきれなかつた。それかあらぬか同年秋七月元昊はまた宋を侵略したいがどうであらうかとたづねて來た。しかしそれは仲介者たる

遼の許すことが出來なかつたのは普通である。そこで元昊は冬十月東方に進出して朔州、西翼察哈爾、綏遠の東部に居た黨項を侵して來た。遼は延昌宮使耶律高嘉努を以て西夏を詰譲せしめたが翌年の夏四月黨項及び山西の部族が反つて遼に叛して夏に歸してしまつた。於是遼は直ちに諸道の兵を召集して西方討伐に向つた。しかし五月羅漢努が黨項と戰つて利あらず、且つ西夏の李元昊が兵を率ゐて黨項に來援したので遼も兵を增して西南邊に集中し元昊を擊つことにした。六月尊長烏巴、その子を使として元昊の派遣せる來援使阿雅噶を執ねて來り、降伏を乞ひ尙ほ、西夏を討伐するから兵を藉りたいと申し出た。仍て遼は延昌宮使耶律高嘉努を遣はし西夏を征討せんと欲して先づ宋に此由を通告した。しかるに間もなく西夏は遼の勢を恐れ、且つ宋軍の來襲も同時に起るべき形勢を見て、和を講ふて來た。その使節の態度が曖昧だので再三之を責めたが遂に要領を得ず、再び西征の軍を整へ八月軍を九十九泉(保安州の境、新州の西北方なる牧牛山下にありと云ふ)に會し、太弟重元、北院樞密使蕭惠を以て先鋒兵に將とし西進し始めた。しかるに元昊は冬十月に至り罪を乞ふて進物を捧げて降伏を示して來たので樞

密副使蕭格に詔して元昊の軍を河曲(山西朔州の西方)に迎へた。此時元昊は親しく黨項三部を率ゐて來たので之に叛謀の理を詰り彼の來降を許さうとしたが群臣は進んで追討することを主張して止まなかつたので遂に數路の兵を督して元昊の軍を掩擊し數千人を殺した。但し遼軍でも駙馬都尉蕭呼都克は執へられてしまつた。その蕭呼都克を元昊は間もなく還して寄こしたので遼も年の暮に師を還へしてしまつた。

後四年を經て重熙十七年春二月李元昊その大略を抱いて卒し子諒祚西夏王に卽位した。その事もわざわざ遼に使して知らしてよこしたが、元昊の意中を疑ふた遼は仲々心を許さず、遂に翌年正月西夏より派遣せられた賀正使を留めて返さずして西夏討伐を議決し、先づ蕭惟信を宋に遣はして此の由を告げて其了解を求め夏六月に至り韓國王蕭惠を河南道(オルドス)行軍都統と爲し、趙王蕭孝友、漢王特布を之が副とし、興宗自らは中監を率ゐて秋七月軍を進發し八月黃河を渡つて鄂爾多斯に入り夏人を追ふて歸つた。しかし西征の諸將はそのまま軍を西方に留めてゐたのであるが九月に至つて蕭惠等夏人の爲に敗戰し戰艦糧船等數十隻を失ひ

且つ部下の死傷も少くはなかつた。これ一に西夏軍の侮つて備を設けなかつた事から起つたのである。この敗戰に遼軍は再び氣を引き締め北道(綏遠より黄河の北を進むもの)行軍都統耶律達嚕噶の如きは黨項の一部なる準布軍を率ゐて一馳して賀蘭山(甯夏鎭の西六十里)に至り虚に乘じて敵の牙城を衝き元昊の妻及び官屬を捕ねて其衆三千を殲した。遼軍にも蕭慈實努及び南剋耶律幹里等の戰死があつた。しかるに翌十九年二月夏將旺布、威赫、伊特凌結等來つて金肅城(綏遠托克托附邊)を攻めたので、別軍なる南面林牙耶律高嘉努等力戰の後大敗せしめ旺布一人身に傷を蒙つて逃げたのみで他は皆殺されてしまつた。三月には又殿前都點檢蕭塔喇臺、夏と三角州に戰つて之に克ち、更に軍を一統して大擧西夏に侵入したその暴行が可成に猛烈だつたと見ねて夏將旺布も五月に至り來降し、その後六院軍將哈里が夏が最後の侵入軍を擊破したので西夏王も遂に降伏を申出で從來の如く藩と稱することになつたのである。

是より西夏は再び遼に對抗せず、毎年使をして貢を納れ、重熙二十四年八月興宗の崩殂後と雖もその態度を變ずることなく、或るときは回鶻僧、金佛梵覺經を獻じ、李

諒の卒後は李秉常、夏國王に封ぜられ印綬を賜ひ斯くして天祚帝が保大三年金人に追はれて西夏に逃遁するまで遼と夏との親睦は變らなかつた。その程度は西夏王李乾順が天祚帝を救けて金人と戰つたのみならず、その敗れて逃遁するや快く之を迎へた事を以ても察することが出來る。

しかし、宋に對しては相變らず和親の交を結ばうとはしなかつた。のみならず、常に陝西或は甘肅の北部に侵入することを怠らず、一度環慶二州に於て宋軍に襲撃されてからは、報復の意氣を以て益々侵入してゐたのである。仍て宋の宰相王安石は遂に王韶をして洮河（蘭州）按撫使となし、先づ西夏の搦手より之を陷んとし、西方吐蕃を討つて遂に河州（蘭州府導河縣）民州を復して之を降したが容易に西夏は降すことが出來なかつた。

内侍押班李憲、仍ち代つて邊事を措置することとなつた。後數年ならずして夏人其主秉常を幽閉したといふ事を聞いたので奇貨措くべしとなし五路の兵を會して道宗の太康八年秋七月、夏討伐に向つた。而九月には憲は蘭州に攻め入り、別軍なる种諤は陝西の米脂に克ち、翌月には長城を越ねて宥州（楡林邊外）に進出し、十一

月諸軍を合して靈州(甘肅寧夏)を攻撃したが遂に克たず退却の止むなきに至つた。しかも夏軍の追撃の急なるに會ふて陝西に逃遁し僅に石堡城(楡林道保安)を拔いて夏軍を防いだが物にならず散々に破られてしまつた。同じく道宗の太安二年冬十月李秉常遂に卒し子の乾順尋いで夏國王となり相變らず南方進出の鋒を收めず永樂城(楡林の南銀州)を陷れて米脂を以て塞とし附近に四砦を築いて宋軍に備へ一方遼に乞ふて援兵を求め且つ道宗の壽隆二年冬十二月には宋の俘虜を遼に獻じて來たりした。しかし宋も仲々に西夏討伐を思ひ止まらず頻りに楡林附邊の地に交戰し互に勝敗あり壽隆四年の如きは宋軍が長城邊外まで進出して來たので遼は西夏の求援により蕭藥師努耶律儼使を宋に派遣し諷言以て夏と和せしめたことさへある。從て其の間一箇年ばかりは三國の間に何の紛擾がなく西夏も布木刺實部を討つたりしてゐた。

しかるに次の天祚帝の乾統二年に至り再び宋の進擊は開始せられた。宋の進擊といふよりも西夏の侵略に對抗したといふ方が確であらう。夏仍ち李造福田若水を遣はして再三再四援軍を請ふて來たが遼も東方金人の來侵に苦しんでゐた

最中だつたので敢て兵を派そうとはしなかつた。否出來なかつたのである。しかし夏の求援があまりに激しかつたので、困窮の場合、出來るだけ多くの味方を作らねばならぬ必要上、前例を再び引用して使をして宋を脅し、遂に西夏と和せしめた。その講和談判の終了したのが乾統六年冬十二月である。

此時には遼も、大國宋を脅して、自分の意志を行ふまでの實力は、もうなかつたが、宋も熈寧(重熙)以來、兵を西邊境に用ゐて、しかも僅に夏の六堡を得たばかり、それに靈州、永樂の大戰に死んだものばかりでも六十萬人、雜穀銀絹を失ふたことなどは擧げて數ふることも出來ない程だつた。それで帝も邊防の將はあまり信用が出來ないと見て取つた矢先、遼の仲介を提議して來たので講和に贊成したのである。

夏の困弊も亦、實に酷かつたといふ。何は兎もあれ末世の遼としては大出來の仕事でなければならぬ。何故ならば、金人の來襲に援兵を派したのが西夏王乾順で、その敗れて逃遁したとき、天祚帝を奉じて、金に對抗したのも乾順であるからである。加之宋も亦銀絹を送って、天祚帝の軍を助けたといふに至つては、たとひ金人の壓迫が最早宋の社稷にも感じられてあつたとしても大成功と云ふに異存はな

からうと思ふ。

蓋、太祖阿保機が帝を稱してから實に九世二百十年、末帝天祚が金人に追はれて應州(山西山陰縣の東)に走らんとし途上にて捕へられてしまつた。その間、熱河及び察哈爾を根據として、常に中原を壓し、或るときは大梁に突入して、中原を馬蹄にかけたことさへあつたが、運命は彼に之れ以上の生命を與へようとはせず最後まで漢人種に畏怖せられながら同族なる金人の爲にその背後を衝かれて、朔北の荒原に亡びてしまつた。

その滅亡の經路を語る前に、遼、それ自身の中に燃ゐ且つ消ゐた、二三の事件に就いて、名殘りの遼史を綴らうと思ふ。金人との對抗戰に就いては新しく金人の立場より見ることにするつもりである。

諸君は興宗と法天太后との爭議のとき重元なる者の現はれて來たことを記憶してゐるだらう。その重元は次の道宗にも仕へて、遂に天下兵馬大元帥となり、至上の權力を一身に集めることになつたのである。その子尼尼嚕古も亦武定軍節度使(奉聖州、保安)となり知南院樞密使事を兼ねて權力を振ふてゐた。しかし人間の

欲望には限りがない。且つ自分の力を試みて見たい弱點を持つ。その試みが道宗の淸寧九年秋七月に行はれた。重元父子の亂とは即ち之れである。時に道宗は曷里狘(金達川の初名は曷里東川なり、今の蓮花灘にして、獨石口より西北七十里、沽源縣管内なり)に納涼し秋に至つて附近なる太子山に出獵した。即ち重元はその子及び陳國王陳六、同知北院樞密使蕭胡覩等凡そ四百人と共に弩弓軍を脅嚇して之を誘致し、帝の行宮を襲ふたのである。帝も親任厚き皇太叔重元が反逆した事とて、何の備もしなかつたが五都院蕭塔剌が帝の側近く居住してゐたのを幸に早速彼を召して、兵を集めさせ、南院樞密使許王仁先、北院樞密趙王耶律乙辛等と共に衞士數千人を率ゐて之を禦いだ。泥魯古奮戰して、馬を躍らし突出し、行宮に迫らんとしたが近侍渤海阿厮護衞蘇の爲めに射殺された。重元も亦敗れて大漠に逃遁し遂に自殺してしまつたといふ。(五部院は北府に隸して南境に鎭すと見ゆ)眞宗は逆賊を平定したのを大いに嬉んで厚く將士を勞し、且つ重元の味方と覺しいものは悉く之を誅して其禍根を殲滅してしまつた。しかし禍根を絕たふとしてあまりに神經過敏に流れ、或るときは無辜の者まで一時の怒にまかせて殺して

しまつたりしたのは、末世の天子として止むを得ない處置と云ふて置かう。しかし道宗の過敏な、神經を刺擊したのは之ればかりではない。東方金人の壓迫が加はるにつれて、耶律伊遜の如き姦人が跋扈する隙は益多くなり、國內は次第に其統一を缺いて行つたのである。其姦人耶律伊遜の誣告に苦しんだ人々のうちに昭懷太子がある。昭懷太子は道宗の長子、太康元年にはすでに總領國政として政權を握り兼ねて知北南樞密院事として軍政を統領してゐた。時に伊遜は太子太傅となつて勢中外に震ひ盛に饋賂を收めて專權を行ふてゐたので太子が朝政を總覽することは彼にとつて相當の打擊とならざるを得ぬ。依つて彼は先づ道宗を籠絡して以て彼の貪欲を行はしむに如かずとなし、悪計を盡して皇后を誣告し太子の最大なる味方皇后を失はせる事を謀つた。皇后は卽ち太子の母であつて頗る美人なる上に詩歌、音樂等巧な方で、ことに琵琶に於ては尤も其の得意とするところであつた。從つて道宗の寵は頗る厚かつたが、音樂を好むので自然伶官を近けることになつてゐた。これが伊遜のつけ所である。しかも伶官のうちでも趙惟一といふ者のみが左右に侍することが出來たのは皇后にとつて大なる不

幸であつた。伊遜は仍ち巧に皇后と趙惟一との私通を揑造して道宗に誣告したからたまらない。惟一の一家は盡く誅せられ皇后も亦自盡しなければならなくなつた。母皇后の死は太子の憂色を増し、同時に伊遜に對する猜疑も加つて行つた。伊遜も流石に不安ならざるを得ぬ。不安はやがて性急に變り、護衞蕭和克と會して太子を害せんと謀つた。しかしそれは遂に發覺して伊遜は捕られて獄に投ぜられてしまつた。獄に投ぜられても副點檢蕭錫沙、同知樞密院事蕭特爾特等同志の士と共に報復を謀つて止まなかつた。すでにして彼は出獄して太康二年冬十月には再び北院樞密使に任ぜられた。末世は概ねこんな者である。此に於て伊遜の惡辣は愈々露骨を極め、遂に道宗の心を捕へて巧に太子を誣告し、捕へて彼を上京に囚閉し、尋いで之を殺してしまつた。時に太子は年二十歳であつたといふ。上京留守蕭塔坦をして病氣死亡と報せしめた。道宗流石に之を哀とし有司をして龍門山（宣化赤城縣）に葬らしめ、且つ其妃を召さうとした。太子妃を召されては太子を殺したことが現はれるので伊遜は急に人をして之までも殺してしまつた。

のみならず、太子が股肱の臣なる宿直官德哷里、北院宣徽使耶律托卜嘉及び其弟辰賚、同知漢人行官都部署蕭托卜嘉、始平軍節度使薩剌、上京留守蘇色、護衛薩巴、東京留守同知耶律和勒博等は皆殺され、伊遜の勢力は次第に加つて行つた。

太康五年の春正月帝出獵せんとし、皇孫は之を帝都に止めようとした。その時、同知默檢蕭兀納が諫めて曰く「皇孫はまだ幼く、且つ左右も無人である。願くば臣留つて保護をしたい」と。彼の言の中より道宗は伊遜の惡心を懷くことを愈々見て取つた。しかも伊遜の扈從官が甚だ多かつたので帝は益々之を惡み遂に伊遜の王爵を削つて混同郡王にしてしまつた。同時に郡王に改封せられた者が少くない。しかるに七年の冬十一月伊遜が禁制品を外國に鬻いでゐたことが發覺したので帝は直ちに詔して彼を捕へ、來州(奉天)に囚閉したが九年十月に彼は如何なる手段を用ゐてか叛を謀つて對抗の氣勢を示し、その敗亡するに當つて宋に逃げた。宋に於ても彼が報復の念は止まなかつたと見ゐて私に兵甲を藏してゐたが事覺はれて遂に誅されてしまつた。

乾統二年春三月天祚帝は伊遜の徒黨を誅することを詔し、先づ伊遜の冢を發掘し

て死屍を斬り各家族に其の片肉を賜つて、彼等の死を宣告した。その同黨と目された者は、北府宰相にして陳國公に封ぜられた漢人張孝傑を始めとし、僅かの縁故をたよりとしてまで悉く之を族誅してしまつたといふ。斯くして伊遜の黨はあとかたもなく亡びてしまつた。

# 第二節　金國と察哈爾

## 第一　建國と遼の滅亡　附西遼及和勒博の亂

金が黑水（黑龍江）白山（長白山）一帶に居住して遼の配下として滿足してゐた微々たる時代に就ては、詳述する必要はあるまい、只遼の爲に屢々反亂を鎭定した功によつて節度使を拜した、金人の所謂都太師は始祖諱の六代の孫であつて、遼の聖宗の太平元年辛酉に生れたのである、そして其第二子和哩布、第四子頗拉淑、第五子額魯温等相繼いで節度使の職を襲ひ、就中頗拉淑の如きは遼の國相として、その政事人情に通じてゐたことが仲々に有名であつた、國相となるだけの地盤も亦次第に大に且つ固くなりつゝあつたことは申すまでもない。そして額魯温の兄和卓の子薩哈も亦、遼の一國相として遼東鎭撫の爲に大功を建てゝ衰退に傾きつゝある遼國の威名を藉りて著々自分の歩武を進めて行つた、同時に遼國の歷史は次第に其末葉に近くのである。

遼の末帝たる天祚帝の乾統二年である。國舅蕭哈里が遼に叛を謀つて成らず、遼東に逃入して來た。阿蘇即ち甲兵千餘を募集して遼兵と共に混同水(松花江)に出動して哈里を攻めたが勝算がない。此れは皆友軍たる遼兵の貧弱な爲であると覺つた阿蘇は、單獨で哈里の軍に突進し、遂に彼を擒にした。此の時からして遼兵の恐るに足らないことが金人の頭に浸み込んでしまつた。事實上混同江一帶の權威であつた女直は於是裏書せられたことになる。子の烏雅舒を經てその弟の阿骨打が立つに至るまで、勢力は東高麗から次第に西進しつゝあつた。此阿骨打こそ、所謂金の太祖たる人で兄を襲ふて節度使となつたのが天祚帝の天慶三年冬十月である。天性の英資に、幼時から實戰の功を積んでゐるから、遼を覆す勝算はすでに此時からあつた。加るに遼主天祚は淫酗、獵を好んで、四方の奏事も多く顧ない樣な狀態である。阿骨打が要衝の地に城塞を築き、戎器の製造に心を用ゐ出したのは決して無理ではない。遼も亦之を知りながら如何ともすることが出來なかつたのである。

併し遼は末葉とは云ひながら、大國宋を對手として之に下ることを敢てしなかつたその見識を以て內國の亂に手も出ないとは云ひ得ない。そこで統軍蕭托卜嘉を

遣して、兵を率ゐて甯江州(吉林附近)に駐せしめた、卽ち暗に金を制せんとしたのである。茲に戰は當然起らねばならぬ、そしてその戰は太祖の勝となつた。金國の礎の第一石は此の時に於て固く布設されたのである。この礎の上に立つて太祖は鐵驪或は渤海を召諭し、その他附近の諸部を降し、遂に天慶五年春正月を以て羣臣を集めて皇帝を稱し年號を收國と改め國を大金と號した。そして翌年天祚帝が親征軍三萬の精兵を擊破して之を長春(科爾沁左翼前旗)に追ふてからは諸部の投降するもの次第に多く、勢は遂に渤海、遼陽等五十四州をも倂呑して、遼の賦稅法を廢止して金制なる謀克、明安を置くにまで立ち至つたのである(三百戸を一謀克とし て十謀克を一明安とす)

遼の天慶八年金は年號を天輔と改められ、西進の歩は、東京道(遼陽)附近の鎭定と相倂んで著々として休むところを知らなかつた。卽ち泰州(遼の長春路)を下したのを手始めに顯州(廣寗)乾、懿、川、豪(今の廣甯縣境にある)の諸州から成、川、惠(喀喇沁右翼義州の北)の三州を席卷し、一時遼の請を納れて、通(農安)祺(遼の豪州)雙(鐵嶺の西)遼(東平府卽ち鐵嶺の北)の四州を領することを約し、一時兵を息めたが、しかし滅ぶるも

のは遂に滅びねばならぬ。越ゑて四年四月帝遂遼親征軍を起して、遼使實納埒を從へ、上京(臨潢)に向ひ、翌月留守托卜嘉を降し、副統伊都を召致し、兵を分ちて慶州(巴林の西)に攻め寄せた。此行に就いて注意すべきことは趙使趙良嗣が帝と共に從軍したことである。

是れより先き、金は同呼慶を使者として國書を齎して、宋國に使した。その主旨が何であつたかは明でないが單に通商の爲ばかりでなかつたことは、直ちに宋と遼夾攻の約の結ばれたことから見て明である。しかし金は宋と夾攻しなければ以て中原に進入することが出來なかつた程の弱勢ではない。ましてや宋は積弱の國である、北强遼に對しては依然として師弟の禮を取り、歲幣は年年增加せねばならぬ破目にある、夾攻論を提議したのは勿論宋であらねばならぬ。宋が遼に對する多年の怨を報いて一矢を遼に加へ、出來得べくんば燕雲十六州を回復したいとは必ずしも宦官童貫が一名譽心のみではあるまい。しかも往時北敵を防がんとして村を屯とし里を砦として奮闘した河南河北の勇民も今は江南に流浪し、上には閫外の任を托すべき將軍なく徽宗は又嬉遊に溺れて日月の過ぎ行くを知らぬが如

くである。夾攻に依るの外遼軍に一矢を報ゆる方法は到底見出し得ないではないか。之に反し金は宋と同盟するもせざるも、又宋が遼を助くるも之を夾撃するもあまりに大した影響は見出し得ない。夾攻を約するに當つても、從來、宋が遼に對して行つた禮儀及銀絹を金に轉交するを誓つたのだ。どうしても勢に於て金は遼に代り、宋は舊部汴京を棄てねばならなかつたのだ。卽ち好を通じ馬を買ふを以て名と爲し、金の上京進軍と共に、宋の童貫先づ兵を率ゐて北進したが衰亡に近き遼兵の爲に白溝に破れ、劉延慶、郭藥師等再び攻めて燕山府(順天)に破られたのである(後段詳述)。しかるに一方金の軍兵は慶州を攻略して南下し遼の統軍耶律伊都を遼河(今の遼河の上流卽ち繞樂河)に降し更に中京(熱河建昌附近)に克ち進んで澤州(承德の東南)に下り、奚王哈瑪爾を北安州(承德)に敗つて其の城を降した。時の軍將は金の猛將、宗翰である。彼は其鋭鋒を休むることなく直ちに軍を西方に向け、奚部西節度使額哩埒(多倫附近に居る)の投降を納れ、使を派して大金皇帝に連捷を奏し捕獲寶物を獻上して大いに面目を施したのである。

金軍は於是か察哈爾本土に乗り込んで來た時に天輔六年春二月である、遼に於て

は天祚帝の保大二年、帝は時に南京(順天)に在つて此の事を聞き、直ちに居庸關を出でて鴛鴦濼(今の興和城の北)に出陣して之れに當らんとしたのである。北院大王耶律馬哥、攻防軍都統となり兵を屯めて迎擊を計つた。然し金の將軍宗翰が勢は遂に止まるところを知らない。遼の反將伊都を先導として彼は先づ瓢嶺(開平衞の西)に出動し、その南なる青嶺(大青山)に進軍した都統杲高思と共に南下の勢も物凄く一擊して遼主を鴛鴦濼に破り、彼の西京(大同府)に奔逃したるを追ふて白濼水(大同府北代哈泊ならん)まで進軍したが遂に及ばず、只其貨寶を捕獲して、是に暫し遼軍との對陣を企畫するのである。しかし敗殘の遼兵は西京をも長く保つことは出來なかつた、しかも羣牧使謨魯幹、殿前點檢耶律果巴等が金軍に降るありて、僅か一と月に滿たずして西京は金師の奪取するところとなり天祚帝は輕騎に乘じて夾山に遁逃した。夾山は察哈爾寧遠地方である。そして先に伊都の反逆を以て晉王の指圖なりとし、遂に晉王に死を賜らしめ、その爲に夥しく人心の解體を來した彼の蕭奉先の不忠を責めて、その子と共に之を殺し、且つ北院樞密使蕭堵喇臺を逐ふて蕭僧孝努を彼の後任とし、すべて扈從するものは吏民に論なく皆之を官吏

に任用した。何故なれば天祚帝が西京の守りを失つたとき、雲中留守蕭刺の如きまで金に降り且つ自ら將として、天祚追擊の兵を進める如き有樣だつたからである。然るに一方南京に於ては、天祚帝が察哈爾に出動して以來、宰相李處温、燕王耶律淳と共に燕山府(順天府)の守備に任じ、兵を督して宋師の進攻を擊退し、容易に下るべくも見ねなかつた。しかも燕王耶律淳は二十年間燕山府の長官として內治上の功績が多かつたので、人民の評判が仲々宜かつた。恰も天祚帝は戰敗れ、西京さへも金軍の手に歸してしまつたので、李處温は其弟處能及都統蕭幹等と共に怨軍を挾んで獨立を計畫し、淳をその皇帝とせんと謀つた。耶律淳是に於て燕京數萬人の勸進に從ひ、卽位を行ひ、自ら天錫皇帝を稱し怨軍を改めて常勝軍と爲し年號を建福と改めた。そして天祚帝は位を低下して湘陰王と爲し、沙漠以北の諸蕃部を彼の裁下として、自分は燕、雲、平(直隸盧龍)三州、上中二京及遼西の六路を有することを宣言した。卽ち金はこの時から二分してしまつたのである。

察哈爾の高原にあつて遼師の勢を二分した金の諸將は西京なる遼の殘黨の旗上げを一擊して都統杲自ら白水濼に出陣し、別軍温貝勒昱は北方に遁逃した遼兵を

追ふて皮室部を襲ひ、敵軍と鐵里川に遭遇して敗戰してしまつた。然るに、金軍がその軍を還すに當り札拉兵と會し、追ふて黃水(潢河)に至り大いに之を敗るとあるから、皮室部や鐵里川の所在地は多倫の北方、克什克騰旗內であらう、温貝勒昱は軍を旺國崖(獨石口外)に還したとある。

而て、耶律坦は又西南諸部の招徠に任じ、西進して夏の領土に入りその節度使耶律佛德を金肅(東勝の東北)に降し、更に漢軍四千餘人の謀反を誅して遂に、天德(歸化城)雲內(大同)寧邊(河曲の北方關河畔)東勝等の諸州を招撫した、併し、遼主天祚帝は今尙陰山(烏喇特旗)を保ち、都統瑪格を知北院樞密使事と爲し散亡した兵を集收して、北部瑪克實の來援兵と合して、軍を進めて來た、それに招降したとは云ふもののまだ人心は遼を離れてゐない樣子なので、都統杲高恩は昱宗望を使して金帝に出陣を乞ふこととなつた。帝卽ち之を許し六月上京臨黃府を發輦して秋八月鴛鴦濼に至つた。都統杲官屬を引率して來り、迎へ直ちに軍を共にして遼主を大魚濼(察哈爾陶林縣と興和縣との界にある湖ならん)に追及し、更に昱宗望をして遼軍を石輦驛(大同の西北邊外とあるも涼城地方ならん)に擊破せしめ都統騸馬蕭規を生擒にし

た。天祚帝は此の戰に於て親しく軍を督してゐたが遂に數騎を具したのみで身を以て遁るゝの非運に再會したのである。是に於て金の太祖は軍を還して西翼察哈爾から今の山西省に入り節度使耶律愼思の降を納れて沿道の諸郡縣を招撫しつゝ今の宣化府に入り歸化州(宣化)奉聖州(保安)を下りて十月奉聖州に駐蹕した、そして蔚州(口北道蔚縣)の降將翟昭彥、田慶等を皆刺史に任命した。

此時に當り燕京に於ては、夾攻の約に從つて來襲せる宋の童貫、蔡攸の軍十五萬の大軍を迎へ擊ち、守將耶律達實、蕭幹、先づ總東路の兵を白溝(國境)に破り、更に總西路の兵を范村(安肅附邊)に退けて彼等を雄州に追ひ込んだ、雄州は白溝の僅か南である、そして童貫は高陽(今の高陽附邊)まで出動してゐたと云ふ。斯かる國境に近いところに大軍を留められては、背後に金の强兵を控へてゐる燕京に取つて、たとひ勝つたと云ひ甚だ危いことであらねばならぬ。加ふるに皇帝耶律淳の死去に會ふたりしたので、使を宋軍に派して「一時の利を獲んが爲に百年の好を棄つるの不利益」なるを說かしめたが宣徽使童貫、頑として聽き入れなかつたので上將軍郭藥師は止むなく、涿、易二州を宋に與へて降つてしまつた。尋いて藥師は宋兵六千を

郷道して劉延慶と共に、燕京に迫つたが蕭幹の爲に良郷に大敗して歸つた。しかし、燕京の運命は最早旦夕に迫つてゐる。それを見て取つた金軍は、宋に使を遣して、燕山の地の割讓を提議して來た。始めの約束では、金は、只石晉の故地(山西北部)を獲ればそれで足りる譯だつたのに、南京道の東方なる平、營、灤(共に灤河附邊)三州をも、劉仁恭が契丹に遣して行つた土地であるからと云ふので、宋に與ふことを肯じなかつた。そこで宋は直ちに趙良嗣を奉聖州に派遣して談判させたが、金は、宋が兵を遣はすのが遲かつたと云ふて聞かず、遂に山前、山後十六州を與ふる以前の約は放棄して、燕京六州二十四縣に限られることとなつたのである。六州とは燕(昌平)檀(密雲)景(遵化)順、涿、易である。童貫も之れでは甚だ面目を失ふので、先づ、金に忠勤振りを示して、營平灤三州だけでも取らうと、道を三分して兵を進めた。

一方金軍は、太祖親しく兵を督し、宗望に兵七千を與へて先鋒として進軍を開始した。燕主蕭后(耶律淳の妻)金の爲に藩部たらんことを約して和を請ふたが許さず、都古嚕納は得勝口(沿河口)から、尼楚赫は居庸關から出動し、羅索を左翼と爲し、博勒和は右翼となり、その陣容、とても敵すべくも見ゑなかつたので遼の統軍都監高陸

は、居庸の守りを棄てて降參してしまつた。此の由を聞いて蕭后は、蕭幹等と共に燕京を遁出し、古北口を出で、西行し天德軍(歸化城)に至り天祚帝に見えた。しかし天祚帝は之を殺して悉く其屬籍を除き庶人に下したといふ。だから金兵が城に至つたときには、知樞密院左企弓虞仲文、樞密使曹勇義、副使張彥忠、參政康公弼、僉書劉彥宗等、表を奉じて百官と共に、その軍門に降つて來たのである。金帝も之を詔釋して、且つ企弓等の燕京諸州縣の撫定を命じた。

燕京既に降り、蕭后、蕭幹等悉く陣亡してしまつたので燕京以東にある金軍は孤立無援の形となつた。興中府(朝陽)の投降を最先に來、濕の遼西諸州及平州(盧龍)遷州(撫寧)潤州(山海關附邊)等續續金に降つたのは止むを得ない。斯くして察哈爾以東の山河には遼兵の影は見えなくなつてしまつた。

然し、納まらぬのは宋である。燕雲十六州を得ればこそ、對金軍の防備は比較的安固なるを得るけれども、單に燕京六州のみを以てしては、殆んど三方金軍に包圍せられに形になるので、到底宋の弱勢を以てしては、對抗しきれない。從て外交關係に於ても常に不利の地位に立たねばならぬ。由來燕雲の地には、居庸關、金坡關、古

北口、松亭關、楡關等の險要があつて滿蒙と劃然たる境界を形成してゐるのだが、そのうち平、營(昌黎)灤三州が金の土地であるとすれば東方の守は全然缺如することになる。しかも金は常勝の威勢隆隆たるものであるから、之と戰ふことは到底今の宋としては出來ない相談である。のみならず、燕京の守の危いことは、直ちに國都汴京の危急となる憂がある。故を以て宋は再度、趙良嗣を燕京に使して、歲幣を增すことを約せしめ、且つ榷場(商場)を置いて物品の交易を獎勵するなど、ひたすらに、金の機嫌を取ることに腐心しなければならなかつた。或は又燕京六州さへも與へられぬ事になるかも知れぬ憂さへあつたからである。燕京六州を與へないことは、やがて金軍の南下することを豫想の中に置かねばならぬのだ。

併し金は、その約を違へはしなかつた。即ち尼楚赫道拉が使者として正式に燕京六州を宋の爲に分割して與へることを提議して來たのである。そして金は平州を改めて南京と爲し張覺なるものをその留守に任じた、張覺は遼の興州(熱河)節度副使であつたが金に來降したものである。

間もなく宋からは盧益、趙良嗣、馬宏等が使者として國書を持つて來て、燕京六州の

授受を了したのである。そして燕京に滯留してゐた遼軍の殘部や、その他遼と關係あると見て取つたすべての富豪、市民を松亭關外に追ひ拂ひ、且つ左企弓等の將士をも北徙すべく餘義なくした。

然るに南京留守張覺は部下の一兵をも血ぬらさずして、依然たる軍力を有してゐたのに今や、又南京留守なる地位を得て、燕東の山地に盤居し始めた。此地は曾つて唐の安祿山の根據地であつたのだ。

遂に張覺は反抗した、時に太祖の天輔七年五月、兵五萬を率ゐて潤州に屯し、遷、來、潤、溼、四州を脅さんとした。南路軍師棟摩、時に錦州に在り、卽ち兵を率ゐて之が討伐に從ひ先づ營州(昌黎)に一擊して之を破り、勝に乘じて南京に攻め寄せた。しかるに夏の事であるから暑氣甚だしく且つ霪雨止まず、金兵は進退共に決し兼ねて遂に南京攻入の機を失してしまつた。のみならず、反つて兔耳山(撫寧の西七支里)の戰に張覺の爲に一敗地に塗れて退却してしまつた。於是張覺は宋軍に投ぜんとし兔耳山の大勝を燕京に報じた。金に對して多大の恐怖は感じながらも宋としては先づ思ふ壺であらねばならぬ。卽ち宋は直ちに平州(南京)を以て泰寧軍と爲

し、張覺をその節度使に任じ、且つ銀絹數萬を以て之を犒つたりした。しかし張覺の兵は元より多くはない、只一時の勢に駈られた反抗であるので、再び軍を整へて來襲した楝摩の兵が急擊に會ふて泰寧軍節都使は僅か一朝の迷夢と化してしまつた。

斯かる間に金の太祖阿骨打の死に會ふて、金軍はしばしその兵を收めてゐたが數月ならずして次の太宗は宗望に命じて改めて楝摩の罪を問ふと稱し、廣寧(今の北鎭縣)を發して瀕海諸郡縣に下り、遂に張覺を南京城東に迫擊して大いに之を破り、覺は燕京なる宋師王安中の許に逃れてしまつた。

依て宗望は叛亂の責任を宋に負はしめて王安中を斬首せんことを宣したので、恐れたのは安中ばかりでなく市民も亦張覺及その父子を捕へて金の軍中に獻じた、そして張忠嗣や張敦固も投降して來たが張敦固は燕京城に入つて再び叛を謀つた。しかし宗望は之を許し、且つ詔して宋の爲に武州(宣化)朔州(山西の朔)を割讓することにした、察するに張覺の徒には金も相當手こずつたと見ゐる。

於是吾吾は再び眼を轉じて雲內に逃れた遼の天祥帝の跡を追はねばならぬ。

石輩驛に於て、金將宗望の爲に無殘の敗を受けた天祥帝は、陰山のほとりに(四子部落)その餘命を養つてゐたが、燕京の落城と共に宗望の兵は再び行動を始め、陰山の行宮を襲ふて遼主を追ひ、六院司喀勒札は白灤水(代洽泊)に於て捕へられ、遼室の室族たる秦王許王等十五人と共に金の軍門に降つてしまつた。そして遼主の輜重が青塚(王昭君の墓のある處であると云ふ。王昭君の墓は歸化城の南二〇支里の平原中にある)に留つてゐることを聞知して金軍は兵萬人を以て應州(大同の南)に出動し卓哩布達、宗望、羅索尼楚赫等共に道を西方に取り、進擊し青塚を包圍し、大に遼の殘軍を破り、天祥帝の長子趙王實泥烈は捕へられ、國璽も金軍の手に奪はれてしまつた。遼相塞雅里は天祥帝の身邊を危み、危急を逃れんとして太保特默格と共に敵陣を逃れ出たが、その時天祥帝の第二子なる梁王雅里なる者を伴つた、特默格は此の梁王の太保であるのだ。梁王時は齡七歲であつたと云ふ。扈從するもの千餘人、道を西方に取つて夏國に走らんとしたが隊師耶律迪里等に劫かされて果さず、北に走つて沙嶺(多分大青山ならん)に至つた、時に太保特默格等再び帝にせまつて梁王をして帝位を繼がしめたのである。然し金軍の追擊は益々甚だしく

天祥帝は遂に捕へられ梁王は北、松漠に逃げてしまつた。松漠に逃げた梁王は、此處に遼國の名殘りを集めて、年號さへも神歷と改め、迪里を樞密使に任じ、特默格を之が副とし、且つ唐の貞觀の政要を取つて銳意政事の刷新、勢力の助長を計つた。そして次第に附近の諸部を招致し、服せざるものは誅して稍勢の伸長を見たが、梁王は由來剛愎、荒怠で、出獵のみを事とする有樣だつたので遼國の再興は思ひも寄らなかつた。

斯くて遼國は松漠の奥地に細い餘命を貪つてゐたが、梁帝は年三十にして病の爲に斃れ、耶律珠拉なるもの繼いで立つたが、內亂の爲に敗れ、有耶無耶の中に遼國の末路は消ゐてしまつた。何んでも、梁王は餘程獵が上手だつたと見ゐて、扎拉山とかに獵したときは一日に黃羊(野生の山羊)四、狼二十一を射たと云ふ。

元來松漠とは遼河の上流、熱河管內のことであるのだが此處で云ふ松漠は大漠卽ち綏遠、察哈爾の北部を繞る砂漠地帶の事であらう。何故なれば、熱河はすでに金領であるのみならず、歸化城から北走すれば四子部落又はその東北部に至らねば遊牧地帶には入らぬからである。扎拉山の位置は到底譯らない。

又燕京に於て、屢屢宋を敗つた遼將耶律達石が燕京落城の際蕭后と共に逃れ出で、單身部下を率ゐて西方に走つたことも書き加へねばならぬ。彼は先づ可敦城(新疆迪化府)に至らんとし、大漠を渡つて巧にその行跡を晦ましつつ金軍の追擊を逃れ、遂に回鶻(回紇)に至り、その王必里克を瞞着して、兵甲財物を得、更に塔什罕(西藏)に至らんとし西域諸國の聯合軍に會ふて大いに之を破り、遂に迪化にあつて皇帝を稱し、國を西遼と號することになつた。西遼の事に就いては之れ以上の事を記する必要があるまい、只地があまり遠隔であるので金との交渉は最早見られぬことになつたことを記憶すれば宜い、金と接觸のないことは今後の察哈爾史には何等の干係ももたらさないからである。何故なれば時に金の領土は、西はすでに西夏(甘肅の北)に接し東勝を包んで黃河を渝ゐ臨洮府(甘肅蘭山道岷縣)にまで及んでゐたのである。

斯くの如く遼の殘兵は四方に散亂し、天祥帝は捕へられて京師に送られ、降下して海濱王(遼西の寧遠)に封じられ、遼西の一小縣に金の助けによつて身の安全を期することとなつたのである。時に太宗の保大三年冬十一月、阿保機帝を稱してより

九世二百十年である。(金は天輔七年七月に年號を保大と改めた)此年の春二月に奚王和勒博が察哈爾撫州(興和故城)の東北百支里なる箭笴山に據つて反旗を擧げたことを忘れてはならぬ。和勒博は遼の知北樞密院事で金に投降した者なのである。彼は僭に奚國皇帝を稱して年號を建て、天復とし、奚、漢、渤海の三樞密院を設けたりした。そして金の都統瑪格を殺してから次第に頭を擡げ殊に同族巴扎の如きは盛に附邊の部落を刧奪して民心を騷がした。しかしそれも長くは續かず郭藥師の爲に敗られ、一軍離心して散亡してしまつた。僞立僅に八箇月である。

## 第二　その後の金と察哈爾

その後の金史を綴る前に先づ金領としての察哈爾の地位を考へて見やう。此の時代に於ける金國の領土は上京路(阿城の南、伯都訥の東北)卽ち滿洲と、中京路卽ち熱河建昌附邊と、大同府に置かられた西京路との三つに分れる。そして我が察哈爾は一半は中京路に屬し殘りの一半は西京路に屬してゐたのだ。中京路に

屬する部分は桓州威遠軍節度使と撫州鎭寧軍節度使の管下となつてゐる。桓州は今の多倫縣の西方八〇支里なる四郎城附邊で舊開平の地である。時の縣を淸塞と云ひ南は今の沽源縣、寶昌設治局の治下にまで及び北は今の多倫縣を以て終りとしたらしい。當時獨石口外は曷里滸東川と稱してゐた。そしてその威遠軍は西北路招討司に隷してゐたのである。次に撫州は今の張北縣廳の所在地なる興和城で張家口の西北九〇支里の地にある。鎭寧軍はやはり西北路招討使に隷してゐたが、尙此招討使所管の梅堅必剌王、敦必剌拏憐、木花速宗葛、斜忒渾の四猛安を發して鎭寧軍節度使に隷せしめてゐた。故を以てその管下の縣は柔遠、集寧、豐利及威寧の四となる。柔遠は撫州に置かれ宣德州(宣化府)の管下となつてゐたこともある。集寧縣は撫州の西北なる今の商都縣地方で北界に至る三百七十里と見ゐるが多分、錫林鄂爾盟旗に至る距離であらう。又豐利縣は撫州の北なる泥濼、卽ち鴛鴦濼に置かれてあつた。そして威寧縣は察哈爾右翼正紅旗にあつたと云ふから今の陶林縣(科布爾)であると見て大差なからうと思ふ。之等北部の諸縣はすべて猛安の領地である、此の威寧縣の置かれたところを新城鎭と云ふ。以上の

諸縣の外、今の豐鎭、興和、凉城三縣の地が殘つてゐる。此の地方は卽ち西京路に屬する部分で凉城縣(寧遠)には宮民縣が置かれてあつたが、豐鎭、興和二縣の分は大同(と、天成(天鎭)との管下になつてゐる。尙、歸化城は豐州天德軍の地で管下に東勝州今の托克托河口)がある、共に西京路(州五、縣二〇)に屬してゐたことは云ふまでもない。

金は始め城郭なく、すべて野營の形であつたが太祖はその末年に、皇帝寨、國相塞及太子寨等を築造して野戰時代の蠻風を除き始めた。又制度の如きも、始めは官號がなく、唯其部長を孛勒(貝勒)と云ひ數部を總轄する者を忽魯と稱するのみであつた。そして國中の壯者は皆兵士で、平日は射漁佃獵を習ひ、事あれば命令一下直ちに徵兵されるのである。その兵隊は百人を一隊とし、その長を謀克と云ひ、謀克十人を合して之を猛安と名付けてゐた。謀克の副は之を蒲里衍と云ひ士卒の副を阿里喜と云ふてゐた。後三百戸を一謀克に改めたけれども、諸部落の投降するものを皆各々の猛安に領せしめたので、その數は皆規定より多い。尙猛安の上には軍師があり、軍師の上には萬戸を置き、萬戸の上には又都統を置いてその兵を統べ

しめた。燕山府に進入するに及んで漢人等は謀克猛安の名を喜ばないことを知り、遼の制に倣つて樞密院を置き漢軍を統率させた。是れから官號は多く漢制に從ひ、謀克、猛安の名は只東北、西北、西南の三路招討司の下に施すのみとなつた。招討使も亦遼の制を倣つたもので西北路招討司は桓州(舊開平)にあつて西北諸蕃を桿禦し西南征討使は西夏に對せしめた。且つ、招討司署には招討司一人、副使二人、降付するものを招撫し、離反するものを征討することを掌り、その猛安は軍務を整理し、武藝を練訓し農桑を勸課し盜賊を制禦する等、內治の事までも掌つてゐた。謀克は又猛安の下にあつて軍戶の撫輯から一般內治を掌る外、司法及警察を引き受けてゐた。

以上の外三路の部族を以て編成した糺軍なるものがあつた。そのうち西北路に屬してゐたものは速木典糺、耶剌都糺、骨典糺、唐古糺、霞馬糺、木典糺、萠骨糺、咩糺、胡都糺等があり、各糺軍に詳穩麼忽等があつて邊堡の守戍に任じてゐた。

以上の制度のうち後年に至つて屢屢改廢されたもの又は名稱を代へたものがあるけれども、その分課の程度は大體に於て變りはない。例へば桓州威遠軍及撫州

鎭寧軍が刺史に改められた如き者である。

尙之等は大抵太祖の末年に制定を終つたものであるが、太祖は又、自らも、內治の重要なるを感じて、屢々懷撫の詔勅を下して、民心の安定を願つた。遼末年の亂爭から金遼の決戰と、引繼いて察哈爾の地は戰區となり、愈く遼の滅亡を見たと思へば獨石口外に散住した例の奚の諸部落が騷ぎ出し(和勒博の亂)たりしたので、民心は恟々として定まらず、從て農桑の如き悉く廢されてしまう樣な有樣であつた。のみならず、兵隊共が、戰時の常として放縱、規なく、人民を掠奪して橫行してゐるので貧困の者が次第に多きを加へた。それに戰時中は各交通路の諸關津は悉く往來を絕つ等、慘めな狀態になつてゐたのである。依て太祖帝は先づ農事から振興させ樣として諸州部落に官を分遣して軍兵を戒め、且つ、戰亂の爲に逃亡した人民を再び舊地に戾す爲に、騷動を監守させると共に、貧困なるものの救恤を行はしめた。そして往來の關津を開放して、自由通行にまかせ、特に咸平、東京(遼陽)地方へは商賈の往來を奬勵し、尙都統杲の進言に依り新附の民で材能のある者は、之を錄用することにし、且つ大赦の令を發して自今金の部屬として安住するものは以前の罪を

悉く赦してやつた。又軍事統率に就いてもその統一を劃し自今軍事に就ては殘りなく各路詔討使に申告せしめ、各路の事務は都統之を統べ、其餘の民事外交はすべて樞密院に於て決せしめた。

斯くて太祖は天輔七年四月儒州(延慶、口北道居庸關附邊)に次し、次いで野狐嶺(撫州の西南)に至り翌月落黎濼に巡幸した。落黎濼は、萬全縣新河口の口外四〇支里にある甜水海子であらう。此地は野狐嶺の西北六〇支里である。此地に於て太祖は、奚路の都統撻蘭をして蘇庫、卓琳、鐵尼等の諸部を攻略して彼の和勒博の殘黨を平らげ猛安、謀克を置いて之を領せしめた。又奚の馬和尚をして薩必、達魯噶、幷に五院司の諸部を攻めしめその節度伊里を執へ、之を以て察哈爾の地は一段落を告げたので、先づ上京なる臨潢府に歸らんとした、(臨潢府は軍州二十五、縣十を統べてゐた)そして宗翰を都統に命じ、温貝勒昱德、特貝勒斡魯には兵を授けて雲中に駐せしめ以て邊防に備へた。自分は直ちに行を起して鴛鴦濼に次し東北行して渾河(濡水のことでなければならぬ)を渡り、布圖濼に至り遂に病の爲に崩ず、今其布圖濼に就いては考證がない。上京に行く途中であるから多倫附邊又はその北方の湖

であらう。此行に於て太祖は燕京から麗色光美娟秀なる婦人二、三千人を率きつれ酣歌、宴樂惟もう聲色の娯にばかり耽つてゐたと云ふ。その爲に形神すでに病の如く、未だ幾くならずして死んだのだと云ふがそれは漢人の皮肉であらう。

次いで帝位に卽いた太宗は、本名を烏奇邁と云ひ、世祖の第四子で、太祖とは兄弟の仲である。彼れは先づ年號を天會と改め且つ太祖が諸方に出陣してゐるときに常に留守を承り、あまり戰爭には經驗がないので、對遼の戰鬪は、すべて西南、西北兩路都統宗翰に命じ便宜事に從はしめ、古倫貝勒杲を安班貝勒に昇せ古倫貝勒には宗幹を以て之に補任した。そして遼の諸陵を發掘して金屬を盜み出すものがあるので嚴重に之が取締を命じ、太祖の馬蹄の跡を追ふてその民を招撫し、天祚帝の捕獲に次いで西北、西南西路に於ける亂黨を鎭定してからは、鋭意南侵を志し豐饒の原野に英氣漲る馬首を向け出したのは蓋し止むを得ぬ。金が歲幣四十萬の增加と外に燕に於ける租稅として錢一百萬緡を送ることを約しめて漸く與へた燕京六州の地を宋が永久に自己の所領であると自惚れるのは、自惚れる者を嘲笑ふよりは、自惚れざるを得なかつた宋朝の亂胍を悲しまざるを得ぬ。小人朝に上り、

有爲の士はすべて野に隱れ、各々私腹のみをなですりて責任を他に轉嫁せんとする如き有樣である。燕京六州の地は間もなく奪回され、大都汴京までが金軍の横行にまかせねばならぬ事を切實に考へる人があつたならば到底野に隱るるより外に道はないのである。金としても亦强國遼を無殘に擊破した實力を有し且つ遼と同じく北方に武を練つた軍兵を以てして遼の全圖さへも取り得ないとは不合理である。のみならず燕京は、夾攻の約があつたにも拘らず、宋軍は常に敗北の有樣で、事實上金の軍兵を以てして始めて落城せしむる事を得たものである。歲幣の如きは遼と雖も之れを受けてゐた。塞外の民に取つて唯一最大の正義は强いことである。戰に勝つことである。弱勢宋が豐饒の野を、しかく廣大なる野を占領してゐることは甚だその意を得ぬ。その間に遼國が介在してゐればこそ宋の泣き言も聞ききもしやうが今遼が滅びて宋と兩兩相對峙した場合、最早や弱い者は苛められるより外に仕方があるまい。果せる哉太宗は、天會三年冬十月諸將を會して侵宋の議を決し、安班貝勒杲を以て都元帥を兼領せしめ、伊拉齊貝勒宗翰を之

が副とし、希尹、伊都の二人を元帥に任じて總司令部を組織し、外に右都監は西京より南下して太原に入ることとし、六部路軍師達蘭は六部都統となり、斜音之に副となり、宗望は又南京路都統となり、棟摩を以て之が副とし知樞密院事劉彥宗は漢軍都統を兼ねて共に南京(平州)より燕山に入らしむることにした。時に宋に於ては徽宗の宣和七年、金が斯くも大げさなる征討の師を繰り出したその理由は彼の張覺を暗に助けて、之が投降を許したことにある。

以上の南下軍は、その年の十二月早くも行を起し、宗幹は右都監と共に西京路なる朔州に下り、續いて雁門の險を越ねて代州に克ち、崞・忻等の州は無人の境を行くが如く進軍し、遂に石嶺關(太原の東北五〇支里)を距てて太原城を包圍した。又伊都の軍は綏遠から朔州の西方河東に進出し、汾水の上流から天門關(太原の西北六〇支里)を距てて太原城に相對したのである。一方南京路都統宗望は、宋軍を白河に擊破して燕京に進軍し又布希なるものも古北口を守る宋兵を郤けて南下して來た。當時燕山には知燕山府として、安仲が居り、遼の降將郭樂師は同知府事となつてゐたが、金軍の進擊は愈々激しく、近郊に屯した宋兵は算を亂して敗軍し、燕京は

一とたまりもなく落城し、欒師は遂に降參してしまつた。宗望は更に兵を休めずして直ちに南下し、富堺琿の率ゐる漢兵千騎と共に盛に直隷の野を攻略して、遂に河南に進入した。放縱にして、私の爲に國政に當つてゐた朝臣は何條支ふる事が出來やう、皇帝は出奔し、諸將は議決せず、汴京は金の大軍に包圍せられて如何ともせんすべがなくなつたので遂に李棁を謝罪使として金の軍中に送り、中山(定州)河間を割讓することを提議して來た。宗望卽ち之を許し以上の外に人質を納れしめ且つ中山河間太原三鎭の地と金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬一萬頭、表段百萬匹を贈ることを約せしめた。そして金に對しては伯父の禮を取り、康王構を質とし誓書を差入れた。しかし宗望は敢て汴京の圍みを解かふとしない。逃亡した徽崇はすでに皇位を太子桓に讓り、自分は道君皇帝と稱してゐたのである。太子桓は卽ち欽宗皇帝である。時に主戰論者たる宋將姚平仲は突如、暗に乘じて宗望の營を襲ひ之を敗つたがそれも一時、宗望は再び師を還して汴京を圍んでしまつた。一方太原の守りは如何、金の大軍が四方からひしひしと之を攻めるけれども天險よつて之を防で降らない。依て宗翰は尼楚赫を太原に當らしめて自らは南下し

威勝軍(時に銅鞮縣と云ひ今の沁縣である)を定め更に隆德府(潞安)より澤州にまで至つたが宋軍の逆襲に會ひ遂に威勝軍を棄てて歸らねばならなかつた。彼は此時西京まで歸つたといふ。宋軍は又南北關(靈石縣八〇支里にありと見ゐるが多分馬陵關の事であらう)を扼して金軍の南下を防いだ。しかるに金將耿守忠は宋人を西都谷(交城縣)に破り再度南北關にせまつて來たが、宋の仲師中なるもの井陘(直隸正定の西)を出でて山西に入り遂に楡次に至つて戰陣を張つた。楡次は太原府の東南六〇支里にある。しかしそれも完顏和尼、托克索等の爲に殺熊嶺(文水縣の西六〇支里)に破られ、師中は戰死してしまつた。その後宋軍は一時潞州に於て大いに金軍を破つたことがあるけれども、金軍は再び軍を整理して宗翰は左副元帥となり西京を發し、宗望は右副元帥を授けられて保州(保定)から新に軍を起すに會し、宋の張灝の兵十萬は汾州に敗れ、劉臻は壽陽(太原の東一二〇支里)に破れ、さしもに堅城を誇つてゐた太原も次いで陷り經略使孝純は捕へられてしまつた。それからは、井陘關の險要が破れたのを手始めに汾水沿域の諸城から東は遼州までも金軍に奪はれ、威勝軍の擊破は遂に天井關(澤州の南四五支里河南との界にあり)の

守りを失はしめ遂に黄河を渡つて、汴京に進擊し、山東、河南の野に破竹の勢を持して盛に宋軍を擊破した。宗望の軍と力を合して天慶四年冬十二月遂に汴京を陷れた、太宗が南侵の計を定めてから僅一年有月、文化を誇つた華美の都は金人の馬蹄の下に見る影もなくなつてしまつた。宗翰、宗望等の大軍は翌四年軍を還して北に歸つたといふ。直隸、山西及河南の平野が此の戰に如何に慘害を蒙つたかは、墳墓までが發掘されたのを見て察し得るだらうと思ふ。時に宋に在つては欽宗の靖康元年、欽宗及上皇は捕へられて庶人に降下され、燕京に護送された、多數の美姬及寶物も共に殘りなく奪はれてしまつた。そして金帝の詔勅により張邦昌なるものを立てて楚帝となし汴京に駐せしめた。張邦昌は宋の少宰で汴京包圍の際質となつて金軍に至つたものである。然し、如何に文弱に流れたとは云ひ、只一度の敗戰に大國の權威を失ひはしない。從て張邦昌の權力は單に名のみであつたことは想像するに難くない。その唯一の支持者たる宗望の軍が北歸した以上河南は最早や無政府の狀態である。間もなく歸德に於て宋帝を稱した康王構の爲に張邦昌の殺されたのは止むを得まい。しかし張邦昌は云はば金軍の手先で

ある。之が殺されて金は何條默してゐやう、殊に太宗は大いに怒つた。そして先づ捕虜とした宋の二帝を上京に送り元帥府に詔して南侵し遂に之を楊州に追ひまくつた。その後の金、宋の交戰に就いてはあまり察哈爾史とは關係がないから單に、金が中原を攻略してから遂に江蘇、浙江にまで進出し、西は隴及蜀を取り劉豫なるものを立てて汴に都せしめ、關中の地を之が管下とし、盛に南宋と交戰を重ねてゐたが遂に和議の約成り(秦檜岳飛を殺す)淮水の中流を界とし、此處に南北兩朝の分野が出來上つた。此時には既に劉豫は廢されて蜀王に封ぜられてゐるのである。

時に皇統三年春二月、太宗は八年以前卽ち天會十三年既に死んで熙宗の治下であつたのだ。熙宗は太祖の孫、豐王宗浚の子である。しかし破竹の勢を以て、一氣に江南にまで押し寄せた金軍が斯くも容易に和議の約に贊した事に就いては、宰相秦檜が智謀や猛將岳飛の勇戰があづかつて力ある事は勿論であるが、金それ自身の體內に幾多の內爭、反亂が生じた事を忘れてはならぬ。先づ金建國のときから赫赫の軍功があつた名將宗望の死を汴京落城の其年卽ち天會四年に聞かねばな

らなかつたのを始めとし、その後任たる宗輔は右副元帥となつて、宗弼と共に南方の攻略に從つてゐたが汴京なる都元師宗翰と、宋の降將徐文策の採用問題に就いて議合はざる事あり。のみならず劉豫を立てて齊帝と爲すことに就いても殆んど宗翰が獨斷で行はれ、且つ宗翰は京師の近くに居ることとて太宗の命令は殆んど宗翰の意のままに發布された者が多い。彼は先づ天會十年古倫右貝勒兼都元帥となり、太祖の孫を薦めて安班貝勒とし其の子の宗盤を右倫烏赫哩貝勒に任命したりした。そして熙宗が卽位してからは太傅領三省事となり、晉國王に封ぜられ、軍國の事一として宗翰の手を經ないものはない有樣であつた。然し宗翰と雖も最早老齡、殿中に於ては策杖を許され、殿門の出入は輦輿のままである樣な始末であつたので、遠く南方に兵を動かしてゐる諸將にとつて、あまり苦痛な專橫振りは見せなかつた。のみならず彼と雖も建國以來の名相、各猛將間の融合物として、金廷に取つては、寧ろなければならぬ人であつたかも知れぬ。何故なれば彼の死後は諸將の角逐が次第に露骨となり、爲に宋との親交は、何の障害もなく此後約二〇年も續くからである。熙宗の卽位の時に宗翰と共に中央の政事に與つた者に

宗輔がゐるが儲嗣の事に就いても、又年號を改めずにそのまま天會を用ゐることに就いても、殆んど宗翰の意志のみで行はれたことは云ふまでもない。その宗輔も亦天會十三年に太宗の死に後るる五箇月で死んでしまつた。宗翰卽ち尙書令宋國王宗盤を以て太師と爲し、希尹を尙書左丞相に、高慶裔及び蕭慶を各左右丞相に任命した。

然るに尙書左丞高慶裔は宗盤と仲が惡く、宗盤が宗翰を斥けて自ら之に代らんとする野望あるを洞看し常に彼との爭鬪が續いてゐたが天會十五年遂に宗盤の爲に誅せられ、間もなく晉國王宗翰も死んでしまふた。それが燕京から帝に從つて上京に歸る途中野狐嶺(察哈爾)に於て病の爲に斃れたのである。此の後は宰相宗盤の跋扈時代となり、諸將も敢て中央の命のままに動くことなく、雜然たる內政が黃河附邊及其以北に布かれることになつたのである。此年の秋八月年號は天眷と改められ、達蘭及宗弼が左右副元帥に任せられ且つ、齊國を廢して汴京に行臺尙書省を置くことにした。然し此の齊國を廢することに就いては相當な議論が戰はされたのだ。必ずしも此の問題の爲に爭議があつたのではないが、諸將の角逐

が此の問題を目標として現はれたに過ぎない。卽ち此の年に金帝は詔して陝西及河南の地を宋に與ふることにした。是が抑もの導火線である。此發頭人は左副元帥達蘭であつて、彼は金建國の當時から奚部都統として、宗望等と共に戰功の多かつた者である。建國の後は又或は河南に、或は江南に宋軍を擊破して名聲赫赫たる者があつたのである。彼が宋師王倫の求めに應じて、金の京師に朝し、廟に向つて齊地の廢止を求め出たに就いては、元より故都元帥宗翰に對する一種の報酬からであることは彼が如斯戰功があつたに拘らず宗翰が在世中には僅に元帥左監軍であつことでも推察し得るだらうと思ふ。何れにしても此問題は重大であるので帝は東京留守宋雋までも召集して會議を開いたのである。然るに宋雋は達蘭と力を合して爭議した。のみならず宰相宗盤までが賛意を表したので宗翰の弟宗幹、宗憲及達蘭の弟勗なども盛に反對したけれども如何ともする能ばす、遂に陝西及河南の地は宋に與ふことになつてしまつた。宗盤が賛成するのは宗翰の殘黨に對する打擊として好機會を捕へたものと云ふことが出來やう、或は又達蘭との間に始めつから了解があつたのかも知らぬ。兎に角これからは宗盤

の專横が益益甚だしく宗雋を丞相となし達蘭は兵を擁して、その後援を爲すの狀態であつた。專横は遂に謀反となる可能性を持つてゐる。殊に、宗室の出である宗盤の場合に於て、そうである。しかしその謀反は未然に發見されて宗盤、宗雋は皆誅に伏した。達蘭のみは勿論その謀反の中に加入してゐたのであるが、特に大功ある爲に釋されて不問に附せられた。そして行臺尙書として汴京駐在を命ぜられた。しかし達蘭は燕京を出でず、その驕肆は愈愈甚だしく翼王呼蘭と共に謀反するの報が、早や聞ゑて來た。彼の背後に宋師が控へて居ることは想像し得られるだらう。此時尙河南に殘留してゐた者に右副元帥宗弼がゐる。彼は達蘭等の驕肆を齒がゆく思ひ帝に請ふて宋に與へた陝西、河南の地を再び取り戻してしまつた。會々達蘭謀反の事を帝に上告する者があり、早くも誅殺の詔勅が下つたので達蘭も遂に南走して祁州に於て殺され、その殘黨も悉く誅されてしまつた。達蘭は中山府(直隷定州)に於て旗上げをする計畫であつたと云ふ。

於是宗弼は都元帥となり軍政を統べ、親王以下の佩刀して宮殿に入るを禁じて封國の制を定め、以て皇室の藩鎭たらしめ、太宗の子呼拉布等十三人を王に封じた。

此の封國の制を定めた事に就いては、滿洲及蒙古朝廷に於て常に起る皇位の繼承の複雜從てその爭奪を緩和する爲であつた事は申すまでもない。しかし又これ等諸王が中央政府の威信と反比例して次第に獨立の姿を取ることも亦覺悟せねばなるまい。

天眷三年の正月には宗弼が行臺尙書省事をも兼ねて再び中央集權の實を行ひ、河南、陝西の地を奪取し、且つ、希尹、蕭慶及希尹の子巴達、滿達等の外樣大名を殺して自己の復心たる阿里布、薩里罕を左右副元帥に任命した。又彼は長く江南及陝西の地にあつて漢人と接觸することが多かつたので先づ彼等が慰撫策として孔子の裔孫璠を衍聖公に封じ、尙帝と共に親しく孔子廟を祭つて北面再拜して之を尊び論語及五代遼史等の諸書の普及を謀つたりした。翌年は年號が皇統と改められ太師宗幹の死後は宗弼は尙書左丞相をも兼ねて、國政の全權を掌握した。然し彼は必ずしも金全國を意のままに統治すべき實力を備へてゐたとは云へない、むしろ彼は燕京以南の漢土に於て國政の實權者であつたと見るのが至當であらう。何故ならば、北方卽ち滿洲から內蒙古へかけての一帶には彼と共に建國時代に偉

功のあつた者の子孫又室室の諸王侯が居を占めてゐたのに加へて、長く漢土に居た彼には滿蒙の如きはあまり齒牙に掛けるには當らなかつたのだらう。しかも彼はあまり戰にばかり力を致して來たので、それに倦んで來た樣にも見られる。之れが宋との講和を容易にした一原因であるに違ひない。最早や宗弼一派は外夷の域を脫して不知不識、漢族及び漢土の香にしみ込んでゐたのに違ひない。皇統二年春正月宋國と講和の議も調つたので、皇帝は上京を出でて拉林河に獵を行ひ、大いに群臣を集めて痛飮したと云ふ。戰がなければ次第に衰亡へと急ぐのは北方民族の常態であるのを如何ともする事が出來ない。太平は金に取つても衰亡の前兆であつたのだ。しかも熙宗は酒を好んで放縱の日を送ること多く東京(遼陽)濟州(隆安、農安)復州等の滿洲諸地方へ出獵して悠々の日を送つてゐたのみならず、我が子魏王道濟を殺したのを始めとし些々たる理由を以て諸大官を殺したりした。又太師宗弼の老齡なる故を以て之を斥けて宗固を太保右丞相に任じ宗弼の子分なる橫海軍節度使(山東滄州)田穀等八人を殺しその子孫まで官職を削除する等相當氣儘勝手に振舞ふたものだ。しかし田穀の殺された皇統七年に宗

固は死んでしまつたので宗弼は再び舊官に復し、且つ勗は左丞相となり宗賢は右丞相となり、平章政事には蕭仲恭を、左右丞に劉筈、李德固を任じ蕭肆、秉德を參知政事に命じて中央政府の空氣を新にした、それも僅か一年に充たずに宗弼は死んでしまつた。之れから熙宗の暴行は愈々甚だしく、屢々宗室及皇妃を殺し又大官の殺に會ふ者も尠くなかつた。北京留守(臨黄府)昨王元及弟安武軍節度使扎拉、左衞將軍塔斯等がそれである。又時に尙書左丞相兼中書令たる秉德も左司郎中薩哈と共に遼陽及渤海の民を燕南に遷した事より、侍從高壽星等の讒訴により薩哈は殺され、秉德は杖うたれたことがあつた程である。之が爲聊か不平だつた秉德は帝の亂業日に增し募るのを見て忿怒禁せず、遂に右丞唐古辯烏達等と謀つて熙帝を廢せんとし、時の都元帥海陵王亮に告げた。亮即ちその妹をして遂に帝を寢殿に殺してしまつた。時に皇統九年十二月、年僅に三十一歲であつたと云ふ。

亮は於是帝位を襲ひ、天德と改めた。亮は遼王宗翰の次子で、秉德は宗翰の子である。性殘忍にして猜忌心多く、嬌飾を好んでゐたので外見は頗る寬和であつたと云ふ。彼が卽位するや先づ左丞相、宗賢曹國王宗敏等を殺し秉德を左丞相に、唐古

九世二百十年である。(金は天輔七年七月に年號を保大と改めた)此年の春二月に奚王和勒博が察哈爾撫州(興和故城)の東北百支里なる箭筈山に據つて反旗を擧げたことを忘れてはならぬ。和勒博は遼の知北樞密院事で金に投降した者なのである。彼は僭に奚國皇帝を稱して年號を建て、天復とし、奚、漢、渤海の三樞密院を設けたりした。そして金の都統瑪格を殺してから次第に頭を擡げ殊に同族巴扎の如きは盛に附邊の部落を刧奪して民心を騷がした。しかしそれも長くは續かず郭藥師の爲に敗られ、一軍離心して散亡してしまつた。僞立僅に八箇月である。

## 第二　その後の金と察哈爾

その後の金史を綴る前に先づ金領としての察哈爾の地位を考へて見やう。此の時代に於ける金國の領土は上京路(阿城の南、伯都訥の東北)卽ち滿洲と、中京路卽ち熱河建昌附邊と、大同府に置かられた西京路との三つに分れる。そして我が察哈爾は一半は中京路に屬し殘りの一半は西京路に屬してゐたのだ。中京路に

屬する部分は桓州威遠軍節度使と撫州鎭寧軍節度使の管下となつてゐる。桓州は今の多倫縣の西方八〇支里なる四郎城附邊で舊開平の地である。時の縣を清塞と云ひ南は今の沽源縣、寶昌設治局の治下にまで及び北は今の多倫縣を以て終りとしたらしい。當時獨石口外は曷里滸東川と稱してゐた。そしてその威遠軍は西北路招討司に隷してゐたのである。次に撫州は今の張北縣廳の所在地なる興和城で張家口の西北九〇支里の地にある。鎭寧軍はやはり西北路招討使に隷してゐたが、尙此招討使所管の梅堅必刺王、敦必刺拿憐、木花速宗葛、斜忒渾の四猛安を發して鎭寧軍節度使に隷せしめてゐた。故を以てその管下の縣は柔遠、集寧、豐利及威寧の四となる。柔遠は撫州に置かれ宣德州(宣化府)の管下となつてゐたこともある。集寧縣は撫州の西北なる今の商都縣地方で北界に至る三百七十里と見ゐるが多分、錫林鄂爾盟旗に至る距離であらう。又豐利縣は撫州の北なる泥濼、卽ち鴛鴦濼に置かれてあつた。そして威寧縣は察哈爾右翼正紅旗にあつたと云ふから今の陶林縣(科布爾)であると見て大差なからうと思ふ。之等北部の諸縣はすべて猛安の領地である、此の威寧縣の置かれたところを新城鎭と云ふ。以上の

諸縣の外、今の豐鎭、興和、凉城三縣の地が殘つてゐる。此の地方は卽ち西京路に屬する部分で凉城縣(寧遠)には富民縣が置かれてあつたが、豐鎭、興和二縣の分は大同(と天成(天鎭)との管下になつてゐる。尙、歸化城は豐州天德軍の地で管下に東勝州今の托克托河口)がある、共に西京路(州五、縣二〇)に屬してゐたことは云ふまでもない。

金は始め城郭なく、すべて野營の形であつたが太祖はその末年に、皇帝寨、國相寨及太子寨等を築造して野戰時代の蠻風を除き始めた。又制度の如きも、始めは官號がなく、唯其部長を孛勤(貝勒)と云ひ數部を總轄する者を忽魯と稱するのみであつた。そして國中の壯者は皆兵士で、平日は射漁佃獵を習ひ、事あれば命令一下直ちに徵兵されるのである。その兵隊は百人を一隊とし、その長を謀克と云ひ、謀克十人を合して之を猛安と名付けてゐた。謀克の副は之を蒲里衍と云ひ士卒の副を阿里喜と云ふてゐた。後三百戶を一謀克に改めたけれども、諸部落の投降するものを皆各々の猛安に領せしめたので、その數は皆規定より多い。尙猛安の上には軍師があり、軍師の上には萬戶を置き、萬戶の上にには又都統を置いてその兵を統べ

しめた。燕山府に進入するに及んで漢人等は謀克猛安の名を喜ばないことを知り、遼の制に倣つて樞密院を置き漢軍を統率させた。是れから官號は多く漢制に從ひ、謀克、猛安の名は只東北、西北、西南の三路招討司の下に施すのみとなつた。招討使も亦遼の制を倣つたもので西北路招討司は桓州(舊開平)にあつて西北諸蕃を捍禦し西南征討使は西夏に對せしめた。且つ、招討司署には招討司一人、副使二人、降付するものを招撫し、離反するものを征討することを掌り、その猛安は軍務を整理し、武藝を練訓し農桑を勸課し盜賊を制禦する等、内治の事までも掌つてゐた。謀克は又猛安の下にあつて軍戶の撫輯から一般内治を掌る外、司法及警察を引き受けてゐた。

以上の外三路の部族を以て編成した糺軍なるものがあつた。そのうち西北路に屬してゐたものは速木典糺、耶刺都糺、骨典糺、唐古糺、霞馬糺、木典糺、萌骨糺、咩糺、胡都糺等があり、各糺軍に詳穩麼忽等があつて邊堡の守戍に任じてゐた。

以上の制度のうち後年に至つて屢屢改廢されたもの又は名稱を代へたものがあるけれども、その分課の程度は大體に於て變りはない。例へば桓州威遠軍及撫州

鎭寧軍が刺史に改められた如き者である。

尙之等は大抵太祖の末年に制定を終つたものであるが、太祖は又、自らも、內治の重要なるを感じて、屢々懷撫の詔勅を下して、民心の安定を願つた。遼末年の亂爭から金遼の決戰と、引繼いて察哈爾の地は戰區となり、愈く遼の滅亡を見たと思へば獨石口外に散住した例の奚の諸部落が騷ぎ出し(和勒博の亂)たりしたので、民心は恂々として定まらず、從て農桑の如き悉く廢されてしまう樣な有樣であつた。のみならず、兵隊共が、戰時の常として放縱、規なく、人民を掠奪して橫行してゐるので貧困の者が次第に多きを加へた。それに戰時中は各交通路の諸關津は悉く往來を絕つ等、慘めな狀態になつてゐたのである。依て太祖帝は先づ農事から振興させ樣として諸州部落に官を分遣して軍兵を戒め、且つ、戰亂の爲に逃亡した人民を再び舊地に戾す爲に、騷動を監守させると共に、貧困なるものの救恤を行はしめた。そして往來の關津を開放して、自由通行にまかせ、特に咸平、東京(遼陽)地方へは商賈の往來を奬勵し、尙都統杲の進言に依り新附の民で材能のある者は、之を錄用することにし、且つ大赦の令を發して自今金の部屬として安住するものは以前の罪を

悉く赦してやつた。又軍事統率に就いてもその統一を劃し自今軍事に就ては殘りなく各路詔討使に申告せしめ、各路の事務は都統之を統べ、其餘の民事外交はすべて樞密院に於て決せしめた。

斯くて太祖は天輔七年四月儒州(延慶、口北道居庸關附邊)に次し、次いで野狐嶺(撫州の西南)に至り翌月落黎濼に巡幸した。落黎濼は、萬全縣新河口の口外四〇支里にある甜水海子であらう。此地は野狐嶺の西北六〇支里である。此地に於て太祖は、奚路の都統撻蘭をして蘇庫、卓琳、鐵尼等の諸部を攻略して彼の和勒博の殘黨を平らげ猛安、謀克を置いて之を領せしめた。又奚の馬和尚をして薩必、達魯噶、幷に五院司の諸部を攻めしめその節度伊里を執へ、之を以て察哈爾の地は一段落を告げたので、先づ上京なる臨潢府に歸らんとした、(臨潢府は軍州二十五、縣十を統べてゐた)そして宗翰を都統に命じ、温貝勒昱德、特貝勒斡魯には兵を授けて雲中に駐せしめ以て邊防に備へた。自分は直ちに行を起して鴛鴦濼に次し東北行して渾河(濡水のことでなければならぬ)を渡り、布圖濼に至り遂に病の爲に崩ず、今其布圖濼に就いては考證がない。上京に行く途中であるから多倫附邊又はその北方の湖

であらう。此行に於て太祖は燕京から麗色光美娟秀なる婦人二、三千人を率きつれ酣歌、宴樂惟もう聲色の娯にばかり耽つてゐたと云ふ。その爲に形神すでに病の如く、未だ幾くならずして死んだのだと云ふがそれは漢人の皮肉であらう。次いで帝位に卽いた太宗は、本名を烏奇邁と云ひ、世祖の第四子で、太祖とは兄弟の仲である。彼れは先づ年號を天會と改め且つ太祖が諸方に出陣してゐるときに常に留守を承り、あまり戰爭には經驗がないので、對遼の戰鬪は、すべて西南、西北、兩路都統宗翰に命じ便宜事に從はしめ、古倫貝勒杲を安班貝勒に昇せ古倫貝勒には宗幹を以て之に補任した。そして遼の諸陵を發堀して金屬を盗み出すものがあるので嚴重に之が取締を命じ、太祖の馬蹄の跡を追ふてその民を招撫し、天祚帝の捕獲に次いで西北、西南西路に於ける亂黨を鎭定してからは、鋭意南侵を志し豐饒の原野に英氣漲る馬首を向け出したのは蓋し止むを得ぬ。金が歲幣四十萬の增加と外に燕に於ける租稅として錢一百萬緡を送ることを約しめて漸く與へた燕京六州の地を宋が永久に自己の所領であると自惚れるのは、自惚れる者を嘲笑ふよりは、自惚れざるを得なかつた宋朝の亂胍を悲しまざるを得ぬ。小人朝に上り、

有爲の士はすべて野に隱れ、各々私腹のみをなですりて責任を他に轉嫁せんとする如き有樣である。燕京六州の地は間もなく奪回され、大都汴京までが金軍の横行にまかせねばならぬ事を切實に考へる人があつたならば到底野に隱るるより外に道はないのである。金としても亦强國遼を無殘に擊破した實力を有し且つ遼と同じく北方に武を練つた軍兵を以てして遼の全圖さへも取り得ないとは不合理である。のみならず燕京は、夾攻の約があつたにも拘らず、宋軍は常に敗北の有樣で、事實上金の軍兵を以てして始めて落城せしむる事を得たものである。歲幣の如きは遼と雖も之れを受けてゐた。何ぞ金のみは塞北の曠野に寒風と戰はなければならぬ理があるだらう。塞外の民に取つて唯一最大の正義は强いことである。戰に勝つことである。弱勢宋が豐饒の野を、しかく廣大なる野を占領してゐることは甚だその意を得ぬ。その間に遼國が介在してゐればこそ宋の泣き言も聞きききもしやうが今遼が滅びて宋と兩兩相對峙した場合、最早や弱い者は苛められるより外に仕方があるまい。果せる哉太宗は、天會三年冬十月諸將を會して侵宋の議を決し、安班貝勒杲を以て都元帥を兼領せしめ、伊拉齊貝勒宗翰を之

が副とし、希尹、伊都の二人を元帥に任じて總司令部を組織し、外に右都監は西京より南下して太原に入ることとし、六部路軍師達蘭は六部都統となり、舍音之に副となり、宗望は又南京路都統となり、棟摩を以て之が副とし知樞密院事劉彥宗は漢軍都統を兼ねて共に南京(平州)より燕山に入らしむることにした。時に宋に於ては徽宗の宣和七年、金が斯くも大げさなる征討の師を繰り出したその理由は彼の張覺を暗に助けて、之が投降を許したことにある。

以上の南下軍は、その年の十二月早くも行を起し、宗幹は右都監と共に西京路なる朔州に下り、續いて雁門の險を越ゑて代州に克ち、崞・忻等の州は無人の境を行くが如く進軍し、遂に石嶺關(太原の東北五〇支里)を距てて太原城を包圍した。又伊都の軍は綏遠から朔州の西方河東に進出し、汾水の上流から天門關(太原の西北六〇支里)を距てて太原城に相對したのである。一方南京路都統宗望は、宋軍を白河に擊破して燕京に進軍し又布希なるものも古北口を守る宋兵を郤けて南下して來た。當時燕山には知燕山府として、安仲が居り、遼の降將郭樂師は同知府事となつてゐたが、金軍の進擊は愈々激しく、近郊に屯した宋兵は算を亂して敗軍し、燕京は

一ともたまりもなく落城し、樂師は遂に降參してしまつた。宗望は更に兵を休めずして直ちに南下し、富埒琿の率ゐる漢兵千騎と共に盛に直隷の野を攻略して、遂に河南に進入した。放縱にして、私の爲に國政に當つてゐた朝臣は何條支ふる事が出來やう、皇帝は出奔し、諸將は議決せず、汴京は金の大軍に包圍せられて如何ともせんすべがなくなつたので遂に李梲を謝罪使として金の軍中に送り、中山(定州)河間を割讓することを提議して來た。宗望卽ち之を許し以上の外に人質を納れしめ且つ中山河間太原三鎭の地と金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬一萬頭、表段百萬匹を贈ることを約せしめた。そして金に對しては伯父の禮を取り、康王構を質とし誓書を差入れた。しかし宗望は敢て汴京の圍みを解かふとしない。逃亡した徽宗はすでに皇位を太子桓に讓り、自分は道君皇帝と稱してゐたのである。太子桓は卽ち欽宗皇帝である。時に主戰論者たる宋將姚平仲は突如、暗に乘じて宗望の營を襲ひ之を敗つたがそれも一時、宗望は再び師を還して汴京を圍んでしまつた。一方太原の守りは如何、金の大軍が四方からひし〳〵と之を攻めるけれども天險よつて之を防で降らない　依て宗翰は尼楚赫を太原に當らしめて自らは南下し

威勝軍(時に銅鞮縣と云ひ今の沁縣である)を定め更に隆德府(潞安)より澤州にまで至つたが宋軍の逆襲に會ひ遂に威勝軍を棄てて歸らねばならなかつた。彼は此時西京まで歸つたといふ。宋軍は又南北關(靈石縣八〇支里にありと見ゐるが多分馬陵關の事であらう)を扼して金軍の南下を防いだ。しかるに金將耿守忠は宋人を西都谷(交城縣)に破り再度南北關にせまつて來たが、宋の仲師中なるもの井陘(直隷正定の西)を出でて山西に入り遂に楡次に至つて戰陣を張つた。楡次は太原府の東南六〇支里にある。しかしそれも完顏和尼、托克索等の爲に殺熊嶺(文水縣の西六〇支里)に破られ、師中は戰死してしまつた。その後宋軍は一時潞州に於て大いに金軍を破つたことがあるけれども、金軍は再び軍を整理して宗翰は左副元帥となり西京を發し、宗望は右副元帥を授けられて保州(保定)から新に軍を起すに會し、宋の張灝の兵十萬は汾州に敗れ、劉臻は壽陽(太原の東一二〇支里)に破れ、さしもに堅城を誇つてゐた太原も次いで陷り經略使孝純は捕へらてしまつた。それからは、井陘關の險要が破れたのを手始めに汾水沿域の諸城から東は遼州までも金軍に奪はれ、威勝軍の擊破は遂に天井關(澤州の南四五支里河南との界にあり)の

守りを失はしめ遂に黄河を渡つて、汴京に進擊し、山東、河南の野に破竹の勢を持して盛に宋軍を擊破した。宗望の軍と力を合して天慶四年冬十二月遂に汴京を陷れた、太宗が南侵の計を定めてから僅一年有月、文化を誇つた華美の都は金人の馬蹄の下に見る影もなくなつてしまつた。宗翰、宗望等の大軍は翌四年軍を還して北に歸つたといふ。直隸、山西及河南の平野が此の戰に如何に慘害を蒙つたかは、墳墓までが發掘されたのを見て察し得るだらうと思ふ。時に宋に在つては欽宗の靖康元年、欽宗及上皇は捕へられて庶人に降下され、燕京に護送された、多數の美姬及寶物も共に殘りなく奪はれてしまつた。そして金帝の詔勅により張邦昌なるものを立てて楚帝となし汴京に駐せしめた。張邦昌は宋の少宰で汴京包圍の際質となつて金軍に至つたものである。然し、如何に文弱に流れたとは云ひ、只一度の敗戰に大國の權威を失ひはしない。從て張邦昌の權力は單に名のみであつたことは想像するに難くない。その唯一の支持者たる宗望の軍が北歸した以上河南は最早や無政府の狀態である。間もなく歸德に於て宋帝を稱した康王構の爲に張邦昌の殺されたのは止むを得まい。しかし張邦昌は云はば金軍の手先で

ある。之が殺されて金は何條默してゐやう、殊に太宗は大いに怒つた。そして先づ捕虜とした宋の二帝を上京に送り元帥府に詔して南侵し遂に之を楊州に追ひまくつた。その後の金、宋の交戰に就いてはあまり察哈爾史とは關係がないから單に、金が中原を攻略してから遂に江蘇、浙江にまで進出し、西は隴及蜀を取り劉豫なるものを立てて汴に都せしめ、關中の地を之が管下とし、盛に南宋と交戰を重ねてゐたが遂に和議の約成り(秦檜岳飛を殺す)淮水の中流を界とし、此處に南北兩朝の分野が出來上つた。此時には既に劉豫は廢されて蜀王に封ぜられてゐるのである。

時に皇統三年春二月、太宗は八年以前卽ち天會十三年既に死んで熈宗の治下であつたのだ。熈宗は太祖の孫、豐王宗浚の子である。しかし破竹の勢を以て、一氣に江南にまで押し寄せた金軍が斯くも容易に和議の約に賛した事に就いては、宰相秦檜が智謀や猛將岳飛の勇戰があづかつて力ある事は勿論であるが、金それ自身の體內に幾多の內爭、反亂が生じた事を忘れてはならぬ。先づ金建國のときから赫赫の軍功があつた名將宗望の死を汴京落城の其年卽ち天會四年に聞かねばな

らなかつたのを始めとし、その後任たる宗輔は右副元帥となつて、宗弼と共に南方の攻略に從つてゐたが汴京なる都元帥宗翰と、宋の降將徐文策の採用問題に就いて議合はざる事あり。のみならず劉豫を立てて齊帝と爲すことに就いても殆んど宗翰が獨斷で行はれ、且つ宗翰は京師の近くに居ることとて太宗の命令は殆んど宗翰の意のままに發布された者が多い。彼は先づ天會十年古倫右貝勒兼都元帥となり、太祖の孫を萃めて安班貝勒としその子の宗盤を右倫烏赫哩貝勒に任命したりした。そして熙宗が卽位してからは太傅領三省事となり、晉國王に封ぜられ、軍國の事一として宗翰の手を經ないものはない有樣であつた。然し宗翰と雖も最早老齡、殿中に於ては策杖を許され、殿門の出入は輦輿のままである樣な始末であつたので、遠く南方に兵を動かしてゐる諸將にとつて、あまり苦痛な專橫振りは見せなかつた。のみならず彼と雖も建國以來の名相、各猛將間の融合物として、金廷に取つては、寧ろなければならぬ人であつたかも知れぬ。何故なれば彼の死後は諸將の角逐が次第に露骨となり、爲に宋との親交は、何の障害もなく此後約二〇年も續くからである。熙宗の卽位の時に宗翰と共に中央の政事に與つた者に

宗輔がゐるが儲嗣の事に就いても、又年號を改めずにそのまま天會を用ゐることに就いても、殆んど宗翰の意志のみで行はれたことは云ふまでもない。その宗輔も亦天會十三年に太宗の死に後るる五箇月で死んでしまつた。宗翰卽ち尙書令宋國王宗盤を以て太師と爲し、希尹を尙書左丞相に、高慶裔及び蕭慶を各左右丞相に任命した。

然るに尙書左丞高慶裔は宗盤と仲が惡く、宗盤が宗翰を斥けて自ら之に代らんとする野望あるを洞看し常に彼との爭鬪が續いてゐたが天會十五年遂に宗盤の爲に誅せられ、間もなく晉國王宗翰も死んでしまふた。それが燕京から帝に從つて上京に歸る途中野狐嶺(察哈爾)に於て病の爲に斃れたのである。此の後は宰相宗盤の跋扈時代となり、諸將も敢て中央の命のままに動くこともなく、雜然たる內政が黃河附邊及其以北に布かれることになつたのである。此年の秋八月年號は天眷と改められ、達蘭及宗弼が左右副元帥に任ぜられ且つ、齊國を廢して汴京に行臺尙書省を置くことにした。然し此の齊國を廢することに就いては相當な議論が戰はされたのだ。必ずしも此の問題の爲に爭議があつたのではないが、諸將の角逐

が此の問題を目標として現はれたに過ぎない。卽ち此の年に金帝は詔して陝西及河南の地を宋に與ふることにした。是が抑もの導火線である。此發頭人は左副元帥達蘭であつて、彼は金建國の當時から奚部都統として、宗望等と共に戰功の多かつた者である。建國の後は又或は河南に、或は江南に宋軍を擊破して名聲赫赫たる者があつたのである。彼が宋師王倫の求めに應じて、金の京師に朝し、廟堂に向つて齊地の廢止を求め出たに就いては、元より故都元帥宗翰に對する一種の報酬からであることは彼が如斯戰功があつたに拘らず宗翰が在世中には僅に元帥左監軍であつことでも推察し得るだらうと思ふ。何れにしても此問題は重大であるので帝は東京留守宋雋までも召集して會議を開いたのである。然るに宋雋は達蘭と力を合して爭議した。のみならず宰相宗盤までが賛意を表したので宗翰の弟宗幹、宗憲及達蘭の弟勗なども盛に反對したけれども如何ともする能はず、遂に陝西及河南の地は宋に與ふることになつてしまつた。宗盤が賛成するのは宗翰の殘黨に對する打擊として好機會を捕へたものと云ふことが出來やう、或は又達蘭との間に始めつから了解があつたのかも知らぬ。兎に角これからは宗盤

の專橫が益益甚だしく宗雋を丞相となし撻懶は兵を擁して、その後援を爲すの狀態であつた。專橫は遂に謀反となる可能性を持つてゐる。殊に、宗室の出である宗盤の場合に於て、そうである。しかしその謀反は未然に發見されて宗盤、宗雋は皆誅に伏した。撻懶のみは勿論その謀反の中に加入してゐたのであるが、特に大功ある爲に釋されて不問に附せられた。そして行臺尙書として汴京駐在を命ぜられた。しかし撻懶は燕京を出でず、その驕肆は愈愈甚だしく翼王呼蘭と共に謀反するの報が、早や聞ゐて來た。彼の背後に宋師が控へて居ることは想像し得られるだらう。此時尙河南に殘留してゐた者に右副元帥宗弼がゐる。彼は撻懶等の驕肆を齒がゆく思ひ帝に請ふて宋に與へた陝西、河南の地を再び取り戾してしまつた。會々撻懶謀反の事を帝に上告する者があり、早くも誅殺の詔勅が下つたので撻懶も遂に南走して祁州に於て殺され、その殘黨も悉く誅されてしまつた。撻懶は中山府(直隸定州)に於て旗上げをする計畫であつたと云ふ。

於是宗弼は都元帥となり軍政を統べ、親王以下の佩刀して宮殿に入るを禁じて封國の制を定め、以て皇室の藩鎭たらしめ、太宗の子呼拉布等十三人を王に封じた。

此の封國の制を定めた事に就いては、滿洲及蒙古朝廷に於て常に起る皇位の繼承の複雜從てその爭奪を緩和する爲であつた事は申すまでもない。しかし又これ等諸王が中央政府の威信と反比例して次第に獨立の姿を取ることも亦覺悟せねばなるまい。

天眷三年の正月には宗弼が行臺尙書省事をも兼ねて再び中央集權の實を行ひ、河南、陝西の地を奪取し、且つ、希尹、蕭慶及希尹の子巴達、滿達等の外樣大名を殺して自己の復心たる阿里布、薩里罕を左右副元帥に任命した。又彼は長く江南及陝西の地にあつて漢人と接觸することが多かつたので先づ彼等が慰撫策として孔子の裔孫璠を衍聖公に封じ、尙帝と共に親しく孔子廟を祭つて北面再拜して之を尊び論語及五代遼史等の諸書の普及を謀つたりした。翌年は年號が皇統と改められ太師宗幹の死後は宗弼は尙書左丞相をも兼ねて、國政の全權を掌握した。然し彼は必ずしも金全國を意のままに統治すべき實力を備へてゐたとは云へない、むしろ彼は燕京以南の漢土に於て國政の實權者であつたと見るのが至當であらう。何故ならば、北方卽ち滿洲から內蒙古へかけての一帶には彼と共に建國時代に偉

功のあつた者の子孫又室室の諸王侯が居を占めてゐたのに加へて、長く漢土に居た彼には滿蒙の如きはあまり齒牙に掛けるには當らなかつたのだらう。しかも彼はあまり戰にばかり力を致して來たので、それに倦んで來た樣にも見られる。之れが宋との講和を容易にした一原因であるに違ひない。最早や宗弼一派は外夷の域を脫して不知不識、漢族及び漢土の香にしみ込んでゐたのに違ひない。皇統二年春正月宋國と講和の議も調つたので、皇帝は上京を出でて拉林河に獵を行ひ、大いに群臣を集めて痛飮したと云ふ。戰がなければ次第に衰亡へと急ぐのは北方民族の常態であるのを如何ともする事が出來ない。太平は金に取つても衰亡の前兆であつたのだ。しかも熙宗ほ酒を好んで放縱の日を送ること多く東京(遼陽)濟州(隆安、農安)復州等の滿洲諸地方へ出獵して悠々の日を送つてゐたのみならず、我が子魏王道濟を殺したのを始めとし些々たる理由を以て諸大官を殺したりした。又太師宗弼の老齡なる故を以て之を斥けて宗固を太保右丞相に任じ宗弼の子分なる橫海軍節度使(山東滄州)田穀等八人を殺しその子孫まで官職を削除する等相當氣儘勝手に振舞ふたものだ。しかし田穀の殺された皇統七年に宗

固は死んでしまつたので宗弼は再び舊官に復し、且つ勗は左丞相となり宗賢は右丞相となり、平章政事には蕭仲恭を、左右丞に劉筈、李徳固を任じ蕭肆、秉徳を參知政事に命じて中央政府の空氣を新にした、それも僅か一年に充たづに宗弼は死んでしまつた。之れから熙宗の暴行は愈々甚だしく、屢々宗室及皇妃を殺し又大官の殺に會ふ者も尠くなかつた。北京留守(臨黄府)咋王元及弟安武軍節度使扎拉、左衞將軍塔斯等がそれである。又時に尙書左丞相兼中書令たる秉徳も左司郎中薩哈と共に遼陽及渤海の民を燕南に遷した事より、侍從高壽星等の讒訴により薩哈は殺され、秉徳は杖うたれたことがあつた程である。之が爲聊か不平だつた秉徳は帝の亂業日に增し募るのを見て忿怒禁せず、遂に右丞唐古辯烏達等と謀つて熙帝を廢せんとし、時の都元帥海陵王亮に告げた。亮卽ちその妹をして遂に帝を寢殿に殺してしまつた。時に皇統九年十二月、年僅に三十一歲であつたと云ふ。

亮は於是帝位を襲ひ、天徳と改めた。亮は遼王宗翰の次子で、秉徳は宗翰の子である。性殘忍にして猜忌心多く、嬌飾を好んでゐたので外見は頗ろ寬和であつたと云ふ。彼が卽位するや先づ左丞相、宗賢曹國王宗敏等を殺し秉徳を左丞相に、唐古

辨を右丞相に任じ其他自己の腹心を以て大官となし、間もなく秉德をば中央より出して行臺尙書省事となし唐古辨を左丞相に烏達を右丞相に、弟兗を司徒兼都元帥に任じた。是より彼の亂業は日に益し甚だしく、恣に要路の顯官を殺し或は其妻を獲んが爲に、或は些々たる理由により殺された者がその數を知らず、秉德も亦刺客を派して之を殺し、其他太子の子孫七十餘人、宗翰の子孫三十餘人、諸宗室五十餘人等悉く殺されてしまつた。しかもその大部分の人の妻は悉く海陵王の下に奪ひ取られたと云ふに至つては、必ずしも政事的意味に於てのみではなかつたことを知ることが出來る。故にその後は勝手に他人の妻に向つて宮中に來ることを命じ、寵臣蕭裕を謀反の廉より誅してからは、天下の美人を悉く官中に入れ、諸妃に分屬せしめて之を從姊妹となし、一室を設けて、裸戲を演ぜしめたりした。

然し當時は金の極盛時であつたので、諸外國の來侵するものもなく、大國なりと雖も宋の如きは、海陵の亂業の爲に愈くその侵略を免かれてゐる有樣であつたのだ。帝王こそ如斯所業を演じてゐるが諸方に散在する、各王侯は、依然として强兵を持つてゐたことは爭はれぬ。何故なれば、金を亡ぼす者は、宋その他の他國民族では

なく依然として北方に潜在してゐた蒙古族であらねばならなかつたからだ。故にたとひ中央の政事は整然たる者がなかつたけれども、宋の南渡以前の如き一國としての醜狀を暴露することはなかつた。中都城(燕京を中部と改め汴京を南京とし中京を北京とし、海陵王自らは多く中都城に居た)の築城、南京城の建宮を爲すの外通州には又多數の戰艦を浮べて南浸を意圖する等、亂世とは見られない豪奢振りを示したのもこの故である。しかし李通の如き姦佞の徒が殿中にはびこり賄賂が公然と行はれたのみならず各處に小盜が起つたり、小反亂を企てる者の數數あつたことは止むを得ぬ。殊に南京附邊に於てそれが多かつた。彼が、世宗が遼陽に於て金帝を稱した頃、兵を動かして南侵を計り中途にして浙江路都統完顏元宣等の爲に殺されたときにも南京は賊王九の爲に占領されてゐた樣な始末である。然し彼は最後までその亂業を止めはしなかつた。否反つて晩年に近づくに從つて益々甚だしく遂には墳墓、碑誌を發掘したり舊官殿や諸太族の第宅及寺院等までも毀すに至つた。殺人の如きは日常の茶飯事となつてしまつたのである。

海陵王の治世は、總じて九年間である。年號天德は三年にして終り、正隆六年は即ち彼の刺殺に遇ふた年なのである。彼は時に年四十であつた。世宗の大定二十年遂に庶人に降され謚を煬と云ふ。

## 第三　西北契丹の反亂

以上の如く海陵の治世は甚だ亂雜であつた。從つて諸方の民心が次第に金の帝室から離れて行つたことは爭はれぬ。金帝最大の誇りである南宋の征討も宋國の內訌によつて最早やその必要を認めなくなり。天下を平定した積りでその太平に自負してゐる間に南宋ならぬ小盜賊が横行してゐる樣な始末であるから滿洲及蒙古地方の事は思ひやられる。いや此地方は海陵王の治下とは云はれぬかも知れぬ。世宗が金帝を遼陽に稱するに際し何等の障害があつたことも聞かぬのは此の爲でゐる。

正隆六年夏五月には契丹諸部の反亂があつたとさへ見ねてゐる。玆に云ふ契丹諸部とは西北契丹の事で東翼察哈爾から錫林河、熱河一帶に懸けて群住した部民

である。此西北契丹部に薩巴なるものが出て金の爲に招討司譯史となつたのが即ち海陵王の治世の時であつたのだ。

海陵五年に南侵の計を定めた海陵王は、彼薩己に對しても徵兵を命じた。しかもその徵兵の方法は相當酷を極め契丹壯丁の全部を盡く徵さうと謀つたのである。此れには契丹部民と雖も反對せざるを得ない。西北路は由來隣國と接近し、その隣國外蒙の部民は又世々金とは讐怨の關係ある、金の勢が强ければこそ平和なる國交も結ばれてゐるのであるが、今之が守りたる西北路にして、その壯丁のすべてを江南の野に送るとすれば、彼が兵を以て襲來し來るは明である。その時には老弱の者が如何に努めても、その係累まで打盡されてしまふに違ひない。係累まで打盡されては西北契丹部は最早永久に立つ瀬がない。以上の理由を以て契丹人は極力その徵兵に反對したので、徵兵官蘇赫、洋格も如何とも詮術なく、此の由を海陵王に報じたときの罪則などを思ふて敢て報告しやうとはしなかつた。しかし此のままに過ごす譯にも行かぬので先づ兵を以て之を强迫しやうと思ふて蘇赫は牌印耶律諸爾、令史穆達里哈等と共に西北路の金兵を起して示威をやつた。し

かし洋格は自らの使命の成らぬのみか後、西北部には必ず反亂の起ることを見拔いて憂死してしまつたと云ふ。海陵王の狂暴さが斯ふ云ふ所にまでも見られて面白い。一方薩巴に於ては蘇赫の起兵を聞いて、逸早く兵を集め博多布及眞部衆と謀つて機先を制して招討使署を襲ひ招討使完顏烏色及蘇赫を殺してしまつた。のみならず耶律諾爾、穆達里哈等は執はられ招討司の貯甲三千は薩巴の爲に奪はれたのである。斯くして薩巴は反旗を翻した。そして先づ豫王延禧の子孫を立てて帝と稱し都監老和尙を招討使に任じ、之に應じて立つた山後の四羣牧や山前の諸羣牧を加へて一敵國の形は成り立つたのである。

然し烏哲群牧使温特赫布敦(多分今の奉天省洮昌道管内ならん)が陰に兵を蓄はて薩巴の反亂に備へてゐたので容易に海陵王の社稷を脅すことは出來なかつた。それも諸方の部落が共應するに及んで間もなく屈服したので、今は公然と反旗を翻して先づ温特赫布敦父子を鬱殺して戰陣の血祭りとし、伊囉斡群牧使烏達布を攻殺してからは諸群牧使副圖克坦色哩、特嘉和碩臺和色哩、完顏珠勒呼、希卜蘇、詳袞瓜爾佳邁珠、完顏蘇瑪喀高彭祖等皆烏達布の難に殉じて死んでしまつたのに加へ

て、五院司部人老和尙納延が節度使珠嘉烏哲を殺して來り投ずるあり、その勢の仲々に悔り得ないものがあつた。且つ又千戶實格等は前招討使完顏滿丕と共謀して詔討使烏凌河富勒呼を殺し、その所部を收めて西北路に趨り、その節度使を潛する等あつて、察哈爾北部から今の奉天省北部に懸けて、金國の背後に於ける一大脅威となつてしまつた。

然し西北路に於ては阿爾薩哩の追擊を喰つて、部下四散し實格は只數騎を具したのみで東走し咸平府(奉天省鐵嶺の東北)に至つた。薩巴は此時すでに東方に進出して咸平府に駐つてゐたのである。實格の一部なる穆昆瓜里等も興安嶺の北を走つて間もなく咸平府に逃げて來た。元來西北路に進出した實格の一隊は薩巴とは何等の關係もなく、薩巴が東方に進出するを好事とし、自分は西方に道を取つたに過ぎなかつたのだが、玆に至つて悉く薩巴の軍に合してしまつた。時に咸平少尹は完顏額哩なるものであつた。彼は、瓜里を招誘して以て薩巴の來襲に備へんとしたが瓜里は反つて附近の富豪及奴隷を集めて進軍し來り、韓州(昌圖)柳河(開原の西)はまたたく間に陷り咸平の守りも破られてしまつた。斯くして咸平に據

つた薩巴の一軍は盛に兵甲を備へ兵を募集し、盛に濟州(黃龍府)信州(今の長春の南)等の北部城堡を騷かし、南下して東京に世宗の留守を驚かさんとして將さず、又薩巴の本軍と合して盛に附近を脅威した。於是、海陵王も右將軍燕圖喇を遣して之が征討に從事せしめたが、連戰皆功無きを見て又樞密使布薩思恭に命じ西京留守肅懷忠を之が補助として薩巴征討の軍を起したのである。思恭は依て東翼察哈爾より東北行して熱河なる巴林境(當時長泰縣と云ふ)の北千支里なる龍駒河の西方に進出し、臨潢府を棄てて來れる圖喇の軍と合して薩巴の大軍を擊退した。然るに思恭と懷忠とは、敢て薩巴の追擊を爲さずして、その地に逗留してゐた故を以て其族と共に誅せられ、圖喇も同じく死を賜つた。且つ北京(大定府)留守なる蕭賾も亦、部下を制禦する能はざるのみか、降人を殺して其婦女を取る樣な行跡があつたと云ふて遂に殺されてしまつた。斯くの如くして、金の西北部及北部に對しては對抗すべきすべての軍官を失つたので、詔して白彥敬を北面兵馬都統となし熱河の東北部に備へしめ赫舍哩及志寧を之が副とし、西北面兵馬都統には完顏古雲を任じ唐古布古岱を之が副として、薩巴等征討に從事させることにしたのである。

薩巴に於ては又、此機會に乘じて東方に比し比較的障害の少い西方に向つて進出せんと欲して既に軍を進めてゐた。然るに僞署六院節度使たる伊喇斡罕は軍隊の西行を欲せざるを洞見し、軍官辰嘉と共に急擊して薩巴を殺し老和倘博多布を執へてしまつた。そして自ら薩巴に代つて都元帥と稱し辰嘉をば都監に任じて部衆を擁して東に路を取り臨潢府の東南なる新羅塞に立籠つた。

時に海陵の正隆六年で此年の十月には東京に於て世宗の卽位があり、年號は大定と改められ、翌月には海陵王が江南に殺されて、金の皇室は再びその正統を以て繼がれることとなるのである。それはさて措き、世宗は卽位と共に完顏古雲を以て左副元帥に命じ、且つ伊喇扎巴を遣して契丹諸部の反亂を企つるものを招致せしめんとした。然るに伊喇扎巴は斡罕の軍中に至り、その勢の强盛なるを洞見し、むしろ彼と共に蒙地に於て威勢を張るの得策なるを知り、自己の使命を棄て、賊の軍中に留ることとなつてしまつた。於是斡罕の氣も聊か驕り、臨潢府の攻略を志圖し大兵を引いて攻め上つた。臨潢府總管伊蘇瑪勒、身を以て之が防禦に努めたが遂に敗られて捕へられ、城は賊の重圍に陷つてしまつた。賊の群集、實に五萬と稱

し、斡罕は攻城中帝を稱し年號を天正と改めた。

時に都統白彥敬、副統志寧等は北京にゐたが海陵王の殺刺と前後して世宗の即位を聞き、直ちに北邊の兵備を止めて兵を率ゐて彼の下に來歸した。世宗は此の時すでに軍士を扈從して中都(燕城)に來てゐたのである。海陵王の中都留守薩勒札は、海陵王の死後間もなく、阿蘇なる者の爲に殺され、中都の諸將は悉く世宗の來京を歡迎したのである。

しかし、左都監烏哲庫、右都監實圖美、廣寧尹布薩歡塔等は白彥敬等の心事を嫌たらなく思ひ、之を討たんとし先づ、臨潢を救ふの急なるを思ふて北行した。けれども賊は此時圍みを解いて東方に進み泰州(長春附邊)を攻略してゐるとの報があつたので、烏哲庫は彼を追ふて斡里山に至り、猛安呼魯蘇の援兵を得て大いに之を擊破したが、節度使烏哩頁の軍は賊の爲に大敗を蒙り僅に數騎を以て逃れる如き有樣であつたので、猛安烏克遜阿里布等の力戰も彼が勢を挫くには足らず、賊は益々驕る一方であつた。

斯くして大定元年は暮れ、翌年正月には世宗が右副元帥完顏默音をして斡罕討代

に向はしめた。しかし約半年に垂んとする戰鬪に於て、賊も海陵王の殘黨も共に傷くことが少くなかつたので、世宗軍は勞せずしてその功を收むるを得たのは幸である。即ち翌二月には賊の諸人の降歸を申出ずるもの續々として生じ或はその部衆を率ゐて來り投ずる者さへあつた。之等の者を遇するに世宗は甚だ寛大を極め、その罪を咎めざるのみか反つて之に官賞を與へ、才能ある者は遠慮なく之を錄用したりした。尤も賊軍は世宗に對して始めからあまり反感も持つてゐなかつたのは事實である。只賊將斡罕のみは依然として對抗の勢を緩めはしなかつた。依て世宗は彼の首に懸賞して、若し彼を殺した者があるならば、眞定總管(正定)の官を授けることを宣言し、別に平章政事伊喇元宜を泰州に派遣して、邊事の處理に當らしめたが一方待郎温珠徳勒等は斡罕と勝州(東勝州のことであらう)に戰つて敗れる樣な始末で、斡罕は察哈爾熱河の北部地方を我物顏に横行を續けてゐたのである。然しそれも僅か三ヶ月に充たず、四月には完顏默音等の爲に長濼に大敗し、逃れて、再び霹靂河に於て擊破せられた。霹靂河は臨潢の西南とあるのみで確ではないが多分、多倫北方の遼河上流か、若しくは上都河の事であらねばなら

ぬ。長濼は今の翁牛特左翼旗内にあるといふ。

斡罕は勝州に勝つたが察哈爾に敗れて再び東走を餘義なくした。恰たかも宜し韓州に在つては(開原附近)部將瓜里が盛に攻略に從事してゐるといふことを聞いたので泰州(科爾沁左翼旗)より攻め寄せたが、此時には既に猷音は懿州(廣寧の北)に屯してゐた。右監軍完顏福壽、左都監烏哲庫の兵を合し總じて約一萬三千、之を左右兩翼に分ちて、降人吉勒孔の說に從ひ先づ敵の輜重を取らんとし夜に乘じて敵の後路にせまつた。斡罕之を知り直ちに軍を還したが長濼に至つたとき、四方より伏兵が起つて一とたまりもなく敗走し、左翼萬戸襄の追擊を奮戰して郤けることは出來たが折からの逆風に地の利を失ひ、遂に大敗して西方に逃走を企てた。然し官軍の追擊は益々急に霧䍥河を渡つたときには官軍はすでに對岸まで押し寄せて來て柳枝を束ねて河底を塡め軍を渡し、又追及して賊を郤け平地を得て之に屯した。時に左翼節度使志甯は賊の逆襲に會ひ、力戰して之を郤けたが、賊も南方の高地を利して頑强に抵抗し逆襲すること三度に及び志寗は流矢に當つて左臂を傷けたが屈せず、右翼軍の來著を待つて先鋒に騎兵を配し賊と接戰せんとし

た。賊も去るもの上風に據つて火を縱ち奮鬪以て勝を制せんとしたが會々風止んで雨さへも降り出したので、賊軍遂に大敗し算を亂して逃走した。默音も敢て追討せず、軍を白濼に駐めて以て之が備とした。然るに霧霰河に敗れた斡罕は再び熱河の諸地方に現はれ兵を用ゐて附近を亂すことを止めなかつたので、世宗は驍騎數萬を發して左都監高忠建を總兵とし、又右宣徽使亨は北京路都統となり完顏德濟之が副となり賊の征討に從事せしむることにした。而て中央の軍官及西北路に於ても更迭があり志寧は右監軍となり、依然として西北路に駐し、默音と元右監軍福壽とは中央に召還せられ、代りに布薩忠義を以て平章政事兼右副元帥となして契丹經略に當らしめ、宗叙は兵部尙書に宗尹は河南統軍使に富察世傑は西北路副統に任命せられたが、幾くもなくして賊軍は急に攻勢を取り出したので、世傑は左翼宗亨と共に之と和托(無考)に戰つたが利あらず、左翼軍萬戶孔拉の奮擊と宗叙の援兵とにより愈々之を退却せしむることを得たが、忠義及志甯の聯軍は斡罕の西走を梟嶺(臨潢の西南にあると云ふ、察するに多倫附近であらう)に追及し、次いでその西方なる陷泉に之を追ふた。然るに翌日敵は騎兵三萬を以て水を涉り

東に進軍して來たので官軍は先づ南方の岡に據つて偃月の陣を張り、歩兵を中央に騎兵を兩端に備へて賊をしてその首尾を判然せしめざる樣にした、會會此日大霧がありて天地晦冥、幸にして敵の眼をかすめて陣形を正すことを得たのは官軍に取つて大なる利益であつた。既にして霧やや霽れ賊軍は官軍の左翼の南岡に據るを發見したが敢て撃たず、反對に右翼に迫つて來た。烏延拉札力戰して賊稍卻くを見、志甯は諸將を率ゐて敵の背後に出で大いに之を撃破し、逃るを追ふて水を渉り、呼吸をもつかすに攻め立てたので、人馬相踏み死するもの數知れず陷泉も支ふるに暇なく斡罕の弟僞六院司大王諸爾は生擒せられ、斡罕は僅に數騎を具して脱出するを得るの慘狀であつた。その殘部は爪爾佳清臣や志甯の追及に會ふて悉く俘虜となり雜畜の如きはすべて官軍の爲に沒收されてしまつた。

逃れ出でた斡罕は南下して奚部に入り散卒萬餘人を合して古北口、興化(承德)間に倘その餘勢を擧げて温特赫阿嚕岱の軍を敗つたりしたので、獸音は再び詔を奉じて之が討伐に向ひ完顏思敬は所部の兵を以て之を助けたので賊の降服する者甚だ衆く、且つ惡疫の流行に死するものが多かつたので賊軍士は復た鬪志なく斡罕

の勢は愈々窮まつて行つた。斡罕も勢の非なるを見羊城(獨石口外ならん)より西方に逃走し西夏に至らんと謀つたが、北路都統完顏思敬、西北路詔討使唐括孛古底等本路の兵二千を以て、地形の要衝の地に守備を置き且つ自ら狗樂(興和城北)に軍を駐めて、契丹出沒の地を窺ひ、又遠く斥候を派遣して賊至らば晝夜を分たず、之と戰ふと云ふ嚴重なる警戒振りだつたので斡罕も遂に西するを得ず北方沙陀に奔つた。時に志甯は賊を朔和卓を捕へ殺さずして之に方策を授け若し斡罕を捕へて來たならば悉く從前の罪を許し且つ之を錄用することを約した。約の如く朔和卓はその年の秋九月斡罕を執へて思敬の軍に詣つたのでさしもに橫暴を逞しふした契丹も遂に亡び、斡罕は勿論の事、その妻子姪弟まで悉く殺され、前節度使順僞樞密綽哈及その家族三十餘人もやがて捕へられ僞監軍納延、僞都元師酬格等も投降した。その餘の殘黨は志甯、淸臣等の追擊に會ふて燕子城(興和城)に獲られ、茂巴勒達に逃げたものも間もなく捕へられ、茲に全く賊軍はその影を沒してしまつたのである。於茲世宗は斡罕の首を京師に梟し其手足を礫にした。そして北滿にゐた例の瓜里も南方に逃奔したので思敬を以て右副元師とし、忠義を擢でて右

闍相に任じ志甯をば左副元師と爲した。そして朔和卓は約の如く同知節度事に任ぜられ、北方は之に依て愈々事なきを得たのである。

## 第四　世宗の治世より金の南渡まで

世宗の卽位以來の事は大部分契丹の討伐によつて盡きると云ふてもさしつかひないが、何しろ海陵王の亂政の後を受け繼いだ事とて、內治上に於ても爲すべき事は多多あつた。皇室費の異常なる膨脹は奢侈に起因し、文官の腐敗に伴ふ賄賂の如きはその尤なる者であつた。中央に於ける此の弊政は地方政治にどれだけの影響を與へたかは察するに難くない。加之遼との交戰から引續いて南宋との中原爭奪戰があり、愈々にして之と和戰するを思へばまるで地方の統治を念頭に置かない亂暴なる政治が始まり、それも數年にして再び北邊に二箇年以上も兵を動かさねばならなかつた事は、如何に北方の民族は戰の民族であるとは云へ、地方人民の困憊に伴ふ、中央政府の政治的將た、國際的不安は見逃すことが出來ない。いや、それはあまり顯著であつたと云ひ得るだらう。斯くの如き動搖の中に唯一人

自立して帝を稱した世宗であるから、その不安を人一倍感じたに違ひない。しかも即位後一箇年以上は相當の大兵を動かさねばならなかつた事は彼の自覺をして益々深刻ならしめたものだ。今世宗の內治振りを點檢して來ると先づ極度の節儉が目に付く、管弦の樂を悉く宮中から撤した事や自分の膳部の數を減じた事などは普通の事で、後には食の半ばを減じたとさへ見ゐる。又彼は賢を用ゐ不肖の臣を斥くるを常に念頭に置き、寬大に諫言の道を開かしめて虛心坦懷に之を聞き、むしろ諫言せる者を咎めるが如き有樣であつた。且つ又彼は地方人民の戰禍の爲に苦しめらるるを救濟せんと粟、帛等の能ふ限りを與へたりした。北方の帝王が最大の樂である狩獵さへも、之を敢て行はなかつた程、皇室の節儉に心懸けて地方人民を賑はすことを忘れなかつたのである。その第一に賑賜にあづかつた者は山東の百性であつた。彼等には粟、帛を與へたのみならず無妻の者の姓名を具して上奏させた所なぞは、仲仲に味な用意である。又河北路陝西路等より徵兵した征南の步軍を裁して故鄉に歸らしめ、又咸平、濟州等の滿洲地方の人民三萬を京師に遷して自己の周圍を固めたりした。此時に於ける山東には盜賊の橫行甚

だしく、無妻の者の姓名を上奏させたのも此故であるが、世宗は此等盜賊の招諭策を講じ、賊を避けて他國に流浪するものを歸國せしめて本業に從事せしめ、盜賊等も招諭に應じた者は殆んどその罪を問ふことをしなかつた。大定二年の八月には河北東路の諸關稅を廢したことさへ見ねてゐる。翌年には山西路に賑賜して陝西を招諭し、灤州(直隸灤縣)の飢民を山西に移し、日日その道路上に在つて食を給したりした。又特に官を派遣して中都以南の蝗を捕へしめ且つ侍郎魏子平等を諸路に分派して農桑を勸め、その爲に昨年分の諸路の租稅を免ずる程の善政振りを示し、特に山西路の貧民には六十日分の糧米を給したりした。又人民のみならず地方官吏に對しても贓罪を犯すものあるときは容赦なく之を罰し、世宗親らも近郊に農家の稼耕を觀たりしたのである。又察哈爾の地に於ても戶部郎中曹望之の請願のままに大鹽灤(一名魚兒灤、撫州附近)に官を設けて製鹽及其買賣を司らしめ、民をして米と之を交換せしめ且つ部落を作つて邊圉の固とした。此の爲に、その後官の貯米數十萬石に達し、飢饑の年と雖も此の貯米を以て充分に撫州一帶の人民を濟ふことが出來たと云ふ。そして

契丹の剽掠に會ふて妻子を質として奪はれた者共の爲に之が回收を命じ且つ流民を招致して業に復さしめて官田を制し之を契丹の猛安謀克等の各戸は悉く、之を女直に分隸せしめた。そして之等地方の名稱はすべて漢以來のものを襲ふこととと定めた。長城、燕子城の類は之である。特に白石門から野狐嶺に至る間の高原と平地との界は河が多くて、民は多く此處に耕植してゐるので官を派して耕地の數を調査せしめたりした。此地方は雜畜の往來はあるが放牧してはゐないのである。

以上の如き內治に對する努力は今後二十餘年の間少しもゆるむ處なく行はれて行つた。免税、救貧は云はずもがな、司法に情宜を挾むことを嚴禁して民の據るところを知らしめ、親らも亦閑暇を盜んで、或るときは銀山(京兆昌平縣の東北)に或る時は霸州、固安等に又或るときは、望雲(口北道赤城)に行き、金蓮川(沽源縣管內)に行つて望國崖を靜寧山と改めて命名したりした。その途中には常に效貧撫民の方法を爲すことを忘れはしなかつた。大定十六年の旱魃の際は使を派して此の山に於て雨乞ひを行はしめたところが間もなく大雨があつたと云ふ。之れも世宗の

仁政を賞ねたものの一つであらう。

此時代に於て黄河の洪水がしばしば起り、堤防が決裂して河南、山東の野に濁水の暴れ狂ふたことも書き加へねばなるまい。然しそれは只世宗が特に治水の官を設けて多大の力を濟民救濟に用ゐたことを云ふに止めて置かふ。黄河が再び舊河道を通じて江蘇省に向つて流れ出したのは、此後間がなかつたのである。此時代の黄河の沿水は水流を何れか一方に向つて流れしむるのを唯一の方法とした。何故ならば新舊兩河道に夾まれた土地が最も氾濫の害を受けることが多かつたからである。

然らば世宗の對宋政策は如何であつたらうか。それは前にも述べた如く大定二年春正月、河北、山東、陝西等の各路より派遣した征南歩軍を各各放還して故郷に歸らせた事を以て察しがつくだらうと思ふ。しかしそれは中央政府の方針でこそあれ、地方的に宋軍との小競合ひは絶ね間がなかつたのである。それもすべて宋からの挑戰に據るものでないことは云ふまでもないが、金軍と雖も宋の社稷を脅す程には進まなかつた。脅そうとも思はなかつたに違ひない。政府と政府との

間には大事ある毎に親交の儀禮が宋によつて致されてゐたからである。金が宋に向つて此儀禮を行はなかつたのは蠻民固有の自負心に基いたものであると解いた方が妥當だらうと思ふ。すでに太宗の時に於て宋は金に向つて臣の禮を執ることを約したこともある。此の自負心がやがて士卒の頭にも浸染し、それが諸將の意を動かし、やがて又政府の政策上にも影響を與へたのは止むを得ない。

時に宋にあつては高宗が退いて孝宗が即位した。新に國政に任じた者は主戰論者の帝史浩、張浚等であつたから、先づ師を江淮の間に督せしめ、遂に北伐の意圖を表はしたのである。斯して宋金の交戰は再び始まつた。金軍の征南諸將は、右副元帥完顏思敬の司揮の下にある。經略南邊河南統軍使宗尹の一隊と、右丞相布薩忠義、紇石烈志寧の大軍がある。彼等は河南より江南に進出したのみならず關中にも侵入して陝西までも征服したが、宋軍も仲仲に手強く、河南統軍使奚托卜嘉等が金に叛して宋軍に投じたりしたので、戰には勝つたが可成に苦戰をしたことは大定五年の和議の際には歲貢を改めて歲幣として十萬の數を減じ、君臣の禮を用ゐて再拜することは同じであるが、金使の來たときに坐を下つて書を受くる禮を

止めにして始めて宋皇帝と稱するを得たことなどから推し得る。此戰爭と雖も內治に念慮を煩はしてゐる世宗に取つては、賣喧嘩を買つたものに過ぎなかつたことは否まれぬ。何故ならば今後宋にあつては、帝を始め、常に回復の志を持つてゐるものが多數居たのであるが、北方は世宗の仁政により民心が大に定まつてゐる有樣だつたので如何とも手の出し樣がなく孝宗の志は遂に成らなかつたからである。斯くの如くして立派に中與の大業を爲した世宗は、その末年に於て閑暇を得る每に杖を諸方に曳き、民を撫卹することを忘れず、大定十八年には、西南、西北、兩路招討使に命じて饑民を救濟せしめ、又二十二年には山後に行幸して官田、民戶の刷淸を命じたりした。殊に彼が崩去の前年卽ち大定二十八年には女直大學の建設を命じ、宿德高才の者を以て之が敎授に任命したことは、北方の天子としては仲仲に得難い遠慮である。

世宗の死んだのは二十九年の正月で、皇太孫璟が卽位したが、年號が明昌と改められたのは翌年である、之を章宗と云ふ。大定八年七月の生れで、大定二十六年以後は右丞相として國政にも參與してゐた。彼は卽位するや今年の租稅は悉く之を

免じ、且つ鰥寡孤獨の者に絹一疋、米二石を下賜して大いに世宗の仁政に模ひ、且つ率先して官規の蕭清を期し提刑司を置いて九路に按置し勸農、採訪、屯田、鎭防の事を兼ねしめた。宋に在つても孝宗內禪し、子の光宗が卽位したのが此年である。しかし官規が次第に漢制に化して行つたことは爭はれぬ。孔子廟の修築は固より、常平倉の設置又は國史院に於て、主として契丹字を用ゐた者を廢止したり。本朝の言語を禁じたりしたに至つては、あまりに甚だしい。

內治に對しては世宗の轍を踏んで、盛に節儉を行ひながら力を致したが、世宗に依て愈愈挽回された北邊の頽勢は又又此時代の初に於て、色彩が顯かになつて來たことは、むしろ止むを得ないと云ひ得やう。此爲に明昌五年の秋には臨潢に兵備を修めたと見ねてゐる。そして六年の正月には北邊の騷擾が報告された。次いで慶州が賊の爲めに包圍されたと云ふ通知があつた。慶州は臨潢の西、元寧軍のあるところで、現在の巴林の西、林西附近である。此の賊は招討副使裕爾伯特の迫擊に會ふて逃走したが、此時から北邊は何となく不安の勢を釀成して來た。五月には左丞相瓜爾佳淸臣が臨潢に駐在して之が安定を謀る爲、兵を動かして不穩の

徒の掃蕩に從事し、伊喇敏を都統とし、安顏安國を之が副とし、前隊を組織し、自らは精兵を撰んで後隊となり哈里河に出動した。そのときには既に前隊が栲栳濼に至つて營(部落)十四を攻めて之を下してゐたので色徹掩、北準布等も羊馬、軍械を持參して淸臣の下に參じてゐた。しかるに淸臣は彼等が財物を以て自己の罪を逃れ樣としたと云ふて北準布を罰したりしたので彼等は直ちに反目して淸臣の下を去り到處侵掠を事として暴れ廻ることとなつてしまつた。之れに依て北邊の不安は愈具體的になつて來たのである。斯くの如きが故に是年の秋九月には尙書左亟瓜爾佳衡に命じ、兵を率ゐて、察哈爾の撫州に駐せしめ、地方政治の全權を與ふると共に親軍、武衛軍各五百人を選んで彼に從はしめ錢五千萬を給して之が軍餉に充てしめた。又右亟相襄を行省事となし駙馬都尉布薩揆等を率ゐて敵を望雲(赤城)に敗り、遂に軍を大鹽濼に進めて四方の諸部落を平定した。呼必紀と呼ぶ者なども此時投降して來たものである。然し襄は尙兵を休めず完顏光をして烏魯斯城に出動せしめ又一支隊は東方龍駒河に向つた。此れを東軍と名付ける然かるに東軍は龍駒河に於て賊の爲に圍まれてしまつたので、襄は馳せて之を救ひ

合撃して大いに之を破つた。敵は斡里孔河に奔り再び完顏安國の追躡に會ふてその衆悉く四散してしまつた。斯くして一と先づ賊の掃蕩が成つたので、西南、西北路より臨潢を經て泰州(科爾沁左翼前旗)に至る一帶に萬里長城式の濠塹を開築し、大兵を之に備へんとして三萬人を役して事に從はしめたが容易に成らず、しかも土地が高原平沙の事であるから一朝大風の起ることあれば切角の濠塹も平原と化してしまふ樣な有樣だつたので地方人民の苦惱は大抵ではなかつた(興和城の西約百支里の地に南濠塹なる地名あり)斯かる中に明昌七年は暮れ翌年の承安元年には正月に於て大鹽濼の群牧使伊喇覩等が光嘉喇部の兵の爲に急撃せられ敗死したので襄は左亟衡至と共に軍を察哈爾に還し西北路に於て陣亡した將士を祭り九月には燕京に凱旋して常山郡王に封ぜられた。此時襄は配下の兵を多く西北路に留めて例の濠塹の開築に從事せしめ自らは北京(大定府)にあつて省事を行ふことにしたものである。

斯くの如き際なるにも拘らず、章宗は景明宮に行幸して暑熱を避けんとしたことがある。此時群臣の極諫した言葉が當時の察哈爾の狀況を明確に表はしてゐる

らしいから掲げる事にする。卽ち曰く「昔、漢唐の帝皇が避暑した事はありますけれども皆京師の近傍で、今度の如く金蓮(獨石口外)の樣な遠い所には御出がありませんでした。金蓮は京師を去る千里、沙漠に隣し、關嶺を隔つこと甚だしい。萬一變事があれば何を以て之に應ずることが出來ませう。のみならず行幸の途中、民を煩はし財を費すことが少くありませぬ。今民間の困貧が如何に甚だしいかを御察し願たい。」

間もなく北準布は復び反旗を飜し、又信州(長春の南)に於ても群牧契丹圖卜蘇德壽等の反亂があつた。左亟相襄は是に於て宗浩を遣はして泰州に出動せしめて東方の賊に對せしめ、撫州簽書樞密院事完顏匡には親軍八百人を授けて西北路に對せしめたのである。完顏匡卽ち、西南路通事黃掴安の援兵を得て賊を破り、左亟衡も亦準布の軍を臨潢附近に破つたりしたので、色徹部の如きは、撫州に詣つて降を表し察哈爾北部は悉く平定した。そして泰州に於ても、戰は賊軍の大敗に終り、その過半部は款を納れる如き有樣だつたので、之れで一と先づ北陲の安定は保たれたのである。時に承安二年、翌年には、邊事大定の故を以て大赦を行ひ、亟相襄以下將

士にそれぞれ行賞するところがあつた。のみならず今後は北邊に費した力を內治に致し、官民の現銀使用を省く爲に、預金の法を定め、此預金に對して兌換劵を發行して使用に便せしめたり、科擧の法を定めて賢才の登用に意を致したり、或は金國の婚嫁の禮制を定め、或は職官の追贈法を定めたり、或は又審官院、普濟院を設立したりしたものである。そして泰和六年には例の小鈔(兌換劵)の使用を京師以外の諸路にも許した。西北路及西京路に於ては撫州と西京(大同)とに於て官庫を設け、戸部に命じて少鈔五等を發行して各路に分布し、錢と同樣に使用せしむることにした。然るに張煒なる者が桓州刺史となり察哈爾一帶の出鹽の盛なるを見て、之を米と交易するの可否を中央政府に請ふて來たことがある。政府も煒の言を信じて彼を宜差西北路軍儲となした。彼は於是、商賈を募り、その交易を彼等の自由に委し何路の商賈たるを問はなかつたので姦人は往往賄賂を納れて、その交易を獨占し、暴利を占むるのみか大に人民を苦しめることがあつた。隣保の如きは即ちその一人である。彼は口を極めて張煒を說き、遂に彼をして多大の出金を爲さしめ專賣權を獲得してゐたが、暴利を得るや、彼はそれを提帶して逃亡を企てて

しまつた。張煒は驚いて彼を逐ふて捕へ、その代價を爲さしめんとしたが、成らず西北路は之が爲に大いに疲弊を來したのである。駐屯軍の軍餉の如きももとより足る筈がなく、故舊の皮革、毛皮を以て之に代らしめたが服せず、皆之を路に棄て去つてしまふ如き有樣であつた。依て政府は張煒を西北路より召還し中都判官王謙をして、之に代つて煒の失政を救濟することとした。王謙は卽ち桓州に至つて散失錢物を詳細に調査し、罪ある者は悉く之を獄に投じてしまつた。時に章宗の晩年、泰和八年で承安なる年號は僅か五年にして廢されてしまつたものである。地方的にも以上の如き失政を見るが中央に於ても亦、樣樣な善政の試みは行はれたけれども、承安から泰和にかけて、李妃の干政鄭王、鎬王等の誅死等があつたりして內面は割合にごたついてゐたものである。只北陲の事に就いては多少ならず當事者の念慮を煩はした者と見ゑて、盛に漢制を採用しながらも章宗はその晩年に於て女直人が漢姓に改めたり又は漢人の裝束を學ぶことを禁じたりした、のみならず、崩御の時には臨潢から泰州に至る一帶に邊備を整ゑることを固く勅諭した程である。たとひ宋軍が江北に出動して來たと云ふても、金の社稷を動か

す程の勢は有り得ない。愈く江北の野に於て對峙の勢を持し得るのみであつた。極盛期は過ぎたけれども、金軍の馬蹄には尚嘎嘎の響があつたのである。斯の如きを以て北方民族の蜂起を見ないうちは、金の天下は至極太平であり得たのだ。泰和八年冬十一月、章宗に嗣いで帝位に卽いたのは衞王永濟である。彼は世宗の第七子で大定十一年旣に薛王に封ぜられ章宗の世には衞王に改封されてゐた者である。彼か卽位の翌年は年號を大安と改め、前代の執政を踏襲して、大いに節儉を行ひ又民治にも力を致したが、金國も最早や下り坂にあることとて人間の努力は天運を阻止することが出來ず、暗い影が次第に濃くなつて行くその暗い影は先づ天變地異となつて現はれて來た。或る時は箒星となり碧色を呈しつゝ西方に消ゑ、或る時は白日に流星が降つて宮垣に入り光を發して赤龍となり大音響を發し、或る時は又飛星あつて天上に火を發し、又或るときは北方に黑煙の如き空か表はれ、大道の如く直隷の野に廣ごり、地上にあつては地震、旱魃、大風等しばしば來つたと見ゑてゐる。此等不祥事の發現のうちに大安三年は暮れて、崇慶と年號は改められたが又もや大旱に襲はれ、河東、陝西は大いに苦しみ、加ふるに大颶風の襲來

があつて帛一段を高さ數十丈に卷き上げ、飛び動くこと恰も龍の如くであつたと云ふ。翌年又もや年號を改めて志寧と名付け、先づ河南、陝西の饑民を賑はし且つ遼東に向つても撫諭の詔を下したりして、民心の不安を除かんと謀つた。然るに三月末に至り、又もや太陽と月とが同時に、しかも、相去る尺餘の地に並んで見ゐたりして人民の不安は少しも薄められはしなかつた。

是等天變地異と相待つて金國の礎に事實上の動搖を與へたものは北陲の强の蜂起であつた。今までも宣言こそしないけれども北滿地方の部族は各自獨立國の形勢を持し、今の吉林及黑龍江方面に金の指令はすでに行はれてゐなかつたことは最早や多年である。特に今の呼倫貝爾附邊に蔓衍してゐた黑韃靼部は英雄兒鐵木眞の出生により大いに勢を得、附邊の部族を合して愈愈强く、遂に乃蠻の太陽汗を西遼に追ふて大漠を渡り、西夏に進出して之に貢物を約さしめて和を結び、愈愈漠北の大部衆を率ゐて金に反抗を謀つたのである。時にまだ、衞紹王の大安二年であつた。

此由を聞いて金廷に於ては直ちに宣德行省(宣化)に勅使を派して軍士を慰撫して

その萬一を警戒し、京師には又戒嚴令を布いたり、民間の馬を徴收して軍備を修めたりしたが頽勢は最早やどうすることも出來なかつた。それで翌年元兵が西方に進出して來たとき、西北招討使鈕祜祿哈達を使者として、之に和を乞ふより外はなかつたのである。しかしその和はもとより元軍の許すところとならない。金と雖も亦、あまりそれを期待しなかつたと見ゑて平章、通吉、僊嘉努、參政和碩、行省事西京留守赫舍里呼沙呼等をして邊備を修めしめた。しかし盛に軍士の慰撫に努めねばならなかつた事は新興の元軍に對して何よりの缺陷であつた。此缺陷を知つてゐるが故に、本陣を撫州より退かしめて宜平(萬全の西、懷安の北)に駐せしめることにしたのである。しかし河南大名路より備邊軍士中逃歸する者が多數あるが如き有樣で、すでに戰はざるに元軍に呑まれてしまつた形である。それからあらぬか、此年の九月僊嘉奴、和碩等は萬全衞の西なる會河堡に破られ、次いで烏沙堡(興和城の西)の役にも利を失ひ爲に遷嘉奴は解職され、和碩之に代つて兵事を督することになつたが、それも逃げて野狐嶺(獾兒嘴)に至り、再び敗られ、大水濼豐利等も奪取され和碩は身を以て逃げて宣德に至つた。斯くの如き有樣を以てしては宣

德と雖も何條保つことが出來やう。元兵は一兵をも血ぬらさずして居庸關に迫ることになつたのである。東方に進出した者の外、察哈爾の高原を驅け下つた元軍のうちには、西方にも馬首を向けた者があつて、宣平は勿論の事、白登城(陽高附近)をも陷れて西京に迫り西京留守呼沙呼、交戰に及ばずして遁逃し、遂に西京も元軍の奪取するところとなつてしまつた。斯くの如きが故に金帝は呼沙呼の請のまゝに兵三千を派して、如何にもして宣德に於て元軍を喰ひ止めんとし、上京留守圖克坦鎰を右丞相に任じて京師の戒嚴を更に固くしたのである。此鎰を右丞相に任じたに就ては又理由がある。それは、最初に元軍が西方から西北路に攻め上ると聞いた際に、鎰は、察哈爾の地の重要なるを知り、自ら彼の地に至つて百姓を慰撫し、その一致を謀らんとしたが帝之を許さず、依て鎰は第二策として昌州(撫州の西北)桓州、撫州の人民を長城內に引き入れて、一城に據つて元軍を禦だならば、察哈爾は由來富庶で、人は皆勇健であると稱されてゐるから必ず元軍をして京師を侵す樣な事はさせないに違ひない。斯くすれば又人畜貨財を失ふことも僅少であると說いたが參政梁瑺等は之を以て自ら境土を蹙るものであるとし反對したので

遂に行はれなかつた事がある。それが今や三州の地は元軍の據るところとなり、西京、宣德の守りさへも失ふ樣な結果を來したので急に鎰を採用することになつたのである。

然るに新に右副元帥に任ぜられた呼沙呼は宣德に據るを得ずして退いて嬀州(懷來)に駐することになつた。又泰州方面には刺史珠格高琪があつて諸軍を撫し、古北口に屯する者には萬戶奎騰があり、陝西軍の將士は之を中都大興府(順天)に召換することにして守備を嚴にした。間もなく崇慶元年正月呼沙呼は元の大兵に不安を抱きむしろ居庸關によつて防禦するの得策なるを思ひ南口(直隷より居庸關に入る口)に退いた。それも五月に至つて陝西軍の着京を機として、自らは京師に至り二心ある者を誅すと稱し、先づ福海を執ねて之を殺し其兵士を奪ひ、次いで左副元帥圖克垣南平及其子刑部侍郎默嚕を殺して政府の實權を奪ひやがて福海の子符寶珊延の報仇戰を破り都統實古納も共に之を殺し、東華門より宮城に逼り、國璽を奪はんとしたが直親軍士に阻まれて成らず遂に宦官李思忠を派して、帝を殺してしまつた。時に志寧元年秋八月である。然るに泰州刺史高琪は呼沙呼と共

に京師に在り通元門の守備に任じてゐたが、急に呼沙呼を撃つて之を誅し、豐王烏達布を彰德府に迎へて卽位せしめ年號を貞祐と改めた。之が金の宣宗である。そして高琪は左副元帥となつて實權を掌握することになりやがて宣宗と共に中部に還つたのである。

元來高琪は呼沙呼の配下にあつた者で、口北道に元軍と戰つた事があつたが常に敗戰のみで未だ曾て勝つたことがなかつた。それで呼沙呼の爲に大いに辱められた事がある。その恨を返す爲に呼沙呼をその宅に圍んで殺したのである。

金軍の中堅が以上の如き不統一に陷つて蠢動してゐる間に、元軍は遠慮なく入關し、先づ古北口の破れたのを最初として、西に在つては德與府(保安)が敗れて居庸守らず次いで元帝自ら紫刑關を出でて金師を五四嶺(易州の西南百二十支里)に破り、宣宗卽位後間もなく涿州も元軍の馬蹄に踏まれてしまつた。破竹の如き元軍の勢は高琪如き凡庸の宜く防ぎ得るところでない。彼に和を求むる如きは愚の愚である。何故ならば萬策最早や盡きたからである。萬策盡きて尙和を乞ふ如きは降を申出でると大差がない。その和の成らぬことを知りつつも萬一を恃んで

ゐたところに高琪の凡庸さが現はれると同時に、金師の命脈が殆んど絶ゐ絶ゐになつてゐることを見得るではないか。元軍か遂州より更に良郷に迫り、中部直隷、悉く元軍の馬蹄に踏まれて愈くにして中部落城と決し船四千艘を備ひ南京(開封)に向つて中都を發したのが貞祐二年夏五月であつた。然し中都は仲々陥落はしなかつた。帝も亦親軍六千餘、新募の兵二千餘を遺して之を救援させたりしたので、翌年五月都元帥承暉等の奮戰も甲斐なく遂に落城するに至るまで約一箇年間保つことの出來たのは敗殘の金兵としては悲しむべき努力であつたに違ひない。然し元軍の鋒先は中都のみには向はなかつた。中部に向つた者は元の御大鐵木眞の率ゐる中央部隊の一部で、求赤、察哈臺、窩濶臺等の軍は右翼軍となつて太行山に沿ふて南下し、大いに太原、平陽の間を掠めて直ちに黄河に至り、薄察等を將とする左翼軍は又海に遵つて東し、欒薊を破つて大いに遼西を犯してゐたのである。南京に至つた宣宗は河北諸路宣撫司を罷めて經略使を置き、以て元軍の備を爲さしめ、左監軍烏庫哩德は太原にあつて、その南下を防ぎ西安節度使呢瑪哈富勒呼は潼關の守備となり、共に半死の金國の爲に最後の勇を奮ふたが勢を既倒に回復す

ることは覺束なく、貞祐二年汴京に至つてから約九年間(貞祐四年、興定四年光元一年)中原に金國の餘威を保ち、次の哀宗が元、宋の夾攻に會ふて南京を棄つるに至るまで合計約二十年間の命脈は、さすが北國の雄と領かせる。然し金が南渡以後は察哈爾は最早や金國の支配下にはない。貞祐二年以後の察哈爾は元史の中にその成り行きを記さねばならぬ。故に金國と察哈爾とは玆に至つてすつかり緣が切れてしまつたのである。

只、西翼察哈爾の形勢を客觀するが爲に、西夏の興亡を記さねばならぬ事を忘れてはならぬ。

## 第五　西夏と察哈爾

そもそも西夏は後魏の托跋氏の後で大甯衞(金の北京路)の西北なる松山に居た者であるが、遼代に西方に追はれて銀州(楡林附近)に在り鄂爾多斯より陝西、甘肅一帶に渡つて藩鎭の禮を以て中原の政府に貢物を進めてゐた者である。此の事は、遼史に詳細に述べてあつた筈であるが、遼末、遼主の爲に夏將李良輔が三萬の兵を率

ゐて金軍と矛を交へた以來、金軍もその鋭鋒を認め、且つは中原に乘り出す勢を、西夏討代の爲に分割するの愚策なるを知つて天德、雲內(茂安明の西、烏剌特旗)を取つたのみで、河を以て界となし、鄂爾多斯、陝西の地は之を西夏の領土と認め、且つ藩鎭の禮を取らしむることを約して之と和を講じたのである。斯くして西夏は、その國が西北隅にあつてあまり中原の勢は影響を及ぼさなかつたので、外國との關係は割合に平凡に過ぎて行つた。しかし、金國も次第に全盛期を過ぎる頃からは、その壓迫の減じた故を以て、陝西の南部に時々兵を動かして奪取を行つたりしてはゐたが、もとより大勢に干係を及ぼさない。金に對しては東勝州を榷場と定めて商業上にも相當密接の關係を持續してゐたのである。然るに元軍が蜂起して、察哈爾の地に於て金軍が敗績してからは、次第に綏遠地方に向つても兵を動かし葭州(山西臨州の西黃河の對岸)などに攻め寄せ始めた。それも金の邊將の爲に敗られる如き始末であつたから金に取ても又元に取つても大した影響は來さない。只之に依て西翼察哈爾及綏遠は常に西夏の人の往來があつたことを想像すれば足りると思ふ。それも、山西との關係の如く政治上にも、商業上にも密接の關係が

あつたことから比ぶれば、極々僅少である。北方から逃遁するときは、西夏に入るのが順であるが一度西夏に入つてしまへば、再び東又は北に立ち戻るよりは、西又は南に下つて甘肅、陝西方面に至つた方が遙に有利なる地形にある。萬里の長城は楡林の北に築かれてある。しかし、それは潼關の守りに對する最前線に過ぎない。楡林は、鄂爾多斯及陝西北部の政治的中心地ではあるが、中國が邊外に對する防備の要塞とはなり得ないのである。故に西夏の事は只、金の哀宗の正大四年に元軍の爲に亡ぼされた事を付け加へただけにして止めて置かふと思ふ。

以上を以て金國と察哈爾とを結んだ、様々な原因や結果を記き並べてしまつた。此の間凡そ百年、もとより金國の近畿としては中部燕子城で察哈爾は只西北部の邊防地ではあつたが、察哈爾位重要な邊防地は先づない。若し察哈爾が敵の寄るところとなれば、最早や燕京は危機に陷つた者なのである。元軍が北滿に興つて西方に進出し、西夏より察哈爾高原に攻め寄せた事は最も明確に之を證明し得ると思ふ撫州の落城後元軍が直隷の野にその雄姿を現はしたのが僅に一年有餘の間であつた。たとひ廢頽に傾いた金軍であるとは云ひ南宋に對しては依然とし

てその强を誇り得る彼であり、又金軍も西京路討伐の爲に軍士を割いた事などなから察して決して長い月日ではない。況んや口北道の地は北よりするときは守るに易く、攻めるに難い。後方には萬里の長城が嚴然と控へて、その通路には居庸、紫刑等の艱關があるに於てをやだ。卽ち察哈爾の地はその燕京に對すること恰も我が江戸に於ける箱根山と同一づあると見て宜い。

察哈爾を中心とせる漢蒙兩族闘爭史前編終

大正十年六月二十日印刷
大正十年六月二十五日發行

南滿洲鐵道株式會社
總務部調査課

大連市大山通七十四號地
印刷者　太田信三

大連市大山通七十四號地
印刷所　小林又七支店